

第1章 協調学習の授業づくりプロジェクト 今年度の展開

本章では、CoREF が自治体等と連携して行ってきた協調学習の授業づくりプロジェクトの令和6年度の活動について報告します。

第1節では、私たちの研究連携の基本的な枠組みについて解説します。

第2節、第3節では中核となる研究連携事業である「新しい学びプロジェクト」、「未来を拓く『学び』プロジェクト」について、それぞれ今年度の活動報告を行います。

第4節では、自治体の枠を超えて、これらの研究連携の核となる先生方を伸ばす試み、「本郷学習科学セミナー」について報告します。

第5節では、学校外の学びの場をデザインするプロジェクトの一例として、「UTokyoGSC-Next」（科学技術振興機構（JST）から東京大学への委託事業）について報告します。

第6節では、今年度 CoREF が講師を務めた関連の研修等について一覧で報告します。

- 第1節 協調学習の授業づくりプロジェクトとは
- 第2節 新しい学びプロジェクト
- 第3節 未来を拓く「学び」プロジェクト
- 第4節 連携の核を育てる～本郷学習科学セミナー～
- 第5節 UTokyoGSC-Next
- 第6節 今年度の研修実施状況

1. 協調学習の授業づくりプロジェクトとは

(1) 研究連携の基本的な枠組み

CoREF では、学習科学の知見を基盤に、平成 22 年度から全国の教育委員会及び学校や学校間ネットワークと連携し、一人一人の子ども達が自分で考え、考えや視点の違う他者との関わりを通じて自分の理解を見直し、深めていく学び（＝協調学習）を教室で実現するための協調学習の授業づくりプロジェクトを展開してきた。

プロジェクトの基盤となる活動は、「知識構成型ジグソー法」という 1 つの授業手法を核として、教材検討、実践、学習評価、振り返りという授業研究のサイクルを地域、校種、教科を超えた先生方と研究者が協同で回し続けることである。

またこうした基盤を維持、発展させるために、それぞれのローカル（教育委員会や学校等）な拠点での研修や仕組みづくり、ローカルな拠点間

のネットワークづくりを行い、それぞれの組織が自分たちの課題に即して実践研究を行いながら、同じ課題を共有する仲間同士のネットワークを生かして発展する関係を構築してきた。こうしたネットワークには、課題に応じて産業界や他組織の研究者等も参画している。

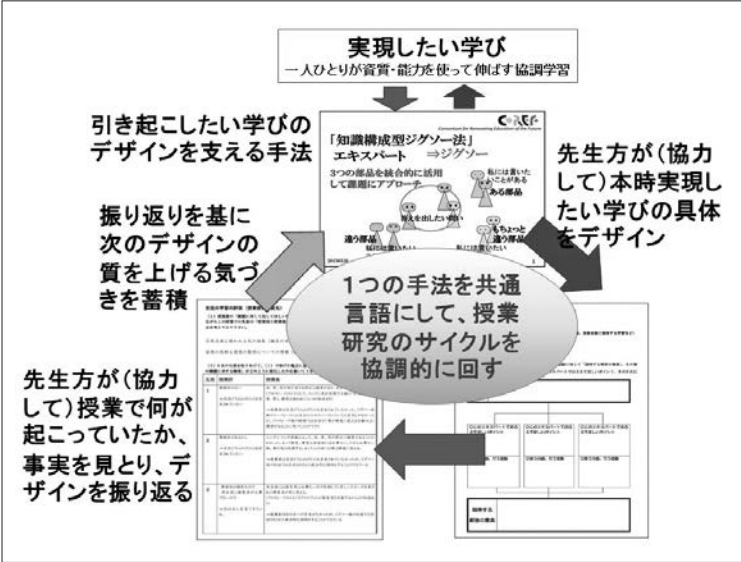


図 1：CoREF の研究連携の基本的な枠組み

実践者	研究者（CoREF）	行政関係者
・「知識構成型ジグソー法」の型を使った授業の実践	・「知識構成型ジグソー法」の型の提供	・自治体の教育課題に応じた「知識構成型ジグソー法」の活用
・オンラインでの協調的な授業デザイン検討		・CMS やメーリングリストによる協調的な授業デザイン検討の場の提供
・研修会参加 ・共通の枠組みでの振り返り	・研修や振り返りのためのツールのデザイン・提供	・研修会参加 ・実践や振り返りの共有化
・新しい課題の発見とそれに即した取組の見直し		

表 1：プロジェクトにおける実践者、研究者、行政の役割

(2) プロジェクトで目指すもの

プロジェクトで私たちが目指し続ける先は、(1) 一人一人が自分で考え、考えや視点の違う他者との関わりを通じて自分の理解を見直し、深めていくような学び方が学校の内外で当たり前になること、(2) そのために、どうしたらそのような学びを（当面教室で）実現できるか、学びのデザインをする立場の人たち（当面教師や研究者）が自分なりの学習科学を行い続けるのが当たり前になることである。また、(3) その先に、社会全体として、すべての人が生まれ持った賢さを十分に発揮し、伸ばし続けていけるような環境をデザインすることが常識化していくとよい。

例えば、私たちのプロジェクトでは、「知識構成型ジグソー法」という手法を使った授業づくりを行っている。みんなが答えを出したい、しかし一人では十分な答えが出ない課題がある環境下で、一人一人が違った、でもどれも役に立つらしい考えを持っているという状況を作っておけることによって、学習者は、(少なくともそうでない状況よりはずっと) 主体的に考えながら、他者の考えを基に自分の考えを見直し、深めることをしやすくなるのではないかと、という仮説に基づいた授業手法である。学習者が自分の持っている賢さをより発揮しやすい／発揮する必然性がある環境、状況を作っておけることによって、その賢さを引き出し伸ばす。これが協調学習の授業づくりプロジェクトの核となるコンセプトである。

そのうえでもう1つ重要なのは、もちろん、(他のどの手法でも同じだろうが)「知識構成型ジグソー法」という手法で授業を進めさえすれば、必ずしも今言ったようなことが起こるわけではないということである。例えば、「一人では十分な答えが出ない課題がある環境」を作っておけるためには、目の前の学習者にとって、了解可能で、かつ一人では十分な答えが出ない課題は何かを学習環境をデザインする側（この場合は教師）が同定し、適切な課題を提示してあげる必要がある。

しかも、それが本当に目の前の学習者にとって適切な課題だったかは、蓋を開けてみるまでは分からない。もちろん、経験を重ねた教師であればより確からしく適切な課題を設定できるようになるが、同じ子ども、同じ授業は二度とない以上、一回一回の授業は常に（これまでの経験と観察事実に基づいて作った）学びの仮説を検証する場になる。

そう考えると、目指す学びをより確からしく実現していくためには、「こんな課題を設定したら子ども達はこう学んでくれるのではないか」「この資料からこんなことを考えるのではないか」といった学びについての仮説を立て、それを実際の授業の中で試していく（＝アクション・リサーチ）ことの繰り返しが欠かせない。この繰り返しの中で、「子どもはこう学ぶのか」「だったらこうしたらより彼らの力を引き出せるはず」と一人一人の実践者が言えること、できることの質を上げ続けていくことこそ、換言すればすべての教師が自分なりの学習科学を行い続けることである。そして、こんな風にすべての教師が自分なりの学習科学を行い続けることは、学びの質を上げ続けていく学校、そのことを楽しみ続ける教師集団につながっていくはずである。

（3）プロジェクトで大事にしていること

協調学習の授業づくりプロジェクトをこのゴールに向けて前進させていくために私たちが大事にしているのは、実現したい学びのビジョンを共有すること、学びの事実に基づくこと、学びのプロセスに着目することである。

授業研究のPDCA（Plan-Do-Check-Act）サイクルの重要性が言われて久しいが、そもそもどんな学びを実現したいのかのビジョンがしっかり共有されていないと、サイクルが次の学びの質を上げることに繋がらない。

例えば、全員が同じ答えを同じように再生できるところを学びのゴールイメージにしてしまったら、子ども達の頭や心はどう働くだろうか？それは実現したい頭や心の働きだろうか？今日のねらいに向けて、他者との関わりを通じて一人一人の子どもが理解を深めていくときにどんな思考や対話が起これるとよいか。具体的なビジョンを持ち、共有することを大事にしたい（とはいえ、これを最初から行うのはなかなか難しい面もある）。

次に、学びの事実に基づくこと。「子どもがどう学ぶか」を問題に授業づくりをしているのだから、授業について語るとき、常に子どもがどう学んだか、つまりいたか、学びの事実在即して語ることは大前提である。そのうえで、今強調したいのは、子ども達は今日の授業の中でどのように思考し、対話しているのか、なるべくたくさんの学びの事実を手掛かりに、学びのプロセスに着目することの重要性である。

例えば、授業の最後に全員が及第点の答えを書いてくれた。これも1つの学びの事実である。しかし、この事実からだけで子ども達がどう学んだか、学びのプロセスについて推測できることはあまり確かではない。例えば、全員が1時間自分なりに考え理解を深めた結果そうなったのか、授業の最初から分かっていたのか、授業の大半はぼーっとして最後先生か誰かのまとめた答えを使って書いていただけだったのか。

学びのプロセスに着目すると言ったときには、子ども達の一人一人の話していること、書いていることを材料にして、授業の前後で子ども達一人一人がどのように理解を変容させたか、その間で彼らは何にこだわって、どんな風に理解を進めていたのか、仲間とのどんな関わりが理解を見直すきっかけになったのか、授業の中での彼らの頭や心の働きをなるべく確からしく推測することを目指している。

子ども達の頭の中をそのままのぞき込むことができない以上、学びのプロセスについて私たちの見とりとはあくまでもその断片的な解釈であり、仮説である。しかし、こうして学びのプロセスを丁寧に見とろうとすることは、また次のPDCAサイクルにおいて、より確からしく実現したい学びのイメージを作ることにもつながり、その質を上げていく。

最後にもう一点、プロジェクトで大事にしていることは、こうしたサイクルを一人一人の先生方の問題にせず、先生方のローカルなコミュニティ、そしてコミュニティ同士のネットワークで回していけるようにすること、そのための環境を整備していくことである。

本章第2節以降では、こうしたプロジェクトの具体的な枠組みを紹介し、今年度の活動を報告していく。

2. 新しい学びプロジェクト

(1) 連携事業の概要

「新しい学びプロジェクト」は、平成 22 年度より開始した CoREF と市町教育委員会、学校等との小中高等学校における協調学習を引き起こす授業づくりのための研究連携事業である。研究連携の中心的活動は、「知識構成型ジグソー法」を活用した授業に焦点をあてた授業研究のサイクルを、住む地域、教えている学校、そして教員歴も多様な実践者と CoREF スタッフが、ウェブ上のネットワークも活用しながら協調的にまわしていくことである。平成 24 年度から「新しい学びプロジェクト」に参加する市町教育委員会等は、「新しい学びプロジェクト研究協議会」という組織を立ち上げ、この研究協議会と CoREF とが連携して「新しい学びプロジェクト」として活動を行っている。

研究連携の具体的な方法として、各参加団体は国語、算数・数学、理科、社会、英語の5教科の部会から任意の部会（複数可）に、研究推進員となる教員を参加させ、研究推進員は教材開発を中心とした活動を行う。研究推進員の数は自治体の任意である。また、研究推進員に加え、サポートメンバーという形で研究に携わる教員も設定されている。参加団体の中には、校内のすべての先生方をサポートメンバーとしている学校もある。

参加団体は、指導主事や学校管理職ないしそれに準ずる職員を1名以上研究推進担当者として用意し、研究連携の事務的なサポートを行っている。また、参加団体間及び研究協議会とCoREFとの連絡業務を円滑に行うために、研究推進担当者の代表が事務局を務める。

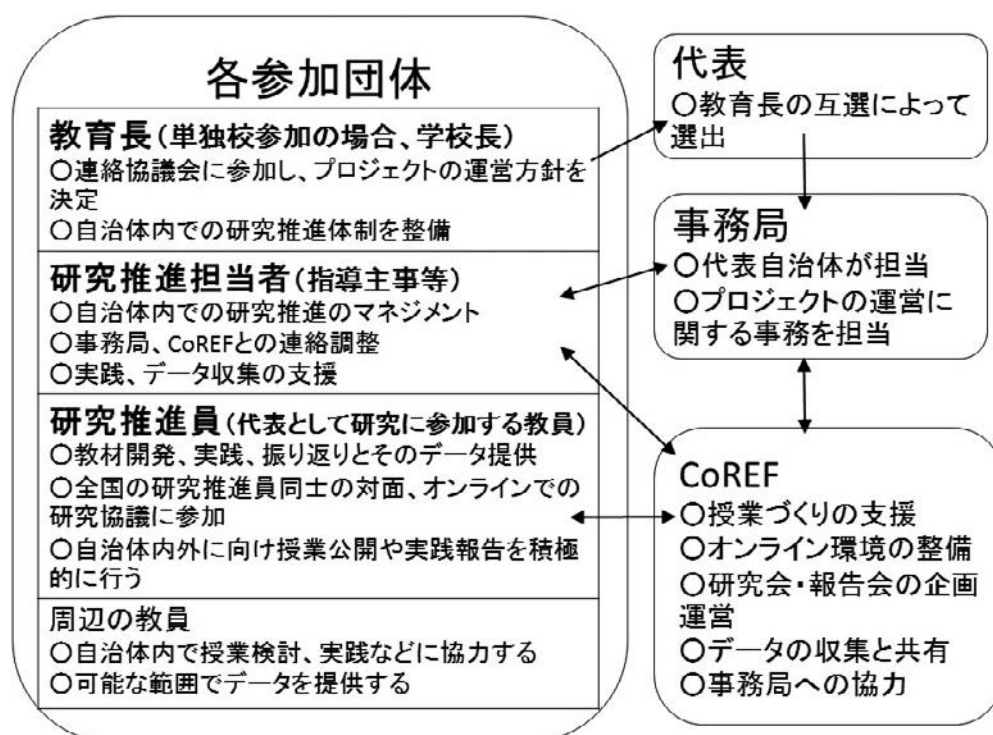


図2:「新しい学びプロジェクト」研究の進め方

(2) 今年度の事業の報告

①今年度の組織体制

今年度の「新しい学びプロジェクト」参加団体は、表 2 の 20 都道府県 30 団体である。「新しい学びプロジェクト」研究協議会は、参加団体から互選で代表、副代表を選任している。今年度の代表は延岡市教育委員会高森賢一教育長（年度途中で澤野幸司前教育長より交代）が務め、延岡市、埼玉県、飯塚市が事務局を担当した。事務局業務の分散のため、今年度より新たに副代表の所属する参加団体も事務局業務を分担している。

【栃木県】宇都宮新しい学びプロジェクト研究協議会、【群馬県】群馬新しい学びプロジェクト・ネットワーク、【埼玉県】埼玉県、戸田市、久喜市、【東京都】東京都市大学等々力中学校・高等学校、品川区立八潮学園【神奈川県】清川村立緑中学校、【長野県】文化学園長野中・高等学校、【静岡県】静岡前向き授業づくりネットワーク、掛川市立中央小学校【愛知県】学校法人中部大学 中部大学第一高等学校、【京都府】京都市立学校新しい学びプロジェクト研究協議会、【和歌山県】有田川町、【大阪府】清風学園清風中学校・高等学校、【兵庫県】創志学園クラーク記念国際高等学校、高砂市教育委員会、【島根県】島根県、浜田市、【岡山県】瀬戸（OKAYAMA）新しい学びプロジェクト、【広島県】安芸太田町、せらにし教育研究会、ひろしま新しい学びプロジェクト研究協議会、みやじま教育研究会、広島市教育センター新しい学びプロジェクト研究会【山口県】山口県新しい学びプロジェクト研究協議会、【高知県】高知県教育センター、【福岡県】飯塚市、【大分県】大分県教育センター、九重町、豊後高田市、【宮崎県】延岡市

表 2：令和 6 年度「新しい学びプロジェクト」参加団体

また、今年度各参加団体から研究推進員として登録された教員数は表 3 の通りである。全体で 218 名の研究推進員が登録された。この他にサポートメンバーとして 1,025 名が登録されており、計 1,243 名が今年度の研究に携わる教員として登録されている。

また今年度は、「協調学習の授業づくりにおいて指導的役割を担う人材」として各参加団体からの推薦で 44 名の「協調学習マイスター」を任命し、研修等でご活躍いただいた。

国語	社会	算数・数学	理科	英語	その他
37	43	56	36	21	25

表 3：令和 6 年度「新しい学びプロジェクト」教科別研究推進員数（名）

②今年度のスケジュール

今年度の事業の主なスケジュールと概要は表 4 の通りである。

a) 連絡協議会

「新しい学びプロジェクト」のビジョンと運営方針は、年度の初めと年度末に行われる教育長、研究推進担当者による連絡協議会で決定される。この連絡協議会では、新規参加

を検討される団体のオブザーバー参加も歓迎している。

b) 研究推進員等実践者の活動

「新しい学びプロジェクト」で実践研究を行う研究推進員、サポートメンバー、参加団体外に異動したOB等の先生方は、参加団体内のローカルなコミュニティでのやりとりに加え、全国のメンバーとやりとりできるメーリングリスト、過去のメーリングリストのやりとりや開発教材を閲覧できる「学譜システム」（第2部第3章第2節を参照）を活用した教科部会での授業づくり、実践報告を随時行っている。このメーリングリストには、令

日程	イベント・会場	概要
随時	授業研究	参加団体内のローカルなコミュニティやメーリングリスト、学譜システムを活用した教科部会での授業づくり、実践報告
5月14日	第1回連絡協議会 @京都市立西院小学校（ハイブリッド）	教育長、研究推進担当者が集まって、今年度の研究推進体制と研究の進め方を確認
7月24日	拡大研究推進員会 （遠隔同期）	午前《全体会》 学譜システムを活用した授業研究のワークショップ 午後《第1回教科部会》 教材検討及び実践交流
7月29日	教育長担当者会議 （遠隔同期）	各参加団体内の研究推進に関する教育長・担当者の情報交換
11月8日 9日	授業研究会 @島根県（対面）	1日目：公開授業研究会 2日目：講演、パネルディスカッション及び実践交流
1月17日 18日	授業研究会 @豊後高田市（対面）	1日目：公開授業研究会及び研究発表、講演 2日目：ビデオ記録による授業研究会及び実践交流
1月25日	第2回連絡協議会／ 教科部会 @聖心女子大学 （ハイブリッド）	《第2回連絡協議会》 教育長、研究推進担当者が集まって、各参加団体の研究状況を交流、全体としての今後の研究の進め方を協議 《教科部会》 教科ごとに実践交流を行い、授業デザイン原則をまとめる
1月26日	報告会@聖心女子大学 （ハイブリッド）	表5参照のこと

表4：令和6年度「新しい学びプロジェクト」年間スケジュール

和 7 年 1 月現在、2,000 名超の実践者、教育行政関係者、研究者などが登録されている。

日常的に行っている授業づくりのやりとりの他に、授業研究に関するワークショップ、実践者による教科部会と管理職・教育行政関係者による教育長担当者会議からなる拡大研究推進会、年 2 回の授業研究会、報告会と同時開催で行う教科部会などの研究会がある。これらへの参加は任意である。授業研究会を除くイベントは、全国からの参加のしやすさを考慮して、オンラインもしくはオンラインと対面とのハイブリッド開催で行っている。

c) 報告会

令和 7 年 1 月 26 日には、「学びをつなげる・学びでつながる」と題し、聖心女子大学を会場にハイブリッド開催で年次報告会を行った。報告会には、新しい学びプロジェクトご関係の先生方 138 名（対面参加 105 名、オンライン参加 33 名）、教育行政関係者、学校関係者、研究機関、一般企業から 97 名（対面参加 27 名、オンライン参加 70 名）の計 235 名の参加申込をいただいた。

趣旨説明 聖心女子大学 講師／教育環境デザイン研究所 研究員 齊藤 萌木
ラウンドテーブル「小・中・高等学校の各教科における『知識構成型ジグソー法』の授業づくりと実践について」 *教科部会ごとの実践報告、作成した授業デザイン原則の発表と意見交換
講演「これからの学びを読み解く：教育行政関係者・有識者のビデオメッセージも基に」 国立教育政策研究所 総括研究官／教育環境デザイン研究所 理事 白水 始 〈ビデオメッセージ提供〉 文部科学省初等中等教育局長 望月 禎 文化庁次長（元文部科学省初等中等教育局教育課程課長） 合田 哲雄 京都大学大学院 教育学研究科准教授 石井 英真
パネルディスカッション「学びをつなげる・学びでつながる」 〈報告〉 島根県立津和野高校 教諭 山根 幸久 島根県立横田高校 教諭 安藤祥汰朗 豊後高田市立高田小学校 校長 衛藤 恭子 豊後高田市立戴星学園 教諭 中山田大介 〈コメント〉 千葉大学 副学長・教育学部教授／中央教育審議会委員 貞広 斎子 文部科学省 総合教育政策局 教育人材政策課 課長 後藤 教至 国立教育政策研究所 総括研究官／教育環境デザイン研究所 理事 白水 始 〈司会〉 教育環境デザイン研究所 主任研究員 飯窪 真也

表 5：令和 6 年度「新しい学びプロジェクト」報告会 プログラム

講演「これからの学びを読み解く：教育行政関係者・有識者のビデオメッセージも基に」では、まず先生方も教育行政関係者も学びあうコミュニティによって先生方が変わっているという手ごたえの先に、次に見据える課題として、授業の中で互いに学んだことをつなげる、「今ここ」の学びを単元、教科、学年を超えてつなげる・社会につなげるといった「学びをつなげる」課題、先生、教育行政関係者の学び合いの焦点を「子どもの学び」に置き、開発者も保護者も地域住民も「子どもの学び」でつながり、自らの学びを振り返るという「学びでつながる」課題があることを整理した。それらを基に、次の指導要領がどう変わりそうか、その核になりそうな「概念としての知識の習得や深い意味理解」とはどのようなものか、そもそも何のために主体的・対話的で深い学びが必要なのかといった論点について有識者のビデオメッセージから紐解いていった。特に合田次長からは、授業を変える大目的として、複雑な世の中の中で、大人も子どももその複雑さを単純化せずに受入れ、失敗し、他人の力を借りながら悩みつつ前進できる社会の実現を提示いただいた。そこから、子どもも大人もみんなで学ぶ（本質を問い続ける、自分で作った考えを常に見直す、そのための対話）、「対話から学ぶ」姿から学び合うといったこれからの学びの指針を提示した。

パネルディスカッション「学びをつなげる・学びでつながる」では、今年度全国公開の授業研究会を担当いただいた島根県の先生方に、協調学習で生徒の学びをつなげ、授業研究で先生方の学びをつなぐ県の「授業力向上プロジェクト」の取組と、その中で先生方がどう成長してきたかについて、豊後高田市の先生方に、学譜や学瞰といったシステムも活用した授業研究を通じて、校内の多様な先生方がどう学び深めているかについてお話しいただき、文科省「今後の教育課程、学習指導及び学習評価等の在り方に関する有識者検討会」委員、中央教育審議会「教員養成部会」委員、同「質の高い教師の確保特別部会」座長を務める貞広先生、12月に「多様な専門性を有する質の高い教職員集団の形成を加速するための方策について」という諮問も出された文部科学省で教育人材政策課の課長である後藤様にコメントをいただいた。お二人のコメンテーターからは、「新しい学びプロジェクト」の取組を高く評価いただいたうえで、教科書をカバーするのではなく、概念としての知識の習得や深い意味理解を促すといった新しい学びのゴールに向けて、今後教育課程、教員養成、条件整備を一体として改革していくという視点から、こうした取組をより広げていくために必要なことについてご質問をいただいた。登壇した先生方からは、学校と教育委員会が対話しながら取組を進めること、子どもの姿を見とり、子どもの姿で語る授業研究に先生方が触れる機会やそのための時間的余裕をつくることといった提案があった。子どもと教師の学びが相似形であると言われるなら、教師も環境で変わることを信じ、教師が変われる環境をどうデザインするかを考えることが一層求められる。

③各参加団体の取組

プロジェクト全体の活動と並行し、各参加団体はそれぞれの枠組みで実践研究を進めている。今年度事務局に報告された公開研究授業等（令和5年度の3学期分を含む）249授業を表6～10に一覧で示す。

令和6年度活動報告書 第15集

番号	実施日	参加団体	実践を行った学校	学年	実践者	教科	内容
1	2023年11月10日	島根県教育委員会	島根県立矢上高等学校	高2	髙澄 智子	国語	こころ
2	2023年12月20日	みやじま教育研究会	呉市立天応学園	中3	森田 翔太	道徳	座右の銘
3	2024年1月11日	みやじま教育研究会	廿日市市立七尾中学校	中3	生田 泰文 中村 達也 戸川 雅子	道徳	don't cry anymore
4	2024年1月12日	みやじま教育研究会	廿日市市立七尾中学校	中3	原田 優次	理科	地球と宇宙1「東西南北の星の動き」
5	2024年1月15日	安芸太田町教育委員会	安芸太田町立加計小学校	小2	小坂 法美	算数	4けたの数
6	2024年1月15日	安芸太田町教育委員会	安芸太田町立加計小学校	小1	甲斐 舞羽	生活	そとであそぼう（風作り）
7	2024年1月18日	安芸太田町教育委員会	安芸太田町立加計小学校	小3	大上 優那	算数	かけ算の筆算（2）
8	2024年1月23日	延岡市教育委員会	延岡市立南方小学校	小6	下り 藤雅也	社会	新しい日本、平和な日本へ
9	2024年1月23日	豊後高田市教育委員会	豊後高田市立蔵星学園	中1	田中 聡	理科	力のはたらき
10	2024年1月23日	豊後高田市教育委員会	豊後高田市立蔵星学園	中1	金田志寿香	体育	バスケットボール
11	2024年1月24日	安芸太田町教育委員会	安芸太田町立簡賀小学校	小4	細川 隆典	算数	広さの表し方を考えよう
12	2024年1月24日	豊後高田市教育委員会	豊後高田市立高田小学校	小6	水流 涼恵	国語	「作品の心」を語り合おう（海の命）
13	2024年1月25日	みやじま教育研究会	廿日市市立七尾中学校	中3	原田 優次	理科	地球と宇宙2「四季の星座」
14	2024年2月1日	安芸太田町教育委員会	安芸太田町立加計小学校	小5	西廣 直明	社会	わたしたちのくらしと環境～自然災害を防ぐ～
15	2024年2月2日	安芸太田町教育委員会	安芸太田町立戸河内小学校	小3	佐々木将浩	算数	三角形と角
16	2024年2月2日	安芸太田町教育委員会	安芸太田町立戸河内小学校	小6	西村 美雪	社会	世界の未来と日本の役割「持続可能な社会を目指して」
17	2024年2月8日	安芸太田町教育委員会	安芸太田町立安芸太田中学校	中3	藤並 進	社会	財政と国民の福祉
18	2024年2月8日	みやじま教育研究会	廿日市市立七尾中学校	中3	原田 優次	理科	地球と宇宙3「星の日周運動・年周運動」
19	2024年2月13日	安芸太田町教育委員会	安芸太田町立戸河内小学校	小4	大久保 優	算数	広さの表し方を考えよう
20	2024年2月20日	島根県教育委員会	島根県立出雲高等学校	高1	来間 啓宏	物理	力学的エネルギー
21	2024年2月21日	安芸太田町教育委員会	安芸太田町立簡賀小学校	小5	穴田 明香	算数	四角形と三角形の面積
22	2024年2月22日	安芸太田町教育委員会	安芸太田町立安芸太田中学校	中1	竹綱 恵太	保健体育	マット運動
23	2024年2月24日	文化学園長野中学・高等学校	文化学園長野高等学校	高2	長野 真	地歴公民	労働問題
24	2024年3月1日	島根県教育委員会	島根県立津和野高等学校	高2	山根 幸久	教科横断	Edo: A sustainable Society 【化学×家庭×日本史×英語】
25	2024年3月1日	安芸太田町教育委員会	安芸太田町立安芸太田中学校	中3	小笠原督子	英語	郷土芸能の魅力を紹介しよう
26	2024年3月1日	島根県教育委員会	島根県立大田高等学校	高2	安藤祥汰朗	日本史	偽籍を行うことで誰が一番の利益を得るのか
27	2024年4月15日	安芸太田町教育委員会	安芸太田町立安芸太田中学校	中3	永井 孝直	美術	人類が描き続けてきたものー世界の遠近法をみつめてー
28	2024年4月22日	島根県教育委員会	島根県立飯南高等学校	高2	柳樂 淳一	数学	等差数列
29	2024年4月23日	安芸太田町教育委員会	安芸太田町立簡賀小学校	小5	穴田 明香	算数	「一筆書き」
30	2024年4月25日	みやじま教育研究会	廿日市市立七尾中学校	中3	原田 優次	理科	メンデルの遺伝の法則
31	2024年5月1日	有田川町教育委員会	有田川町立金屋中学校	中2	永木 早織	英語	接続詞 if that because when
32	2024年5月8日	みやじま教育研究会	廿日市市立七尾中学校	中1	戸川 雅子 川本 横澤ひかる 中村 達也	道徳	LINEトラブル
33	2024年5月8日	みやじま教育研究会	廿日市市立七尾中学校	中2	堀田 大輔 木下 美紀 宮原 浩貴 森中 浩貴	道徳	どんな勇気なら、出せるのだろうか…？
34	2024年5月8日	みやじま教育研究会	廿日市市立七尾中学校	中3	吉本 庄吾 杉山 愛実 森岡 恵美 木村 拓磨 宮崎 恭	道徳	クラスの空気を見直してみよう
35	2024年5月9日	安芸太田町教育委員会	安芸太田町立安芸太田中学校	中1	永井 孝直	美術	ロゴデザイン
36	2024年5月15日	京都市立学校新しい学びプロジェクト研究協議会	京都市立西院小学校	小5	原田 百果	社会	低い土地のくらし
37	2024年5月15日	みやじま教育研究会	廿日市市立七尾中学校	中3	吉本 庄吾 杉山 愛実 森岡 恵美 木村 拓磨 宮崎 恭	道徳	伝説のコーチ
38	2024年5月24日	安芸太田町教育委員会	安芸太田町立加計小学校	小4	河本 聖志	算数	グラフから読み取ろう（PISA問題に挑戦）
39	2024年5月24日	みやじま教育研究会	廿日市市立七尾中学校	中3	吉本 庄吾 杉山 愛実 森岡 恵美 木村 拓磨 宮崎 恭	道徳	ほんとうのカッコよさ
40	2024年5月27日	学校法人中部大学 中部大学第一高等学校	中部大学第一高等学校	高1	安田 雄一	数学	食塩水と不等式
41	2024年5月28日	浜田市教育委員会	浜田市立旭中学校	中3	正田 裕子	国語	俳句を作って句会を開こう
42	2024年5月28日	学校法人中部大学 中部大学第一高等学校	中部大学第一高等学校	高1	山田 崇仁	理科	どうしてマグネシウムのイオンはMg2+なのか？
43	2024年5月28日	学校法人中部大学 中部大学第一高等学校	中部大学第一高等学校	高2	安部 勇太	地歴公民	男女共同参画社会を考える
44	2024年5月28日	学校法人中部大学 中部大学第一高等学校	中部大学第一高等学校	高1	山田 浩慶	地歴公民	アメリカ独立革命とフランス革命
45	2024年5月28日	安芸太田町教育委員会	安芸太田町立加計小学校	小4	河本 聖志	算数	わり算の筆算（1）～わる数が1けた～
46	2024年5月30日	文化学園長野中学・高等学校	文化学園長野中学校	中3	長田 里恵	英語	立志式を行う中で、教科横断（英語・社会・家庭科）で学びを深め、「未来の長野 もし私が市長なら」"Nagano in the Future: If I Were Mayor" のテーマの元、他県の実例を資料として自己のアイデアの一助とした。
47	2024年5月30日	学校法人中部大学 中部大学第一高等学校	中部大学第一高等学校	高1	片桐 健輔	音楽	クリエイティブサウンド：創造の旅への第1歩
48	2024年5月30日	京都市立学校新しい学びプロジェクト研究協議会	京都市立西院小学校	小6	松木 貫太	社会	縄文のむらから古墳のくにへ

表6：令和6年度「新しい学びプロジェクト」に係る協調学習の公開研究授業等一覧（1/5）

第1章 協調学習の授業づくりプロジェクト 今年度の展開

番号	実施日	参加団体	実践を行った学校	学年	実践者	教科	内容
49	2024年5月31日	学校法人中部大学 中部大学第一高等学校	中部大学第一高等学校	高3	吉田 聡	国語	不思議な作品、安部公房の「棒」を解説しよう！
50	2024年5月31日	学校法人中部大学 中部大学第一高等学校	中部大学第一高等学校	高1	長谷川秀人	英語	Keynote で憧れている人を紹介しよう
51	2024年6月1日	埼玉県教育委員会	越谷市立北越谷小学校	小4	齋藤 美月	算数	角の大きさの表し方を調べよう
52	2024年6月1日	島根県教育委員会	島根県立隠岐島前高等学校	高3	石飛あゆみ	外国語	Animal Welfare
53	2024年6月5日	安芸太田町教育委員会	安芸太田町立簡賀小学校	小6	三戸 晴加	社会	縄文のむらから古墳のくにへ
54	2024年6月7日	高知県教育センター	いの町立伊野南中学校	中2	上岡 涼太	社会	九州地方の公害
55	2024年6月10日	安芸太田町教育委員会	安芸太田町立加計中学校	中2	若林 龍太	理科	さまざまな化学変化
56	2024年6月10日	島根県教育委員会	島根県立飯南高等学校	高2	柳樂 淳一	数学	いろいろな数列の和（部分分数分解）
57	2024年6月11日	安芸太田町教育委員会	安芸太田町立加計小学校	小4	河本 聖志	国語	「一つの花」
58	2024年6月12日	安芸太田町教育委員会	安芸太田町立安芸太田中学校	中2	山本 康美	国語	短歌に親しむ
59	2024年6月12日	みやじま教育研究会	廿日市市立七尾中学校	中3	吉本 杉山 森岡 愛実 木村 恵美 宮崎 拓磨 恭	道徳	二通の手紙（改訂プラン）
60	2024年6月12日	高知県教育センター	高知市立高知商業高等学校	高1	高橋 竜二	数学	重複組み合わせ
61	2024年6月13日	安芸太田町教育委員会	安芸太田町立安芸太田中学校	中1	永井 孝直	美術	プレゼンテーションのレイアウト（表現の構想）
62	2024年6月14日	みやじま教育研究会	廿日市市立七尾中学校	中3	原田 優次	理科	ニュートン力学入門
63	2024年6月18日	安芸太田町教育委員会	安芸太田町立加計中学校	中2	山際 紗月	国語	短歌に親しむ
64	2024年6月18日	瀬戸（OKAYAMA）新しい学びプロジェクト	岡山県立瀬戸高等学校	高1	山片 大典	数学	場合の数と確率
65	2024年6月19日	品川区立八潮学園	品川区立八潮学園	小2	関根 愛	生活	やさしい作り名人になろう
66	2024年6月19日	品川区立八潮学園	品川区立八潮学園	中2	宮森 徹	数学	連立方程式
67	2024年6月19日	品川区立八潮学園	品川区立八潮学園	小4	西川 誠	算数	グラフの活用（食べ残しを減らす方法）
68	2024年6月19日	品川区立八潮学園	品川区立八潮学園	小4	越智 妙子	社会	水はどこから
69	2024年6月19日	品川区立八潮学園	品川区立八潮学園	小6	安富 桃	理科	人や動物の体
70	2024年6月19日	品川区立八潮学園	品川区立八潮学園	中1	関 智恵	保健体育	障害の防止
71	2024年6月19日	品川区立八潮学園	品川区立八潮学園	小5	吉村 雅俊	体育	けがの防止
72	2024年6月19日	品川区立八潮学園	品川区立八潮学園	中2	河内 勇人	英語	英語で紹介
73	2024年6月19日	安芸太田町教育委員会	安芸太田町立戸内小学校	小5	佐々木将浩	算数	合同な図形
74	2024年6月19日	島根県教育委員会	島根県立津和野高等学校	高1	山根 幸久	外国語	Money Debate
75	2024年6月19日	島根県教育委員会	島根県立飯南高等学校	高3	柳樂 淳一	数学	図形と方程式
76	2024年6月19日	安芸太田町教育委員会	安芸太田町立簡賀小学校	小1	岡井 優司	道徳	どうしてこうなるのかな
77	2024年6月19日	安芸太田町教育委員会	安芸太田町立戸内小学校	小3	中村可南子	算数	棒グラフと表
78	2024年6月19日	九重町教育委員会	九重町立野上小学校	小3	大石真梨子	国語	まいごのかぎ
79	2024年6月28日	飯塚市教育委員会	飯塚市立立岩小学校	小4	小塚 智弘	理科	雨水のゆくえと地面のようす
80	2024年6月28日	豊後高田市教育委員会	豊後高田市立高田小学校	小4	小湊 美有	道徳	土曜日の学校
81	2024年6月28日	豊後高田市教育委員会	豊後高田市立高田小学校	小6	長岡 勇気	社会	国づくりへの歩み
82	2024年7月1日	有田川町教育委員会	有田川町立金屋中学校	不明	嶋田 朗子	理科	電気分解
83	2024年7月1日	飯塚市教育委員会	飯塚市立飯塚第一中学校	中3	大塚 勝正	社会	社会保障と財政の授業について
84	2024年7月2日	埼玉県教育委員会	越谷市立北越谷小学校	小6	遠田奈緒子	外国語	We can enjoy skiing
85	2024年7月2日	瀬戸（OKAYAMA）新しい学びプロジェクト	赤磐市立高陽中学校	中3	森下千賀子	英語	赤磐市の特産品で作ったオリジナルスイーツを英文で紹介しよう
86	2024年7月2日	瀬戸（OKAYAMA）新しい学びプロジェクト	赤磐市立高陽中学校	中3	小林 由佳	社会	少子高齢化～他国の政策を参考に、日本の少子高齢化政策を考えよう～
87	2024年7月3日	安芸太田町教育委員会	安芸太田町立戸内小学校	小3	中村可南子	理科	風とゴムの力のはたらき
88	2024年7月4日	飯塚市教育委員会	飯塚市立立岩小学校	小6	川村 綾葉	社会	武士の政治が始まる
89	2024年7月4日	豊後高田市教育委員会	豊後高田市立戴星学園	中2	小川 尊浩	保健体育	健康な生活と疾病の予防
90	2024年7月4日	豊後高田市教育委員会	豊後高田市立戴星学園	中1	梅田奈々子	英語	Our Project1
91	2024年7月5日	延岡市教育委員会	延岡市立一ヶ岡小学校	小6	宮田 諒	社会	大昔のくらしとくにの統一
92	2024年7月11日	埼玉県教育委員会	越谷市立北越谷小学校	小5	齋藤 天登	保健体育	けがの防止
93	2024年7月11日	みやじま教育研究会	廿日市市立七尾中学校	中3	原田 優次	理科	力学的エネルギー
94	2024年7月12日	島根県教育委員会	島根県立出雲高等学校	高3	森脇 健二	数学	2次曲線（パラボリアンテナの仕組み）
95	2024年7月17日	九重町教育委員会	九重町立野上小学校	小2	遠藤 恭代	生活	のがみの大切マップをつくらう
96	2024年7月18日	島根県教育委員会	島根県立島根中央高校	高2	引野 恭也	数学	数列
97	2024年7月22日	文化学園長野中学・高等学校	文化学園長野高等学校	高2	山田 恭子	地歴公民	平安時代は本当に平安だったのか
98	2024年8月2日	みやじま教育研究会	廿日市市立七尾中学校	中3・ 教員研修	原田 優次	理科	ニュートン力学入門（市教研中理部会研修資料）
99	2024年8月24日	安芸太田町教育委員会	教員研修	中2	亀岡 圭太	理科	動物の体のつくりと働き
100	2024年8月26日	学校法人中部大学 中部大学第一高等学校	中部大学第一高等学校	中3	山田 崇仁	理科	運動に最適なスポーツドリンクは何？
101	2024年9月2日	高知県教育センター	いの町立伊野南中学校	中2	上岡 涼太	社会	近畿地方
102	2024年9月7日・ 10月12日	文化学園長野中学・高等学校	市内中学生対象	中3	山室 利子	数学	一本のリボンを3等分しよう！
103	2024年9月7日・ 10月12日	文化学園長野中学・高等学校	文化学園長野高等学校	中3	徳高 莉里	英語	Go on a trip to Yokohama！～横浜への旅行計画を立てよう～
104	2024年9月9日	埼玉県教育委員会	春日部市立江戸川小学校	小5	山内 喜紀	社会	わたしたちの生活と食料生産
105	2024年9月9日	浜田市教育委員会	浜田市立旭中学校	中3	渡津 友博	理科	進化
106	2024年9月9日	島根県教育委員会	島根県立飯南高等学校	高3	柳樂 淳一	数学	指数関数・対数関数（対数の大小）
107	2024年9月10日	安芸太田町教育委員会	安芸太田町立安芸太田中学校	中1	山本 康美	国語	「大人になれなかった私たちに…」
108	2024年9月10日	島根県教育委員会	島根県立矢上高等学校	高3	吉村 竜成	数学	二等分する直線

表7：令和6年度「新しい学びプロジェクト」に係る協調学習の公開研究授業等一覧（2/5）

令和6年度活動報告書 第15集

番号	実施日	参加団体	実践を行った学校	学年	実践者	教科	内容
109	2024年9月11日	有田川町教育委員会	有田川町立金屋中学校	中2	永木 早織	英語	have to, must
110	2024年9月11日	有田川町教育委員会	有田川町立金屋中学校	中1	堀内 誠也	社会	雨溫図
111	2024年9月11日	有田川町教育委員会	有田川町立金屋中学校	中1	尾上 隆哉	国語	「言葉」をもつ島、シジュウカラ
112	2024年9月11日	安芸太田町教育委員会	安芸太田町立安芸太田中学校	中3	石村 勇樹	数学	二次方程式
113	2024年9月11日	安芸太田町教育委員会	安芸太田町立簡賀小学校	小6	三戸 晴加	算数	データの特徴を調べて判断しよう「データの調べ方」
114	2024年9月11日	安芸太田町教育委員会	安芸太田町立加計小学校	小5	田村 麗子	算数	合同な図形
115	2024年9月11日	安芸太田町教育委員会	安芸太田町立戸内小学校	小4	大久保 優	算数	倍の見方
116	2024年9月11日	安芸太田町教育委員会	安芸太田町立簡賀小学校	小2	横本ひかる	国語	「ことばでみちあんない」
117	2024年9月12日	瀬戸（OKAYAMA）新しい学びプロジェクト	赤磐市立高陽中学校	中2	藍原 守	美術	夏休みの課題作品の鑑賞
118	2024年9月12日	島根県教育委員会	島根県立矢上高等学校	高1	原 和志	歴史総合	帝国主義
119	2024年9月13日	高知県教育センター	いの町立伊野南中学校	中2	上岡 涼太	社会	北陸地方
120	2024年9月17日	瀬戸（OKAYAMA）新しい学びプロジェクト	赤磐市立高陽中学校	中1	川原 夢叶	社会	アジア州～オリンピック開催候補地はどこだ？～
121	2024年9月17日	島根県教育委員会	島根県立隠岐島前高等学校	高3	吉村 将	地理探究	資源と産業
122	2024年9月17日	山口県新しい学びプロジェクト研究協議会	萩市立三見小中学校	中1・2・3	西村 和子	国語	戦争を題材にした異学年交流学習
123	2024年9月18日	安芸太田町教育委員会	安芸太田町立安芸太田中学校	中2	藤並 進	社会	江戸幕府の成立と支配の仕組み
124	2024年9月18日	島根県教育委員会	島根県立隠岐島前高等学校	高3	石飛あゆみ	外国語	What is good education?
125	2024年9月18日	島根県教育委員会	島根県立宍道高等学校	高2	沖野 彪	地理総合	島根県で震度5弱以上の地震は発生するか
126	2024年9月19日	有田川町教育委員会	有田川町立藤並小学校	小3	北山 有希	国語	ちいちゃんのかげおくり
127	2024年9月24日	島根県教育委員会	島根県立津和野高等学校	高2	青木穂乃美	国語	『源氏物語』『若紫』
128	2024年9月25日	品川区立八潮学園	品川区立八潮学園	小6	熊坂佳太郎	国語	やまなし
129	2024年9月25日	品川区立八潮学園	品川区立八潮学園	小4	谷水佐和子	社会	自然災害から人々を守る
130	2024年9月25日	品川区立八潮学園	品川区立八潮学園	小1	吉澤 貴子	生活	いきものとなかよし
131	2024年9月25日	品川区立八潮学園	品川区立八潮学園	中1	星 奈留美	理科	身近な物理現象
132	2024年9月25日	京都市立学校新しい学びプロジェクト研究協議会	京都市立西院小学校	小4	安田 晃樹	社会	用水の建設 琵琶湖疏水
133	2024年9月25日	品川区立八潮学園	品川区立八潮学園	特別支援学級	平岩 義浩	国語	おおきな木
134	2024年9月25日	みやじま教育研究会	廿日市市立七尾中学校	中3	原田 優次	理科	周期表とイオン1「イオン結合」
135	2024年9月28日	高砂市教育委員会	高砂市立米田小学校	小6	岡田 耕平	理科	「月と太陽」
136	2024年9月30日	OB等	江府町立奥大山江府学園	小2	吉田 美央	国語	言葉をつないで友だちの話を心を広げよう
137	2024年9月30日	OB等	江府町立奥大山江府学園	小4	黒見真由美	国語	物語の題名の意味を考えよう「一つの花」
138	2024年9月30日	OB等	江府町立奥大山江府学園	小3	稲田 修士	保健	けんこうな生活「けんこうによい1日の生活」
139	2024年10月2日	高砂市教育委員会	高砂市立伊保南小学校	小5	八木 寛人	総合的な学習の時間	「どうなる？どう生きる？探ろう！デジタル社会の進み方！」（自主教材）
140	2024年10月2日	安芸太田町教育委員会	安芸太田町立簡賀小学校	小1	岡井 優司	算数	たしざん
141	2024年10月3日	瀬戸（OKAYAMA）新しい学びプロジェクト	赤磐市立高陽中学校	中2	神原 沙織	家庭	日常食の調理と地域の食文化～食品の調理の仕方を工夫した調理計画～
142	2024年10月3日	瀬戸（OKAYAMA）新しい学びプロジェクト	赤磐市立高陽中学校	中3	平井 克典	理科	力のつり合いと合成・分解
143	2024年10月3日	瀬戸（OKAYAMA）新しい学びプロジェクト	赤磐市立高陽中学校	中1	山地 隆之	技術	材料と加工の技術によって問題を解決する～橋を製作しよう～
144	2024年10月3日	飯塚市教育委員会	飯塚市立立岩小学校	小4	緒方 優杏	国語	物語の題名の意味を考えよう「一つの花」
145	2024年10月4日	延岡市教育委員会	延岡市立南方小学校	小6	田中 大希	社会	戦国の世の統一
146	2024年10月7日	島根県教育委員会	島根県立津和野高等学校	高1	篠田 巧	美術	作家の心情を知る～ゴッホ～
147	2024年10月9日	浜田市教育委員会	浜田市立雲城小学校	小3	松原 裕	算数	お菓子の重さランキング
148	2024年10月10日	有田川町教育委員会	有田川町立藤並小学校	小4	中 雄紀	社会	自然災害から人々を守る活動
149	2024年10月10日	安芸太田町教育委員会	安芸太田町立加計小学校	小4	河本 聖志	算数	倍の見方
150	2024年10月10日	京都市立学校新しい学びプロジェクト研究協議会	京都市立西院小学校	小2	岡田 沙樹	生活	あそんで ためてして くふうして
151	2024年10月11日	九重町教育委員会	九重町立南山田小学校	小3	川崎 裕太	国語	ちいちゃんのかげおくり
152	2024年10月11日	島根県教育委員会	島根県立横田高等学校	高2	安藤祥汰朗	歴史総合	大衆社会とファシズム
153	2024年10月11日・18日	文化学園長野中学・高等学校	文化学園長野高等学校	高3	徳尚 莉里	英語	無人島で生き残るためには何が必要か
154	2024年10月11日・18日	瀬戸（OKAYAMA）新しい学びプロジェクト	赤磐市立高陽中学校	中2	森田 砂器	英語	Warka Water Project
155	2024年10月14日	高知県教育センター	青島日本人学校	小6	久万 真央	国語	「やまなし」（宮沢賢治）
156	2024年10月15日	島根県教育委員会	島根県立出雲高等学校	高2	来間 啓宏	物理	波
157	2024年10月15日	島根県教育委員会	島根県立益田高等学校	高1	佐藤 魁人	国語	『竹取物語』『天の羽衣』
158	2024年10月16日	みやじま教育研究会	廿日市市立七尾中学校	中3	原田 優次	理科	周期表とイオン2「イオン化合物の化学式」
159	2024年10月16日	九重町教育委員会	九重町立野矢小学校	小4	岩下 佳子	道徳	深く息をすって
160	2024年10月16日	山口県新しい学びプロジェクト研究協議会	萩市立三見小中学校	中1・2・3	西村 和子	国語	環境問題
161	2024年10月17日	久喜市教育委員会	久喜市立江面小学校	小6	松本 千春	理科	大地のつくりと変化
162	2024年10月17日	有田川町教育委員会	有田川町立吉備中学校	中1・2・3	山本 寛	自立	楽市のポスターを作ろう
163	2024年10月17日	島根県教育委員会	島根県立矢上高等学校	高2	松原 圭佑	数学	三角関数
164	2024年10月18日	安芸太田町教育委員会	安芸太田町立加計小学校	小3	砂本 風賀	算数	かけ算の筆算（1）
165	2024年10月18日	島根県教育委員会	島根県立島根中央高校	高2	引野 恭也	数学	加法定理

表8：令和6年度「新しい学びプロジェクト」に係る協調学習の公開研究授業等一覧（3/5）

第1章 協調学習の授業づくりプロジェクト 今年度の展開

番号	実施日	参加団体	実践を行った学校	学年	実践者	教科	内容
166	2024年10月22日	高砂市教育委員会	高砂市立高砂中学校	中1	池田 航	美術	ミレー「落穂拾い」
167	2024年10月22日	安芸太田町教育委員会	安芸太田町立筒賀小学校	小4	浅田 朋輝	算数	計算のきまり
168	2024年10月23日	高砂市教育委員会	高砂市立高砂中学校	中2	西原悠紀子	国語	モアイは語るー地球の未来
169	2024年10月23日	学校法人中部大学 中部大学第一高等学校	中部大学第一高等学校	高2	山田 崇仁	理科	質量 500kg の物体を 1.0m 高い位置に移動させる方法を考えよう。
170	2024年10月23日	学校法人中部大学 中部大学第一高等学校	中部大学第一高等学校	高2	河内 柳作	数学	常用対数の学び合い
171	2024年10月23日	安芸太田町教育委員会	安芸太田町立戸河内小学校	小2	片桐 蓮	算数	長方形と正方形
172	2024年10月23日	安芸太田町教育委員会	安芸太田町立加計小学校	小4	河本 聖志	算数	算数で読み解こう～食べ残しを減らそう
173	2024年10月23日	安芸太田町教育委員会	安芸太田町立加計小学校	小2	小坂 法美	道徳	なかよしだけど
174	2024年10月23日	安芸太田町教育委員会	安芸太田町立加計小学校	小5	田村 麗子	算数	わくわく算数教室
175	2024年10月24日	飯塚市教育委員会	飯塚市立飯塚小学校	小6	池田 綾葉	国語	発信しよう、私たちの SDGs
176	2024年10月25日	安芸太田町教育委員会	安芸太田町立戸河内小学校	小6	板倉 孝志	社会	江戸幕府と政治の安定
177	2024年10月30日	島根県教育委員会	島根県立浜田水産高等学校	高1	曾田真一郎	外国語	Part-time Job
178	2024年11月5日	久喜市教育委員会	久喜市立江面小学校	小3	飯塚 純基	算数	数の表し方やしくみを調べよう
179	2024年11月6日	高砂市教育委員会	高砂市立高砂中学校	中1	野々村友里 玉野 恵太	数学	図形の移動
180	2024年11月8日	瀬戸（OKAYAMA）新しい学びプロジェクト	赤磐市立高陽中学校	中1	平井絵里加	音楽	鑑賞「魔王」
181	2024年11月8日	島根県教育委員会	島根県立大田高等学校	高2	森脇 健二	数学	数列
182	2024年11月8日	島根県教育委員会	島根県立大田高等学校	高1	中島 優希	言語文化	伊勢物語
183	2024年11月8日	島根県教育委員会	島根県立大田高等学校	高2	山根 幸久 富田 泰範	教科横断	have の意味【英語×国語】
184	2024年11月8日	みやじま教育研究会	廿日市市立七尾中学校	中3	原田 優次	理科	周期表とイオン3「塩酸の電気分解」
185	2024年11月12日	みやじま教育研究会	廿日市市立七尾中学校	中3	吉本 杉山 森岡 木村 宮崎 悠 愛実 恵美 拓磨 恭	道徳	CANDY
186	2024年11月12日	飯塚市教育委員会	飯塚市立徳波東中学校	中3	河野 睦	社会	私たちの暮らしと経済「生産と労働」
187	2024年11月13日	安芸太田町教育委員会	安芸太田町立筒賀小学校	小5	穴田 明香	算数	合同な図形及び直角三角形の面積（複合単元）
188	2024年11月13日	飯塚市教育委員会	飯塚市立立岩小学校	小4	小椋 智弘	理科	「とじこめた空気と水」
189	2024年11月13日	九重町教育委員会	九重町立飯田小学校	小4	小西 尚史	理科	わたしたちの体と運動
190	2024年11月13日	豊後高田市教育委員会	豊後高田市立高田小学校	小4	井嵩 裕一	国語	ござつね
191	2024年11月13日	豊後高田市教育委員会	豊後高田市立高田小学校	小1	長岡 範子	算数	かたちあそび
192	2024年11月14日	飯塚市教育委員会	飯塚市立立岩小学校	小1	山下 舞季	音楽	がっきとなかよくなろう
193	2024年11月14日	島根県教育委員会	島根県立飯南高等学校	高1	三島 翔太	科学と人間生活	マイクロメーター・標本調査
194	2024年11月15日	飯塚市教育委員会	飯塚市立椋本小学校	小3	三木 渉	社会	店ではたらく人と仕事
195	2024年11月18日	みやじま教育研究会	廿日市市立七尾中学校	中3	原田 優次	理科	周期表とイオン4「塩酸に溶ける金属」
196	2024年11月18日	高知県教育センター	いの町立伊野南中学校	中2	上岡 涼太	社会	幕政改革と百姓一揆
197	2024年11月19日	安芸太田町教育委員会	安芸太田町立戸河内小学校	小3	中村可南子	社会	火事からくらしを守る
198	2024年11月19日	安芸太田町教育委員会	安芸太田町立戸河内小学校	小5	佐々木将浩	算数	単位量当たりの大きさ
199	2024年11月19日	飯塚市教育委員会	飯塚市立徳波西中学校	中1	中野 皓司	国語	竹取物語
200	2024年11月20日	島根県教育委員会	島根県立出雲高等学校	高3	萬代 綾	理科	微分法・積分法
201	2024年11月21日	瀬戸（OKAYAMA）新しい学びプロジェクト	瀬戸内市立牛窓中学校	中2	赤堀 善啓	数学	三角形と四角形
202	2024年11月21日	文化学園長野中学・高等学校	文化学園長野高等学校	高3	野口 雅宏	地歴公民	鎌倉幕府の成立年
203	2024年11月21日	安芸太田町教育委員会	安芸太田町立戸河内小学校	小4	大久保 優	社会	残したいもの 伝えたいもの
204	2024年11月22日	安芸太田町教育委員会	安芸太田町立加計中学校	中3	城田 直也	特別活動	「加計中 ICT 機器使用三訓」を策定しよう」
205	2024年11月22日	島根県教育委員会	島根県立津和野高等学校	高1	田原 義崇	音楽	鑑賞
206	2024年11月22日	安芸太田町教育委員会	安芸太田町立加計中学校	中2	秋山 賢人	英語	英文の作り方
207	2024年11月22日	安芸太田町教育委員会	安芸太田町立加計中学校	中1	柿内 香子	道徳	みんなに合わせる友情
208	2024年11月25日	安芸太田町教育委員会	安芸太田町立加計小学校	小4	河本 聖志	国語	本のポップや帯を作ろう
209	2024年11月26日	掛川市立中央小学校	掛川市立中央小学校	小6	紅林 竜治	国語	『鳥獣戯画』を読む
210	2024年11月26日	安芸太田町教育委員会	安芸太田町立筒賀小学校	小2	横本ひかる	算数	九九をつくろう
211	2024年11月27日	安芸太田町教育委員会	安芸太田町立筒賀小学校	小3	細川 隆典	算数	重さのたんいとはかりかた
212	2024年11月27日	みやじま教育研究会	廿日市市立七尾中学校	中1	戸川 雅子 川本 宏 横澤ひかる 中村 達也 原田 優次	道徳	つらいキモチ、相談できる？
213	2024年11月28日	安芸太田町教育委員会	安芸太田町立戸河内小学校	小1	西村 美雪	国語	たぬきの糸車
214	2024年11月29日	みやじま教育研究会	廿日市市立七尾中学校	中3	吉本 杉山 森岡 木村 宮崎 悠 愛実 恵美 拓磨 恭	道徳	クリスマスの奇跡
215	2024年12月3日	飯塚市教育委員会	飯塚市立飯塚東小学校	小4	古賀 太祐	理科	もののあたまりかた
216	2024年12月4日	瀬戸（OKAYAMA）新しい学びプロジェクト	瀬戸内市立長船中学校	中3	直原 絵美	国語	故郷
217	2024年12月4日	安芸太田町教育委員会	安芸太田町立筒賀小学校	小5	穴田 明香	算数	ふりこのきまりーひろげようー
218	2024年12月4日	みやじま教育研究会	廿日市市立七尾中学校	中3	吉本 杉山 森岡 木村 宮崎 悠 愛実 恵美 拓磨 恭	道徳	一志の弁当
219	2024年12月4日	飯塚市教育委員会	飯塚市立飯塚小学校	小6	横手 清葉	国語	「どう立ち向かう？もしもの世界」
220	2024年12月6日	高砂市教育委員会	高砂市立曾根小学校	小4	井内 克也	算数	面積
221	2024年12月6日	安芸太田町教育委員会	安芸太田町立加計小学校	小4	河本 聖志	道徳	ちょっと待ってよ
222	2024年12月6日	高知県教育センター	高知県立高知国際高等学校	高2	池川 潤也	地学基礎	宇宙の広がり
223	2024年12月6日	九重町教育委員会	九重町立淮園小学校	小1	佐藤 奈留美	国語	たぬきの糸車

表9：令和6年度「新しい学びプロジェクト」に係る協調学習の公開研究授業等一覧（4/5）

番号	実施日	参加団体	実践を行った学校	学年	実践者	教科	内容
234	2025年1月17日	豊後高田市教育委員会	豊後高田市立高田小学校	小5	水流 涼恵	国語	優れた表現から人物像をとらえよう（大造じいさんとガン）
235	2025年1月17日	豊後高田市教育委員会	豊後高田市立載星学園	中3	河野 友博	社会	関東地方
236	2025年1月17日	豊後高田市教育委員会	豊後高田市立載星学園	中1	梅田奈々子	英語	旅行に行きたいALTにオススメの国を紹介する
237	2025年1月17日	豊後高田市教育委員会	豊後高田市立高田小学校	小1	丸山 裕哉	生活	ふゆとともだち
238	2025年1月27日	島根県教育委員会	島根県立松江高等学校	不明	原 誠実	理科	溶液
239	2025年1月29日	九重町教育委員会	九重町立東飯田小学校	小1	平井 麻理	国語	どうぶつの赤ちゃん
240	2025年1月31日	延岡市教育委員会	延岡市立旭小学校	小3	田中 晃貴	音楽	音楽のききどころ
241	2025年	九重町教育委員会	九重町立このえ緑陽中学校	未定	本河 秀喜	数学	未定
242	実施日不明	創志学園 クラーク記念国際高等学校	創志学園 クラーク記念国際高等学校	高3	濱崎 晃	国語表現	「自分を表現しよう」～志望理由書～
243	実施日不明	創志学園 クラーク記念国際高等学校	創志学園 クラーク記念国際高等学校	高2	船山 久太	公民	国際法の問題点と解決策
244	実施日不明	創志学園 クラーク記念国際高等学校	創志学園 クラーク記念国際高等学校	高2	萱嶋 翔太	理科	物質量
245	実施日不明	創志学園 クラーク記念国際高等学校	創志学園 クラーク記念国際高等学校	高2	關口 陽介	英語	Itの用法
246	実施日不明	創志学園 クラーク記念国際高等学校	創志学園 クラーク記念国際高等学校			国語	言葉は世界を切り分ける
247	実施日不明	創志学園 クラーク記念国際高等学校	創志学園 クラーク記念国際高等学校	高2	大野 友樹	数学	図形の性質
248	実施日不明	創志学園 クラーク記念国際高等学校	創志学園 クラーク記念国際高等学校	高2	横山 泰章	地歴	条約改正と日清戦争
249	実施日不明	創志学園 クラーク記念国際高等学校	創志学園 クラーク記念国際高等学校	高2	萱嶋 翔太	理科	運動の3法則

表10：令和6年度「新しい学びプロジェクト」に係る協調学習の公開研究授業等一覧（5/5）

（3）今年度の成果と課題

①開発教材

本報告書巻末のDVDには、今年度の本事業での実践例のうちデータの揃っているもの81例含む、これまでの小中高での実践例3,281例について、授業案、教材、実践者の振り返りを収録している。

②授業デザイン原則

また、「新しい学びプロジェクト」教科部会では、毎年、今年度の実践における子ども達の学びのエピソードから見えてきた次の実践に向けての授業デザインの仮説（＝「授業デザイン原則」）を整理している。

教科を超えて見られる授業デザイン原則の例としては、「特に小学生の場合、『書くこと』の負荷が高いので、『書く』『話す』場面の明確な指示が必要」といったものや「子どもの学びの想定を具体的に行ったうえで、資料を焦点化したり、指示を具体的にしたり、説明に使ってほしいキーワードを示したりする」といったもののようにその場面で期待する学びの姿を明確にしたうえで、それを子ども達に明確に伝えるための工夫が目立った。

以下に今年度「新しい学びプロジェクト」各教科部会がまとめた授業デザイン原則のうち、教科の特性がよく表れているものを一つずつ選び、掲載する。

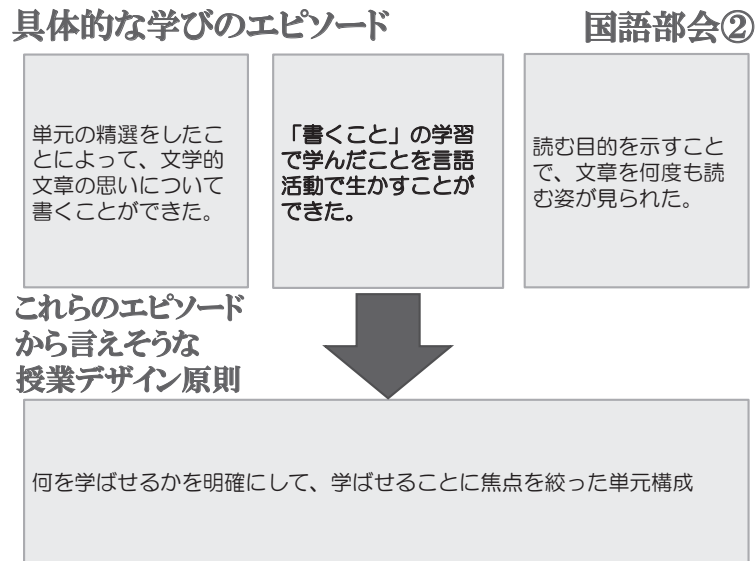


図3：令和6年度国語部会で作成した授業デザイン原則の例

国語部会では、単元全体の学習を見通して、本時の学習で何を学ばせるかを明確にしたことで本時ねらい通りの姿が見られたり、本時の学習が次につながったというエピソードから単元構成についてのデザイン原則をまとめている（図3）。

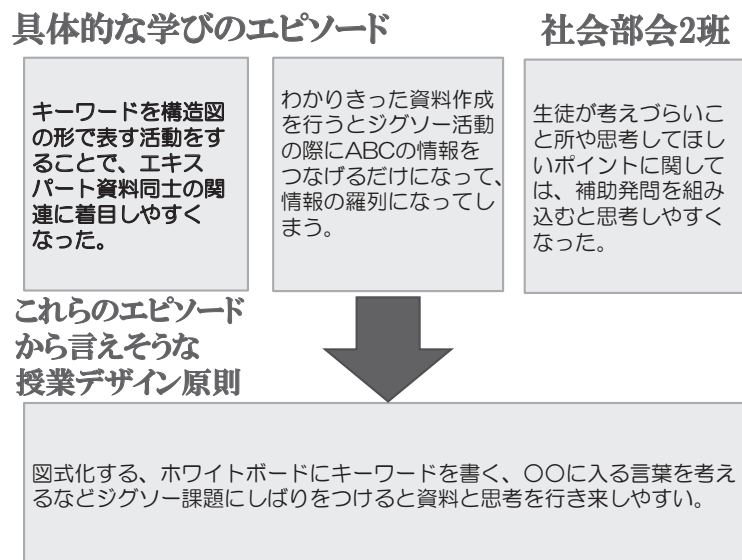


図4：令和6年度社会科部会で作成した授業デザイン原則の例

社会部会では、ジグソー活動をエキスパート資料から読み取ったことの羅列ではなく、資料を活用して子どもが思考する活動にするためのデザイン原則をまとめている（図4）。

具体的な学びのエピソード

算数部会1班

○エキスパート資料の一つに意図して答えが出てこないものをいれたことで児童が「そんなはずはない」と試行錯誤していた。

○「矢印や丸をつけましょう」など補助的な言葉によって、言葉にとらわれ活動が制限されてしまった。

○辺と対角線で表した図による組み合わせを調べる方法のエキスパートでは、点が増えた場合、点の打ち方がわからなかったため、良さに気づけなかった。

これらのエピソードから言えそうな授業デザイン原則

ねらいにせまるポイントに気づかせるために、子供の思考を想定し、実態にあった課題設定や資料が必要。（補助的に加えたり、省いたりする。）

図 5：令和 5 年度算数部会で作成した授業デザイン原則の例

算数部会では、細かなところにこだわる子どもの学び方も踏まえ、ねらいに迫るポイントに気づかせるために、子どもの思考を具体的に想定しながら課題や資料を設定することをデザイン原則としてまとめている（図 5）。

具体的な学びのエピソード

数学部会1班

エキスパート活動で、解の吟味について学んで欲しかったのに、解を求めることができなかった。

図形の移動の説明をして欲しかったので、移動に関しては実物を与えたところ、説明を考えることに集中できた。

エキスパートで図形の面積をヒントに考えさせたところ、表も面積を使っていると間違えた。

これらのエピソードから言えそうな授業デザイン原則

つまづいて欲しくないところと、しっかり考えてほしいところを絞っておくことで、課題やエキスパート資料を調整できる（数の調整や実物を与えるなど）。

図 6：令和 6 年度数学部会で作成した授業デザイン原則の例

数学部会では、ねらいの達成に向けた話し合いを促すためにつまずいてほしくないところとしっかり考えてほしいところを整理するというデザイン原則をまとめている（図 6）。

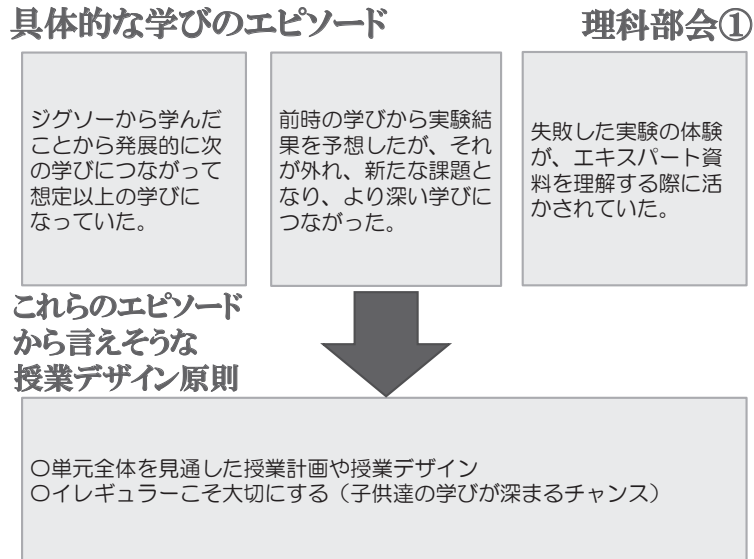


図7：令和6年度理科部会で作成した授業デザイン原則の例

理科部会では、前時や次時の学びとのつながりについてのエピソードから、単元全体を見通したデザインやイレギュラーを大切にして次の学びにつなげることをデザイン原則としてまとめている（図7）。

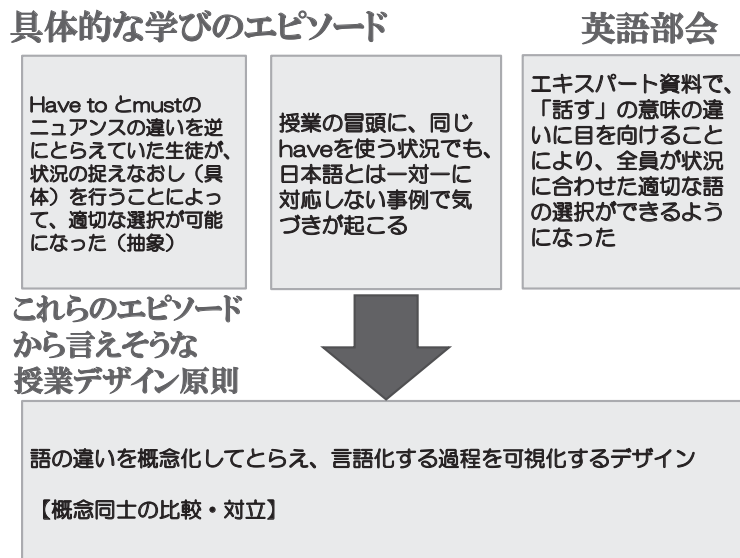


図8：令和6年度英語部会で作成した授業デザイン原則の例

英語部会では、今年度報告された実践のねらいの共通性に着目し、子ども達が語の違いを概念として捉えて、意識的に言語化することを支えるデザインという新たな授業デザインの類型としてまとめている（図8）。

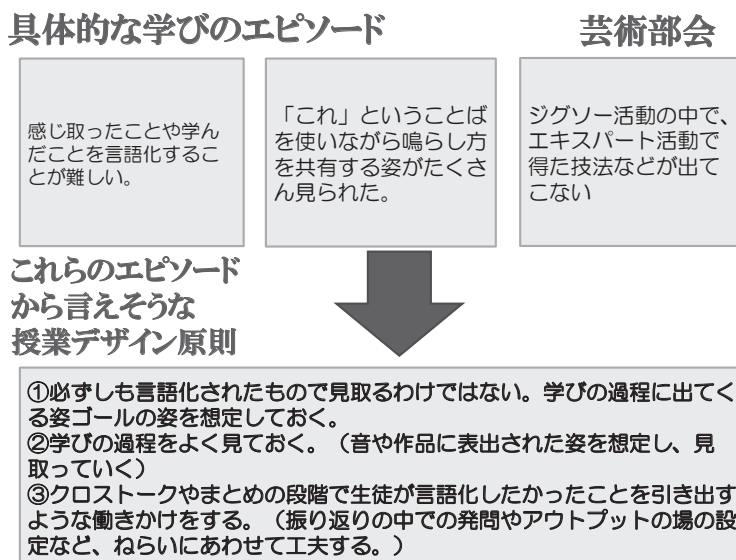


図9：令和6年度芸術部会で作成した授業デザイン原則の例

芸術部会では、言語化や表現の難しさを踏まえて、学びを見とるための見とりやデザイン、支援の工夫についてのデザイン原則をまとめている（図9）。

どの部会の原則も、各教科において協調学習を通じて実現したい学びとはどのようなものかという教師のねらいと、それに即して見えてくる想定外の子どもの学びの姿についての気づきを基に、次のデザインに活かせるような仮説を整理したものとなっている。

③授業づくりのポイント

前項の授業デザイン原則も踏まえて、「教科で知識構成型ジグソー法を活用するときの授業づくりのポイントや使いどころ」について各教科でまとめたものを示す。

a) 国語部会

<授業づくりのポイント>

- ・物語においては、単元の最後に協調学習を持ってくると学習しやすい。
- ・ひとつの単元で協調学習を複数回行うことで視点を絞ることができ、内容を深く考えることができる。また、補完することができる。
- ・ポイントを明確に絞って文章を見せたり、資料を作ったりする。（比較、関連付け）

<使いどころ>

- ・多面的に狙いに迫りたい文章（例：大造じいさんとガン、やまなし）
- ・書く視点を対話によって見付けさせる（例：意見文や提案分を書こう）
- ・答えが明確ではないものに迫る場面（例：「考える」とは）
- ・生徒が理解したことを表現する、ひとつ前に使うのが有効なのでは？

b) 社会部会

＜授業づくりのポイント＞

○課題設定の工夫

- ・子どもが主体的に考える課題設定（事前の学習との繋がりも考える。）
- ・エキスパート資料の読み取りだけでなく発展的な課題をジグソーで考えさせることでクロストークで様々な意見が出る
- ・資料を「まとめる」のではなく、資料で答えを「作る」ようにする。
- ・今までの学びや自分たちの生活経験を生かして考えることができれば、思考の深まりが生まれる
- ・エキスパート資料を関連させないとメイン課題の解決につながらない作りを意識する。
- ・オープンエンドにすることで、いろいろな表現できるようにする。

○資料づくりや活動の持ち方の工夫

- ・エキスパート資料を作成するときは立場や視点を明確にしたものにするとう意見交流がしやすい
- ・子どもの実態に応じたワークシートの作成
- ・思考ツールを活用する際には、子どもが使い慣れたものを使う。
- ・資料作成の際には、立場を明確にして作成し、専門外の人に実際に解いてもらい、解き方のポイントを見つける。

＜使いどころ＞

- ・単元の導入
- ・中学年の社会科は教科書で他地域を取り扱っている。協調学習で教科書の内容を取り扱う。→自分たちの地域を学習する型も身につく。
- ・様々な視点や立場を踏まえて、ゴールに向かうような授業のときに使いやすい。

c) 算数部会

- ・子どもの学びをいくつか想定しながら、実態に合った資料を作成し、それによって子どもから出た言葉を教師がまとめるのではなく、問い返ししながら算数用語につなげるよう、教師がファシリテートしていく。

d) 数学部会

- ・授業の題材を考えるときに、考え方が3つあるからではなくて、生徒がつまづくポイントを探すとエキスパート資料ができるかも
- ・生徒のつまずきや失敗した点をアップデートしていくといい授業に

- ・ 数学では、答えができれば終わりとなりがちだが、クロストークで過程を説明させたり、考え方を説明させたりということができそう。
- ・ シンプルだけど、数学の見方が広がるような課題だと、生徒の興味関心を引きやすい。
- ・ 入試で扱うような課題や、難易度が高く、教え込みになりがちな課題の方が、ジグソー法に向いている。（例：2 乗に比例する関数と 1 次関数のグラフの交点を求める）
- ・ クローズドな課題でなく、複数の考え方のよさを見い出すことを目指したオープンエンドな課題が深まりやすい。（例：関数の表・式・グラフのよさ）

e) 理科部会

<授業づくりのポイント>

- ・ 単位時間でおさめようと思わず児童生徒の思考に合わせる弾力的な授業運営
- ・ 資料、課題の難易度の設定
- ・ 正しい答えを書くことより、自分なりの考えをもち、協力して学ぼうとよく話し合う授業
- ・ 言いたいことが言い合えるような環境づくり
- ・ 話せない子や苦手な子の見取りを行う

<使いどころ>

- ・ 単元の導入時に、子どもの意欲付けや今後の学びによる考えや知識の変化を見るものとして実施
- ・ 単元の終末に、振り返りや応用として実施
- ・ 小中高と繋がりのある単元での実施

f) 英語部会

- ・ ライティング→スピーキング（話の順序、組み立てについて意識）；細かな文法要素などではなく、概念的なとらえ方
- ・ 文化的背景の違いが言語の違いにどう表れるか
- ・ 理由や根拠の比較
- ・ 学習の主体性・責任感を持たせたい、同時に仲間との協働作業もできる＝ジグソーの理念
- ・ 未完成な自分を出せる→学びあう
- ・ 中学と高校を両方意識する→常に新しい課題が見つかるから、次の段階を意識できる
- ・ 基礎事項（分かっているつमोरのこと）の定着・再確認（事例を知っているからこそ気づき！）→低進度者へのサポートにもなる、同時進行で学ぶ（ただの答えの教え合いではない）＝概念化を目指し、学びのゴールが期待されているから

g) 芸術部会

- ・オープンエンド的な問いを設定する。
- ・知識構成型ジグソー法の授業を通して学んだこと、思考した過程などを生かして、その後の表現活動に生かしていく。
- ・思考・表現の授業でジグソーを使っていき、それを技能に生かしていくとよい。

④取組の状況

今年度の取組状況について令和7年1月に研究推進員等の先生方を対象にアンケートを行った（n=114）。表11は、今年度「知識構成型ジグソー法」をどんな場面で、どんな教材を使ってどの程度実践したかの平均値を示している。カッコ内は前年度（n=76）の同じ項目の数字である。回答者数が大きく増えたにも関わらず、どの項目も数値が伸びている。

項目・回答者ごとに見てみると、ばらつきは大きく「今年度新規教材として開発×研究授業で実施」については最大40教材という先生がいた。他方、過去教材を活用して（アレンジ・そのまま含む）普段の授業で5教材以上実践されている先生方も22名（19.3%）いた。

	今年度新規教材として開発	過去の教材をアレンジして活用	過去の教材をそのまま利用	計
研究授業で実施	1.2 (0.7)	0.9 (0.6)	0.1 (0.0)	2.2 (1.3)
研究授業以外で実施	1.4 (0.8)	1.7 (1.5)	1.7 (1.5)	4.7 (3.8)
今後実践を行う予定	0.6 (0.2)	0.5 (0.4)	0.4 (0.4)	1.6 (1.1)
計	3.2 (1.7)	3.1 (2.6)	2.2 (1.9)	8.5 (6.1)

表11：今年度の「知識構成型ジグソー法」の平均実践教材数（n=114）

	R6年度 (n=114)	R5年度 (n=74)	R4年度 (n=127)	R元年度 (n=117)
ほぼ毎時間	20.2%	9.5%	20.5%	9.4%
半分以上	33.3%	50.0%	34.6%	35.0%
月に数回程度	21.9%	13.5%	25.2%	29.9%
学期に数回程度	20.2%	18.9%	16.5%	24.8%
それ以外	4.4%	8.1%	3.1%	0.9%

表12：子どもが主体的、対話的に学ぶ場面を取り入れた授業の実施頻度

過去の実践例が活用できる授業研究のデータベース「学譜システム」（詳細は、第 2 部第 3 章第 2 節参照のこと）の登録者数も令和 5 年 12 月の 697 名から令和 6 年 12 月には 877 名と順調に増加している。「学譜システム」を活用して普段の授業から無理なくジグソーに取り組む先生方が少しずつ増えてきていると言える。

このアンケートでは、「知識構成型ジグソー法」か否かに関わらず子どもが主体的、対話的に学ぶ場面を取り入れた授業をどのくらいの頻度で実施しているかについても尋ねている。表 12 に示す通り、約 5 分の 1 の先生方が「ほぼ毎時間」、半数以上の先生方が「ほぼ毎時間」もしくは「半分以上」の授業で取り入れていると回答している。昨年度はアンケートの回答数が少なく、これまであまりプロジェクトに携わっていない先生方の回答割合が高かったので傾向がやや異なっているが、一昨年度と比べるとほぼ同様の状況で推移していると言ってよい。逆に言うと、現行指導要領が全面実施されて数年経つが、全体の約 4 分の 1 の先生方が「学期に数回程度」、「それ以外」という状況が続いている。学校や自治体全体でプロジェクトに参加してくださっている団体もあり、初任者から再任用の先生方までアンケート回答者の属性も多様である。「子どもが主体的、対話的に学ぶ場面」を授業に取り入れる頻度が「学期に数回程度」、「それ以外」の層の先生方にどう少しずつ授業を変えていっていただくかは、自治体や学校、本プロジェクト、ひいては国として引き続き取り組むべき課題ということになるだろう。

⑤授業づくりに関する考え方

またこのアンケートでは、「知識構成型ジグソー法」を用いて研究授業を行う際に、特に意識しているポイントを表 13 の 17 項目から最大 5 項目選択する形で回答してもらった。

項目	R6 全体 (n = 114)	R5 全体 (n = 76)	R6KCJ 高頻度 (n = 37)	R6KCJ 低頻度 (n = 30)
具体的な児童生徒の解答を想定しながら教材を見直す	54.4%	47.4%	62.2%	36.7%
教科のねらいやつけたい資質・能力を意識して課題を設定する	52.6%	51.3%	51.4%	40.0%
児童生徒の実態に即して課題や資料等の難易度を調整する	42.1%	46.1%	54.1%	33.3%
児童生徒の興味関心を喚起するような内容を扱う	41.2%	53.9%	43.2%	30.0%
指導方法を工夫する（例：ジグソー法のアレンジや他の指導法との融合など）	29.8%	34.2%	32.4%	26.7%
3 つのエキスパートに分けやすい内容を見つける	28.1%	26.3%	21.6%	43.3%
児童生徒が話しやすいグルーピングを心がける	28.1%	25.0%	21.6%	30.0%
なるべく普段遣いできるような授業の進め方を提案する	27.2%	22.4%	29.7%	30.0%
児童生徒が課題や活動の流れをきちんと把握できるようにする	22.8%	26.3%	29.7%	13.3%
ICT を効果的に活用する	20.2%	23.7%	21.6%	20.0%
本時と前後の学習との効果的なつながりを意識する	19.3%	17.1%	24.3%	20.0%
過去の授業研究での気づきや仮説を生かして授業づくりを行う	19.3%	13.2%	29.7%	6.7%
決まった答えがなくどんな解答がでてきてもよいような課題を設定する	17.5%	10.5%	8.1%	23.3%
他の先生方の意見や視点を取り入れながら授業づくりを行う	16.7%	13.2%	21.6%	6.7%
設定した授業時間内に一連の学習活動が収まるように内容や時間を調整する	9.6%	7.9%	16.2%	10.0%
これまであまり実践例がない内容や分野に取り組む	7.0%	6.6%	10.8%	3.3%
児童生徒の学習を見とるための評価の規準を具体的に設定する	7.0%	9.2%	8.1%	0.0%

表 13：「知識構成型ジグソー法」を用いて研究授業を行う際に特に意識しているポイント（％）

表13は、今年度と昨年度の全体の回答割合の比較、及び今年度の「知識構成型ジグソー法」授業の実施頻度（以下、「KCJ頻度」）別の回答割合の比較である。KCJ頻度については、6教材以上実践のある回答者を「高頻度」（ $n=37$ 、全体の32.5%）、2教材以下（管理職のぞく）を「低頻度」（ $n=30$ 、回答者全体の26.3%）と分類とした。項目は今年度回答割合が高かった順に並べている。また、それぞれ比較対象と比べて10%以上回答割合が高い項目の回答率には色を付けた。

今年度と昨年度を比べて最も回答割合が上がったのは全体1位の「具体的な児童生徒の解答を想定しながら教材を見直す」である。また、この項目を選ぶ割合の差がKCJ高頻度群（62.2%）と低頻度群（36.7）との間で最も大きかった。この項目をはじめ、R6、R5通じて全体上位の4項目（他に「教科のねらいやつけたい資質・能力を意識して課題を設定する」「児童生徒の実態に即して課題や資料等の難易度を調整する」「児童生徒の興味関心を喚起するような内容を扱う」）については、いずれもKCJ高頻度群が低頻度群と比べて10%以上選ぶ割合が高かった。これらが特にジグソーの授業づくりにある程度以上取り組んできた先生方が大事にされているポイントであると言ってよさそうである。

反対にKCJ低頻度群が高頻度群と比べて10%以上選ぶ割合が高かった項目は、「3つのエキスパートに分けやすい内容を見つける」「決まった答えがなくどんな解答がでてきてもよいような課題を設定する」であった。「3つのエキスパートに分けやすい内容を見つける」は低頻度群で最も選ばれた項目であり、特にまだあまり「知識構成型ジグソー法」の授業づくりに取り組んでいない先生方が気にしやすい項目としてイメージしやすい。「決まった答えがなくどんな解答がでてきてもよいような課題を設定する」については、「子ども主体の授業イコールオープンエンドでなければいけない」と考える先生方がジグソーに取り組みにくいと感じておられるのかもしれない。

また、全体では上位でなかったものの、KCJ高頻度群が低頻度群と比べて10%以上選ぶ割合が高かった項目は、「児童生徒が課題や活動の流れをきちんと把握できるようにする」「過去の授業研究での気づきや仮説を生かして授業づくりを行う」「他の先生方の意見や視点を取り入れながら授業づくりを行う」である。「児童生徒が課題や活動の流れをきちんと把握できるようにする」からは、全体3位の「児童生徒の実態に即して課題や資料等の難易度を調整する」とあわせて、特にKCJ高頻度群の先生方が子ども達の課題や資料の把握を大事にしている傾向が見える。また「過去の授業研究での気づきや仮説を生かして授業づくりを行う」「他の先生方の意見や視点を取り入れながら授業づくりを行う」からは、特にKCJ高頻度群の先生方が授業研究を大事にされていることが伺える。KCJ高頻度群の先生方において、前述の「学譜システム」が積極的に活用されていることの証左でもあるだろう。

⑥授業研究スタイルの広まりと課題

アンケートでは、あわせて「新しい学びプロジェクト」で近年力を入れている授業研究の取組、子どもの学びのシミュレーションによる事前検討及び仮説検証型の授業研究（内

容については、それぞれ第 2 部第 3 章第 3 節及び第 4 章第 1 節を参照のこと）の活用状況及びその手ごたえや課題について聞いた。過去 3 年間の活用状況は表 14 のとおりである。

	「子どもの学びのシミュレーション」による事前検討			「仮説検証型授業研究」による研究協議		
	R6 (n=114)	R5 (n=72)	R4 (n=113)	R6 (n=114)	R5 (n=72)	R4 (n=113)
1. 聞いたことがない	14.9%	26.4%	8.0%	9.6%	16.9%	4.4%
2. 聞いたことはあるが経験したことはない	7.0%	8.3%	8.8%	7.9%	8.5%	8.0%
3. 研修等で経験したことはあるが自校で行ったことはない	12.3%	8.3%	15.9%	8.8%	9.9%	14.2%
4. 自校で行ったことがある	44.7%	37.5%	40.7%	50.0%	45.1%	45.1%
5. 自分が進行役になって自校等で行ったことがある	20.2%	19.4%	23.9%	21.9%	19.7%	26.5%

表 14：授業研究の手法の活用状況

プロジェクトに参加する学校やその学校の先生方、アンケートの回答者層が毎年入れ替わるため年度ごとに数値が上下するが、どちらの手法についてもおおむね回答者の 8 割程度が経験しており、7 割前後が自校でも実施している。研修等で経験した先生方の多くが自校でも実践してくださっているというのは、成果であると言える。

あわせてこれらの授業研究手法の課題も伺った。時間の確保（28 名）が最も多かったが、本来ならこうした授業研究に時間をかけたいが他の業務で難しいといったニュアンスの意見が多く見られた。続いて授業研究の進め方の共通理解（8 名）、参加者の質の多様性（6 名）が挙がっており、（特に外部から参加者のある会の場合）参加者の目線をあわせることに課題を感じておられる先生方も多い。これらの授業研究手法の目的や時間短縮の工夫については、第 2 部第 3 章第 3 節及び第 4 章第 1 節にもまとめている。

次に、子どものシミュレーションによる授業検討について、「大人が予想しても、実際の子どもの姿とズレる」という課題（8 名）が挙がったが、これについては 1 回の研究授業の成功・失敗という視点ではなく、むしろ「ズレから学ぶ」という視点で授業研究を進めることが大切だろう。繰り返すうちにより実態に即した予想ができるようになることが授業力の向上であり、そのための授業研究の過程だと考えたい。

授業者のゴールを明確にすること（5 名）も挙がった。授業者のゴールがぶれると、協議が建設的なものになりにくい。シミュレーションの前に、近い同僚の先生方で話し合っ

たり、メーリングリストを活用したりしてゴールイメージは固めておきたい。

⑦マネジメントの視点から

授業研究の自走を支え、プロジェクトの質的深化と量的拡大を実現するために、教育行政や管理職といったマネジメントの視点からはどんな成果と課題が見えていて、また今後どんな取組が可能なのか。今年度も引き続き2回の連絡協議会及び教育長・担当者会議で協議を行っている。

今年度は、各自治体で今後どのように取組を推進するかに加えて、ICT環境の充実や先生方の働き方改革など、学校の環境変化も視野に「新しい学びプロジェクト」というネットワークの良さを生かすために、今後プロジェクト全体としての取組をどのように変えて／維持していけるとよいかについても協議を行った。

論点の一つとして挙げたのは、先生が同士が気楽に授業研究のやりとりをしていくための組織づくり、仕組みづくりである。現状の教科部会だと各教科の研究推進員だけでも平均30名以上、サポートメンバーも含めると各教科平均200名近いメンバーが参加している。この状態で誰かがメーリングリストに投稿した際に他の先生がコメントを返すのはなかなか難しい。参加団体を地域ブロックに分け、より小さいチームで先生方同士の顔が見える関係性を作ることで、相手意識をもってコメントをしたり、ときにはオンラインで短時間のミニ教科部会を開催したりできるとよい。そのためには、地域ブロックで対面の研究会を行えるとよいといった議論があった。

もう一つの論点は、新しく参加団体に異動してきた先生方をどう巻き込むかという点である。まずは試してもらってよさを実感してもらわないと始まらないという問題と、目指しているのはジグソーの普及ではなく、ジグソーを用いた授業研究を通じて子どもや先生が変わり、普段の授業が変わることだという目的とをどう両立するかが課題である。今まで以上に自治体や学校がジグソーを用いた授業研究に取り組む目的を明確に伝えること、目指す姿を共有するために協調学習マイスターの授業に触れる機会を作ることなどが議論された。地域ブロックを取り入れることでこうしたマイスターの活用推進も期待される。

また、別の論点として、自治体、学校の教育目標に即した評価のために、小中高で育てたい資質・能力の段階的な目標イメージを、プロジェクト全体で作成し、それに即して各自治体等が評価を進めていけるとよいといったアイデアもあった。

特に第二、第三の論点については、プロジェクトの目的、目指す子どもの姿、先生方の姿を整理し、次の課題を同定して、それを各自治体や学校の取組に生かしていくことができる。そのための議論も今後マネジメントの視点で関わる先生方と継続していきたい。

(4) 学譜システムのビッグデータからこれまでを振り返る

本節では、プロジェクトの成長を少し長いスパンで振り返って今後に向けた知見を得たい。そこに使えるのが、学譜システムである。なぜなら、システムはウェブサイトとして運用している関係で、メーリングリストとは違って、先生方の活用状況がページの閲覧（Page View：PV）ややり取りのデーター最近流行りの言葉で言えばビッグデータとし

て一から把握できるためである。そのデータを使って、14年間のプロジェクトの歩みを振り返ろう。

①授業研究をめぐる「働き方」の周期性

図10の棒グラフが各ページのPV数、折れ線が登録者数を表している。システム運用開始から7年にわたって登録者数もPV数も増えてきている。また、開発教材ページの運用（2019年5月）、単元マップの運用（2021年6月）以降、それぞれのページがそれぞれの目的に従って活用されている様子が見て取れる。注目すべきは、PV数の増減パターンである。「年」の上にある数字が「月」を表しており、毎年3、4月にPV数の底が来て、7、8月から秋にかけてのPV数が多いことがわかる（ビッグデータだけに傾向が安定して確かめられる）。あたかも年度当初は先生自身の慣れや学級づくりに力を入れた上で、秋の公開授業や研究授業に向けて授業研究に勤しむ姿が垣間見えるようである。

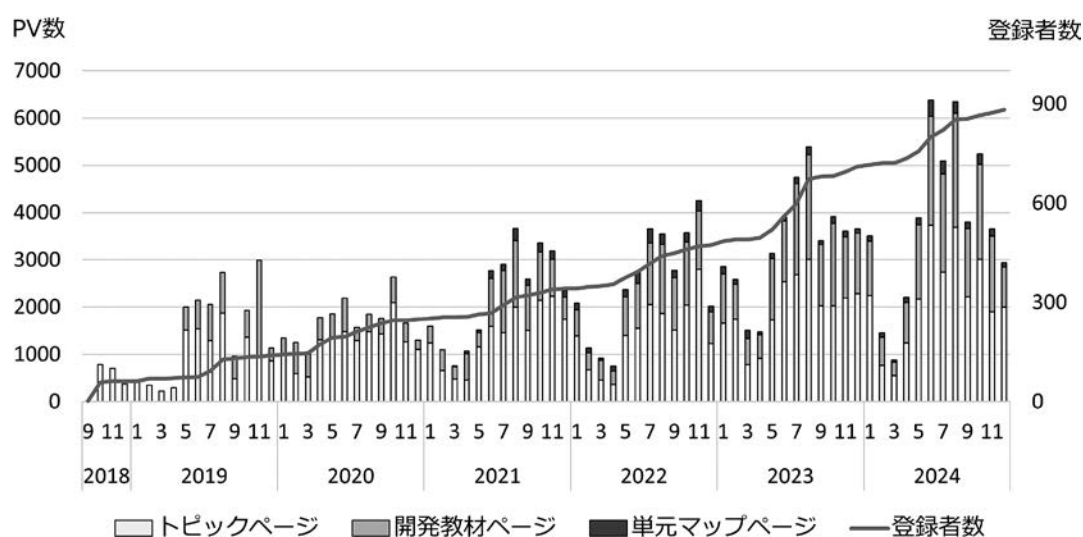


図10：学譜システムの登録者数（折れ線）と閲覧数（棒グラフ）の推移

こうしたデータがたくさん集まると、「働き方」改革といったときも、一律に時間削減を試みるより、先生の働き方に合わせてメリハリをつけることも可能になるだろう。その先には、一年間の周期を意識して、例えば年度当初から授業を通して学級づくりを行ってみることでもっと一年間の過ごし方が効果的・効率的になるかといった新しい「実験」を行うことも可能になるのではないだろうか。そんな観点で棒グラフを見直してみると、今年度は従来に比べ4～6月からPV数が増え、年度のピークも6月に来るなど、「早期化」が見て取れる。

②メーリングリストのやり取りの長期的な変化

次は、メーリングリストに投稿される文章の長さや投稿に対する返信の数から、授業研究コミュニティとしての成長を見てみよう。対象としたのは、各教科と「全体・その他」のメーリングリストに投稿された（お知らせ等を除いた）8,065通のメールである。

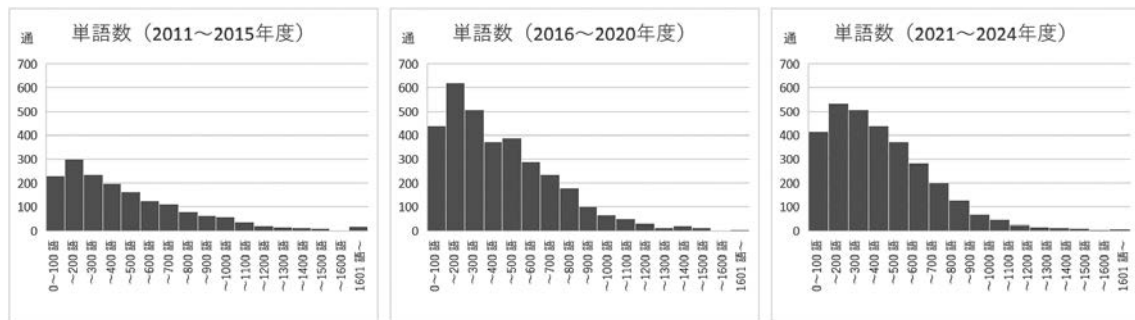


図 11：メーリングリストに投稿されたメールの長さ（文章量）

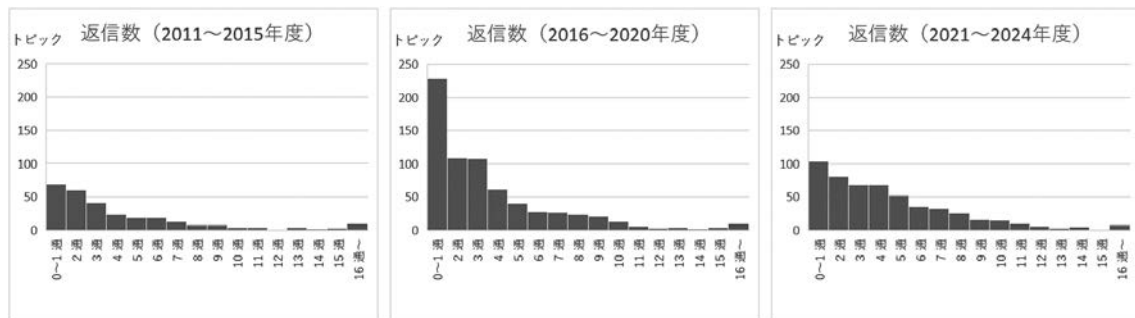


図 12：投稿されたメールへの返信数

まず図 11 が各メールの含む単語数ごとにそれが何通あるかを縦軸に示した 5 年毎のグラフである。どの期間でも、最頻値は 100-200 語でそこからなだらかに下がっていくグラフ（長く書く人は段々少なくなる）となっている。3 期間の間の大きな変化も特にない。

次に図 12 が、最初の投稿（例：授業案や振り返りシートの投稿）に対して、何通返信があったかをトピック数としてまとめたグラフである。投稿に対して誰かが一回だけ反応するパターンがどの期間でも多いが、注目したいのは、2016-20 年度に比べて 2021-24 年度でその割合が減り、2 通～5 通と続くやり取りが増えた点である。これは 2011-15 年度に比べても多い。つまり、投稿者が誰かの返信にさらに返信したり、また別の関係者がコメントしたりといったやり取りが増えてきているということである。

まずは「知識構成型ジグソー法」で授業をつくれるかどうか先生も研究者もフォーカスしていた、創成期の限られたメンバーとのやり取り（2011-15 年度）から、新しい自治体や先生方が多数参入しスケールを拡大する中で、授業づくりから授業改善へと重心を移し始めた時期のやり取り（2016-20 年度）、開発教材も相当溜まって、学譜システムも活用して授業づくりの負担を軽くし、どのような学びが児童生徒に起きるかを議論することにフォーカスできるようになった時期のやり取り（2021-24 年度）へという変化が見える。

いわゆる一般的な「SNS」の投稿に対する返信数をビッグデータから分析すると、ほとんどのやり取りは「1 通」で終わり、互いの考えが「build-on する（積みあがる）」やり取りは減多にない。このプロジェクトで、「授業」というトピックをめぐる子どもの学

びを語り合うコミュニティが育ってきているとすれば、それは大きな成果だろう。

（５）今後に向けて

報告会パネルディスカッションにあったように、現在、国の施策レベルで、現行の学習指導要領で目指した新しい学びのゴールに向けての取組を一層実質化させていくために、教育課程、教員養成、先生方の働き方等の条件整備の改革が一体として進みつつある。「新しい学びプロジェクト」は、協調学習の授業づくりを切り口に、子どもの学び、先生方の学びの充実のために、教育行政の先生方、管理職の先生方、実践者の先生方がそれぞれの立場で問題解決しながら進めてきたプロジェクトである。現場の先生方が子どもの学びをどうつなげるためにどんな風に授業をデザインするかを考えてきたのと同様に、教育行政、管理職の先生方は先生方の学びをどうつなげるためにどんな風に取り組や組織をデザインするかを考えてきた。中には実践者から管理職、教育行政に立場を変え、目の前の課題を変えながらプロジェクトに携わり続けてくださっている先生方もいる。こうした取組はあまり他に例がないと言えるだろう。その意味では、私たちの15年の取組の成果や現在見えている課題は、今後の国の改革に大いに示唆を与えうるものであるといつてよい。

他方、私たちの取組が国の改革に示唆を与えていくためには、私たち自身が私たちの目指していることや課題についてもう一度よく整理することも必要だろう。(4) ⑥マネジメントの視点の項で示したように、プロジェクトの目的、目指す子どもの姿、先生方の姿を改めて整理し、そのうえで課題を同定していくことは、私たちが現状のリソースや制約の中で可能な取組を次に進めるためにも必要である。と同時に、進みつつある国の改革に示唆を与えることで、現状、それぞれの市町や学校の範囲では解決できない課題（例えば、人事や時間の問題等）について、大きな制度を変えていくきっかけを作ることにもつながるかもしれない。

またこうした視点からプロジェクトを捉えなおし、進化させていくためには、教育行政や学校組織マネジメントなど、CoREFの研究者とまた少し違った視点の専門家にもプロジェクトに関わっていただくことも有益だと考える。

今後に向けて、私たちがこれまで取り組んできたことの価値を再認識し、その目的を再整理し、そこから現状の課題を捉えなおすことによって、プロジェクト内の改善だけでなく、プロジェクトを取り巻く諸条件の改善にもつながるような発信も進めていきたい。

3. 未来を拓く「学び」プロジェクト

(1) 連携事業の概要

埼玉県教育委員会では、CoREF との連携による「知識構成型ジグソー法」を活用した協調学習の授業づくりを柱の一つに、生徒の主体的な学びを引き出す継続的な授業改善を行う研究連携事業を平成22年度から継続してきた。平成22、23年度は「県立高校学力向上基盤形成事業」、平成24～26年度は「未来を拓く『学び』推進事業」、そして平成27年度からは「未来を拓く『学び』プロジェクト」を開始し、令和2年度からは、さらに「主体的・対話的で深い学び」を実現するための取組を行い、進化と深化による新しい学びによる授業改善をめざしている。令和4年度からは、年限を限った特別な事業ではなく、県立学校の恒常的な授業改善のための取組として位置づけられるようになった。

研究連携の中心的活動は、「知識構成型ジグソー法」による教材の開発、授業実践、実践の振り返りである。研究の具体的な進め方としては、研究連携に参加を希望する学校（研究開発校）を県内の公立高等学校及び県立中学校から募り、各研究開発校が校内で中核的に研究を進める教員（研究開発員）を申請する。研究開発員は教科等の部会に組織され、対面とオンラインのやり取りによって、協力して教材開発と実践、効果検証を行う。

研究推進の進行管理及び連絡調整は、埼玉県教育局県立学校部高校教育指導課及び埼玉県立総合教育センターがリードし、CoREF はこれらと協力しながら、協調学習の理解を深めるためのワークショップのデザインや教材開発の支援、授業実践評価など、研究推進上の様々なサポートを行う。また、埼玉県教育委員会から CoREF にマイスター認定教員（後述）1名が派遣され、協力研究員として研究連携のコーディネートを行っている。

①事業規模の推移

15年間の研究連携における事業規模の推移を図13に示す。

研究連携がスタートした平成22年度には、研究開発校が県立高校の約7%にあたる10校であったものが、今年度は全ての県立高校137校に加えて市立高校2校、市立中等教育学校1校の140校に拡大している。

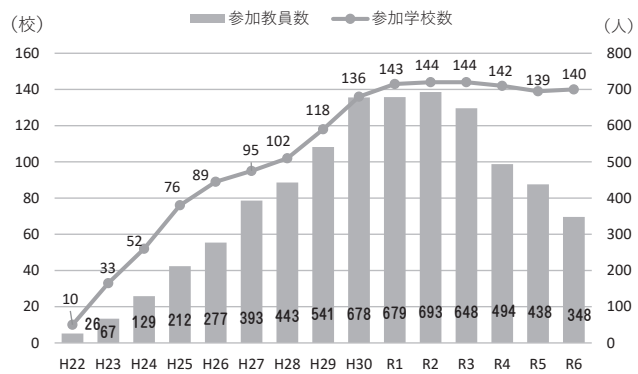


図13：研究開発校及び研究開発員数の推移

また、今年度の研究開発員数は348名であり、1校あたり平均2.5名の研究開発員が登録されている。

②事業の目的

本事業の目的を表15に示す。本事業は、協調学習の授業づくりに関する埼玉県の取組の結実期として位置づけられ、これまで取り組んできた「知識構成型ジグソー法」による協調学習の授業づくりをより広いアクティブ・ラーニングの文脈から捉えなおし、協調学

習の授業を特別なものではなく日常化することを目指してデザインされている。そのため、事業の目的としては、学びの評価についての研究に一層注力すること、「協調学習」の授業づくりを軸とした教員同士の学びのネットワーク形成を一層意識的に行うことが掲げられている。

未来を拓く「学び」プロジェクトの事業目的・事業内容
1 事業の目的 協調学習による授業づくりを中心とする主体的・対話的で深い学びを実現する授業改善に取り組む。 2 事業の内容 (1) 県教育委員会は、県内各高等学校から研究開発員を募集する。研究開発員は、上記事業の目的の達成を通じて、生徒の資質・能力を向上させる。 (2) 研究開発員は、「主体的・対話的で深い学び」を実現するため、教員ネットワークによる協働的活動を取り入れ、授業や教材の研究及び実践を行う。併せて、これらの振返りを通じて授業改善に取り組む。 (3) 県教育委員会は、教科部会ミーティング及び公開授業・研究授業を主催する。また、専用ウェブサイト（以下、「情報交換サイト」という）を運営する。 (4) 本事業の目的を達成するため、一般社団法人教育環境デザイン研究所 CoREF プロジェクト推進部門（以下、CoREF という）等、専門の知見を有する機関と連携して取り組む。

表 15：「未来を拓く『学び』プロジェクト」の事業目的・事業内容

③未来を拓く「学び」プロジェクトを中心とした事業展開

埼玉県と CoREF との研究連携は、本事業に留まらず、多角的な事業展開とそれらを有機的に組み合わせた教員の学びのシステムづくりを行ってきた。その展開を図 14 に示す。

平成 22 年度に「知識構成型ジグソー法」を用いた協調学習の授業づくり研究連携がスタートし、平成 24 年度には、授業力向上研修として、その成果を生かした初任者研修がスタートした。授業力向上研修の講師は、CoREF とともに、研究開発員や各教科部会を運営する指導主事が務めている。初任者研修による県内の高等学校への全面展開に伴って、各学校管理職や教育行政関係者にビジョンの共有を行うための管理職研修が平成 25 年度にスタートした。平成 28 年度からは、悉皆で行われている新任校長、新任教頭研修にも協調学習の授業改善支援が組み込まれた。

また、平成 26 年度には、研究連携に携わる実践者の中からさらに中心的な役割を果たす教員を対象に月 1 回のワークショップ型の研修を 1 年間行う協調学習マイスター研修がスタートした。このマイスター研修は、次節で扱う CoREF の「本郷学習科学セミナー」を活用したものであり、他県から同様のねらいで参加する多様な校種・教科の実践者や研究者と共に意見交換や実践検討を行うことが可能になっている。

埼玉県は協調学習マイスター認定教員は今年度当初 77 名であり、知識構成型ジグソー法による協調学習に基づく授業改善を推進している。さらに、協調学習の実践が浅い教員へ公開授業の実施や県内の研修会講師等を務めている。

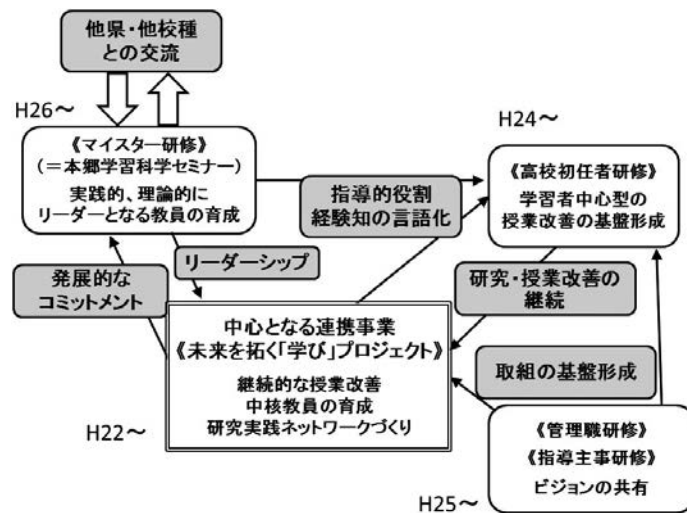


図 14：埼玉県高等学校における協調学習関連事業の展開

15 年間で、研究開発員が指導主事や管理職に就き次代の教員の育成を支える例も増えてきた。多角的な事業展開と教員の学びのシステムづくりによって、埼玉県における協調学習の授業づくりの取組は、単に新しい授業手法の研究開発に留まらず、「知識構成型ジグソー法」を使った協調学習の授業づくりという 1 つの取組を核に、大学やその先の社会で求められる資質・能力の育成に向けて、県内の先生方が高等学校における学びの変革を考える 1 つの基盤を形成してきたと言える。

（2）今年度の事業の報告

続いて、今年度の「未来を拓く『学び』プロジェクト」の実施状況について報告する。

①今年度の研究開発員

今年度の教科部会別の研究開発員数は表 16 のとおりである。

なお、研究開発員 348 名のうち、76 名（21.8%）が昨年度初任者研修で協調学習を学んだ受講者である。これは初任者研修受講者全体の約 27.6%にあたる。また、今年度研究開発員の 285 名（81.8%）が、平成 24 年度以降の授業力向上研修の受講者である。協調学習関連事業を有機的に展開することによって、初任者の段階から授業改善に前向きな教員を後押しし、教員経験年数に関わらず授業改善の中核にまで育て上げるシステムが機能していると言える。

国語	地理歴史	公民	数学	理科	保健体育	音楽	美術・工芸	書道	外国語	家庭	情報	農業	工業	商業	看護	福祉
62	45	10	51	40	20	7	3	4	53	4	13	6	16	7	5	2

表 16：令和 6 年度「未来を拓く『学び』プロジェクト」教科部会別研究開発員数一覧（348 名）

②今年度のスケジュール

今年度の事業の主なスケジュールと概要を表 17 に示す。

日程	イベント・会場	概要
4 月 30 日	指導主事対象 説明会 (埼玉県立総合 教育センター)	重点研究授業を中心とした教科部会運営の全体的なイメージをつかみ、各教科部会で足並みを揃えた運営を行うために、事前協議・授業観察・事後協議の一連の流れを体験し、目的の共有を図った。
6 月 26 日	公開授業	マイスター教員による、初任者研修受講者など協調学習の経験の浅い教員を対象とした知識構成型ジグソー法の授業を 3 会場、計 6 授業で実施。当日は事前協議・授業参観・事後協議を、他教科の先生なども含めて対面で行った。
6 月～7 月	第 1 回 教科部会 (オンライン)	各教科でプロジェクトのビジョン・目的を確認し、そのための年間取組を共有する機会とする。ねらいを十分理解した上で、そのために何ができるのか意見交換を行い、今年度の進め方について確認を行った。
8 月 27 日 8 月 30 日	第 2 回 教科部会 (オンライン)	全教科合同で開催し、教材検討や教科横断的な取り組み、実践報告など、研究開発員自身が興味関心のあるテーマを選択し協議・報告を行った。
(2 学期)	事前教材検討 (オンライン)	各教科で公開授業実施に向けた教材検討をオンラインで行った。
(2 学期)	公開授業	事前教材検討やサイト掲示板を活用して作成した教材をもとに、12 教科による公開授業を行った。当日は事前協議・授業参観・事後協議を、他教科の先生方なども含めて対面で行った。
(3 学期)	第 3 回 教科部会 (オンライン)	今年度の活動について振り返り、公開研究授業やその他の授業実践から見てきたことを交流し、次年度の研究の進め方について話し合った。

表 17：令和 6 年度「未来を拓く『学び』プロジェクト」年間スケジュール

ICT 環境の整備に伴い、教科部会は原則オンラインでの開催となっている。昨年度に引き続き、第2回教科部会は合同教科部会として実施した。実践報告に加え、教科等横断的な学びの授業づくりや学習評価等のテーマ別の協議を行うグループもあった。対面のスケジュールとしては、1学期に指導主事対象説明会、マイスター教員による公開授業、2学期には公開授業及び事後協議を行った。公開授業にあたっては、研究開発員だけでなく、初任者研修受講者にも参加を呼びかけ、研修と事業との接続を図った。

(3) 今年度の研究推進

①開発教材

今年度全体で12教科の公開研究授業を定め、オンラインでの事前教材検討及び対面による授業参観・事前事後協議を行うことを中心とした研究となった。

本報告書巻末のDVDには、今年度の本事業実践のうち公開授業12例、その他26例の38例を含む本事業を中心とした高等学校での実践2,166例について、授業案、教材、授業者の振り返りをPDFファイルで収録している。ご活用いただきたい。

②公開授業

授業改善を目的とした公開授業は、新型コロナウイルス感染症拡大に伴い対面での実施ができない時期があったものの、令和4年度以降は対面での公開授業及び授業研究会を実施しており、今年度は12教科について公開研究授業を実施した。

(1) 目的

協調学習による授業づくりを中心とする主体的・対話的で深い学びを実現する授業改善に取り組む。併せて、生徒の学びを直接見とるとともに、事後の協議を通じて、評価改善の一助とする。

(2) 実施時期 10月上旬から12月中旬まで

(3) 実施教科 12教科

・国語 ・地理歴史 ・公民 ・数学 ・理科 ・保健体育
・芸術 ・外国語 ・家庭 ・情報 ・商業 ・看護

(4) その他

各学校において、教科等横断的な視点で授業改善に取り組むことができるよう、他の教科にも参加することができる。

公開授業は、仮説検証型授業研究のスタイルで行い、そのファシリテーションは本事業の事務局担当指導主事、又は埼玉県からCoREFに派遣されているマイスター教員が行った。公開研究授業にあたっては、次ページの図15、16のように、研究授業の目的と進め方の下に実施した。図17には一例として10月1日に鴻巣女子高校で行った数学科の公開授業の様子を示した。事前に生徒の学習の様子について参加者も予想してから観察を行うことで、具体的な見とりとそれに基づく協議を行うことができた。

未来を拓く「学び」プロジェクト 公開授業

＜内容＞

- 公開授業の前後に、生徒の資質・能力の育成が図れるか協議を行い、授業実践と振り返りのサイクルを通じて授業改善に取り組む。
- 公開授業では見とりのポイントを整理して参加することを通じ、評価改善に取り組む。

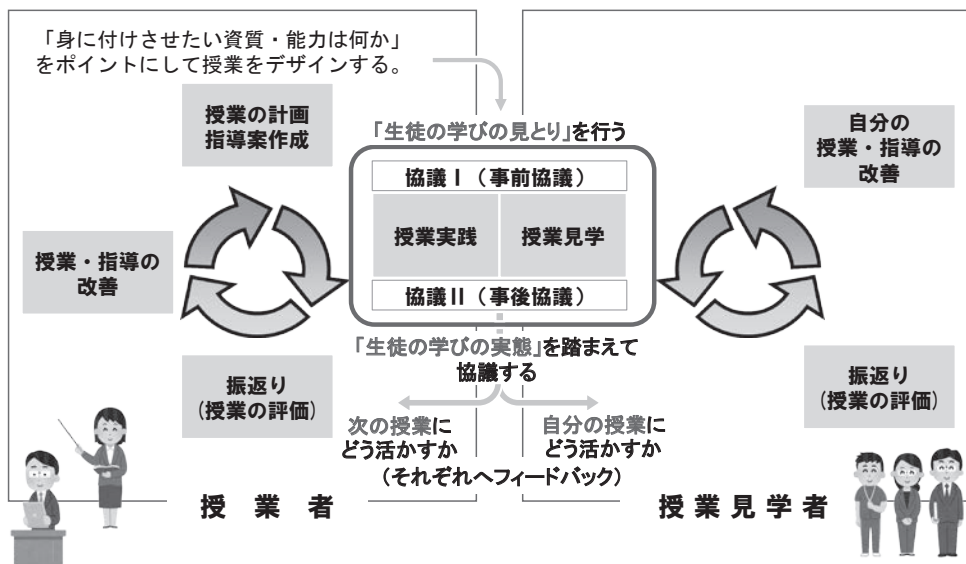


図 15：未来を拓く「学び」プロジェクト 公開授業のねらい

公開授業の流れ＜実施日＞

（１）事前協議（３０分）

授業見学者は本時で行う教材を見て、問題に実際に解答する。

このとき、答えが１行、２行であったり、単語であるなど、色々出てくるのは生徒も同じ。

授業を通じて生徒がどう変容していくのかを、授業で見とる。



（２）公開授業（１～２コマ）

協調学習「知識構成型ジグソー法」による授業実践を行う。

授業見学者は『授業のみかた』を踏まえて、想定していたことや、つまづいていた点など、生徒の学びの実際を見とる。

「知識構成型ジグソー法」による授業のみかた

- 生徒が自分の考えを変えていく様子を追う
- 生徒の具体的な発言や記述に着目する
- 自分なりに授業の内容を理解したり 生徒の学習の様子を予想したりしたうえで 生徒の様子を観察する

＜実施日の前日まで＞

授業者は、情報交換サイトに授業案等を投稿して、他校の教員と意見や情報の交換を行うことができる。

または、オンラインミーティング等で直接協議し、授業案のブラッシュアップを行う。



（３）事後協議（５０分）

協議１「授業者の事前の期待や想定と比べて、子どもの学びの様子について見えてきたこと」

※ 事前に想定したことと生徒の実際の学びを比べ、気づいた点を協議する

協議２「子どもの学びの様子を根拠にして、よりねらいに向けた学びを引き起こすために授業デザインや支援の工夫として考えられること」

※ 協議１で挙げられた子どもの学びの姿を根拠にして協議する



図 16：未来を拓く「学び」プロジェクト 公開授業の流れ

令和6年度の実施例

教科・科目 数学Ⅰ（数と式；数学S1501）
 実施日 令和6年10月1日（火）
 会場校 埼玉県立鴻巣女子高等学校

①事前協議 10:20～10:50

- 1) 授業者より、前時までの学習内容等を説明
- 2) 参観者が問題を解く
- 3) 授業者より、授業のねらい等の説明
- 4) 生徒は期待通りの活動ができそうか、協議

【参加者の声】

- ・ 問(1)はすんなり解けるだろうが、問(2)はほとんど解けないのではないかな
- ・ Exp.Aひっ算の割り算で戸惑うのではないかな

②授業見学 11:00～11:50



参加者は生徒もしくはグループの発言・活動を追う
 （画像右は学瞰レコーダーで撮影）

③事後協議 12:00～12:50



- 1) 事前想定と比べた生徒の学びの実態

【参加者の発表（クロストーク）】

- ・ 想定通り、(1)はすんなり解けている生徒は多かった
- ・ Exp.Aのひっ算の計算に時間がかかり、時間内にポイントの記述までたどりつけなかった
- ・ 「なぜ有理化するのか」その理由を十分理解できないまま活動している

- 2) ねらいに向けた学びをより引き起こす工夫

【参加者の発表（クロストーク）】

- ・ ポイントやExpの目的を資料の中段に持ってくることで、活動の内容が明確化されるのではないかな
- ・ 問(2)は計算が大変な課題である。主題を「計算して有理化させること」か「説明させること」のどちらかにすべきではないかな

図 17：未来を拓く「学び」プロジェクト 公開授業の様子

③公開授業を核とした教科部会の研究推進

続いて、公開授業を核とした教科部会の研究推進の具体的な様子について、看護部会を例に紹介する。研究推進は、公開授業以外すべて放課後の時間を利用した遠隔同期での教科部会とプロジェクトの専用サイトを活用した掲示板でのやり取りで行っている。

a) 第1回教科部会

今年度の看護部会の取組は、福祉部会と合同の第1回教科部会から始まった（7月2日（火）；遠隔同期）。前半では自己紹介をはさみながら今年度の活動計画や情報交換サイトの活用方法についてなどの確認を行い、後半では、今までの実践の取り組みや、そこから見えてきた教材づくりのポイント、生徒に合わせた授業案作りの必要性や反省等を共有、また、「専門教科だからこそ教科等横断ができるのではないかな」という意見から、その可能性について交流を行った。

その後、今年度の公開授業を、常盤高校の沼上晋作教諭による高校2年生「基礎看護」と決定した。

b) 公開授業の事前検討過程

沼上教諭の授業案についての最初の検討は情報交換サイト上の掲示板で行われた。授業デザイン（第一案）の概要は表18の通りである。

生徒の活動の予想として「エキスパート活動はタブレットを活用した調べ学習になるの

課題 (概略)	注射を行う際の看護師の役割には何がありますか？
Exp. A	★注射を受ける患者の想いを理解しよう ■看護師が注射を実施する際、患者にどんな対応をしますか？ ■患者に行う声かけの具体的な内容を書いてみましょう。
Exp. B	★注射実施時におこる患者のリスクを考えよう ■今回常盤さんに注射を実施するにあたり、特に注意すべき神経障害とその理由はなんですか？ ■神経障害を起こさないために注意すべきポイントはなんですか？
Exp. C	★注射を実施する看護師のリスクを考えよう ■看護師が針刺し事故を起こさないためにどうすればよかったですでしょうか。 ■針刺し事故が発生したときにはどのような対応が必要でしょうか。
期待する 解答の 要素	注射は与薬の技術の1つで、患者にとって侵襲や苦痛を伴う行為であるということを忘れてはならない。看護師側には針刺し事故を起こすリスクがあるため、物品の取り扱いには十分注意する必要がある。注射を安全に行うためには既習知識を活用し、患者の反応や表情をよく観察するなどさまざまなスキルが必要になる。それらを忘れずに演習に臨み、技術習得を目指してほしい。

表 18：公開授業（沼上教諭）デザインの概要（第一案）

ではないか」「ジグソー活動で期待する回答は生徒たちにどこまで抽象的／具体的にまとめてくれるイメージか」という意見や質問が見られた。本時生徒に期待する思考や対話がどのようなものか、ねらいを具体化するための議論が行われていたと言える。

それらの意見を踏まえて沼上教諭は再度教材を見直し、2 回目の検討をオンラインでの教科部会で行った（11 月 13 日（水）；遠隔同期）。沼上教諭から授業のねらいなどを説明した後、主に現在の教材で授業者のねらいや期待する生徒の姿が実現できそうかについて協議を行った。

協議では生徒の活動の予想として「エキスパート C では手袋をしない設定だが、資料のどこにも記載はない。その点を生徒が誤解しないよう指示や補足説明があっても良いのではないか」という意見や、『「看護師の役割に何がありますか」という問いだと『これがあります』と答えるだけになりそう。根拠を踏まえて手順の説明を求めるのであれば『なんで？』と聞くなど、問い方の工夫が必要ではないか』などの意見が挙げられた。ここでは現在作成されている教材を生徒がどう受け取りそうか、どんなところにこだわりそうかといった生徒目線での教材検討がなされていたと言える。これらの意見をもとに沼上教諭は「抽象的な問いだとちゃんと言えるとときもあれば『0 か 100 か、○か×か』のような形になりそう。もう少し具体性を持たせた問いへの変更を検討する」と、生徒の実態を踏

まえて課題設定の見直しを行った。

このように教科部会での協議・意見交換は、単なる感想の伝え合いでなく、授業のねらいを明確にするための議論、生徒の実態を踏まえて教材を見直すための議論として行われている。こうした教材検討の視点は、参加者自身が授業実践を行う際にも欠かせないものであり、沼上教諭だけでなく参加した先生方にとっても自身の授業を振り返り、見直すきっかけとなっていた。

課題 (概略)	注射を実施するにあたり、看護師、患者双方に安全な技術とその根拠を考えよう
Exp A	■注射を受ける患者は、その処置や看護師に対してどんな感情や想いを抱きますか？ ■注射を受ける患者の立場として、看護師にどんな対応をしてほしいでしょうか。理由も合わせて考えましょう。 ■看護師役になりきってください。上記を踏まえ、場面を想像して常盤さんへ声かけの内容を考えましょう！
Exp B	■①皮膚の構造と刺入の様子、②前腕部の神経・血管走行とそれぞれの名称を図示してみましょう。 ■静脈注射実施時の観察項目を挙げてみましょう。 ■常盤さんの現状は正しい反応でしょうか。そう考えた理由は何でしょうか。
Exp C	■常盤さんに注射を実施するにあたって、事前に患者のどんな情報を収集する必要がありますか？ ■あなたの針刺しの原因になったポイントはどこにあったでしょうか。理由も合わせて考えましょう。 ■あなたは本当はどうすればよかったですか。理由も合わせて考えましょう。
期待する 解答の 要素	注射は与薬の技術の1つで、患者にとって侵襲や苦痛を伴う行為であるということを忘れてはならない。看護師側には針刺し事故を起こすリスクがあるため、物品の取り扱いには十分注意する必要がある。注射を安全に行うためには既習知識を活用し、患者の反応や表情をよく観察するなどさまざまなスキルが必要になる。確かな根拠と技術で安全な注射の技術を身に付けられるようにしてほしい。

表 19：公開授業（沼上教諭）デザインの概要（最終案）

こうした協議も受け、沼上教諭は再度教材等を検討し、授業のねらいと照らし合わせ、必要な修正を行った。最終的には表 19 のようになった。教材の問い等も変更されている。（授業の詳細については、本報告書付属 DVD「開発教材」フォルダ内の「看護 S1501 注射」を参照のこと）

このように、オンラインでの協議や情報交換サイトを組み合わせることで、時間や場所

の制約なく積極的な意見交換を行うことができる。また、授業者と CoREF のやりとりだけでなく、研究開発員同士でのやりとりができることで、学校を越えた連携がとりやすくなるとともに、それぞれの教員がこれまでの経験から得た視点を共有しながら教材の改善ができる。

c) 公開授業の実施と事前協議・事後協議

こうした一連の授業案の改善を行った後、11 月 19 日（火）に授業実践が行われた。当日は対面による実施とし、授業前に 30 分程度の事前協議、授業後に 50 分程度の事後協議を併せて行った。当日は研究開発員をはじめ、初任者など約 10 名が参加した。

事前協議では、授業者から前時までの様子を話した後、参加者が実際に課題に取り組んだ。その後、沼上教諭から授業のねらいや生徒の活動の様子などを説明したうえで、各自で生徒の活動を予想した。生徒の活動を予想することで、生徒の実際の活動がこちらの期待したものかどうか、比較・検討することができる。また、授業を参観するときには、1 人の生徒やグループを観察し続け、具体的な発言や行動から生徒が自分の考えを変えていく様子を追うようお願いした。これらにより、その子が今何をどう考えているのか、つまづいているとするとどんなところでつまづいているのかを丁寧に見ていくことができる。1 人の生徒の学習プロセスを把握しておくことで、事後協議ではそうした事実を基に、授業のデザインや支援の機能について見直すことができる。

事後協議では、グループに分かれ、まずは「授業者の事前の期待や想定と比べて、子どもの学びの様子について見えてきたこと」を協議した。ここでは子どもの学習について、期待や想定通りの姿、想定外のつまずきなど、気づいたことを共有する話し合いを行った。ここでは「プレ課題では看護師目線での考えだったが、ジグソー活動を通して患者目線へ変容していった」「エキスパート B の資料『正しい反応か』の問いに対して、『注射を見て震えるのは当然であり、正しい』と回答する生徒がいて、想定になかった意見が出てきた。半面、神経が出てこない班があるなど、授業者が気付いてほしい点から外れてしまっていた」などの生徒の様子が共有されていた。

次に、これらの生徒の学びの様子を根拠にして、「よりねらいに向けた学びを引き起こすために授業デザインや支援の工夫として考えられること」を議論した。デザインや支援の良かった点はもちろん、より良い思考や対話に向けてできる問いや支援の工夫などが中心となる。研究開発員からは、「エキスパート資料のタイトルがあると、生徒は『これを書けばいいのか』となってしまう。タイトルをなくすことで、生徒たちの気付きのレベルを見とることができた」「エキスパート ABC の 1 つずつは見て取れるけれども、つながりが見えてきていない。課題の持っていく方の工夫が必要」などの意見が挙げられた。これらの意見は、沼上教諭の授業だけでなく、それぞれの授業への改善点にもつながると考えられる。

また公開授業の際、生徒の学びの活動の様子を録画し、発話を書き起こすことができる「学瞰レコーダー」（詳細は、第 2 部第 4 章第 3 節参照）を用いて生徒の活動を記録した。

記録は、実施した全12教科中10教科で行った。看護の公開授業においては撮影した動画や書き起こしデータの共有ができなかったものの、一部の教科においては公開授業の前時の活動を学瞰レコーダーにて記録し、書き起こしを行ったデータを参加者全体に共有しながら事後協議を行った。学瞰レコーダーの活用とその推進について、今後も努めていきたい。

d) 第3回教科部会

第3回教科部会は1月29日（水）に行われた。主な内容は公開授業の実践報告と授業デザイン原則の作成である。沼上教諭による公開授業の実践報告では、授業の課題である「注射を行う際の『患者』と『看護師』、双方のリスクについて」とねらいについての説明の後、実践の振り返りと反省について説明があった。公開授業に参加した教員からは「生徒のコミュニケーション能力が高く、対話的な学びが実現できていただけて、知識と技術が合わさっていく行程となっていた」「看護をするにあたっての明るい声掛けや目線、人としてどう接するかを考え、資料を照らし合わせながら答えを導こうとする生徒の姿が見えた」などの感想が挙げられた。参観者の感想からは、生徒の学習の様子が主体的、対話的であるだけでなく、その内容が患者と看護師の双方向の視点を行き来しながら注射におけるリスクを考える深い学びになっていたことが伺える。また、こうした学びが起こったのは、2回目の検討で出てきた意見「『看護師の役割に何がありますか』という問いだと…（中略）…問い方の工夫が必要ではないか」をもとに課題を変更した成果であるとも考えられる。沼上教諭の振り返りの中にも「多くの方から、特に指導教員から熱心に御意見や助言を頂いた。今後も注射について授業をする機会があれば今回の反省を生かしたい」と今後に向けての展望が語られた。こうした「生徒の学びを想定し」、「生徒の学びを見とり」、「生徒の学びを振り返り」、「今後の指導につなげていく」サイクルは、広く実現したい「指導と評価の一体化」の形であり、そのサイクルを沼上教諭だけでなく、教科部会を通して作り上げたことが大きな成果であると言える。

④教科部会のまとめ

前項で挙げた看護部会の例のように、それぞれの教科部会が公開授業を軸とし、オンラインも活用しながら授業研究を推進してきた。次ページ以降、教科部会ごとに担当指導主事がまとめた今年度の活動報告及び各教科における協調学習の授業づくりにおけるデザイン原則を掲載する。

未来を拓く「学び」プロジェクト 国語部会 活動報告

(1) 研究開発員数 62名

(2) 今年度の主な取組

■第1回教科部会 [令和6年7月3日/オンライン]

- ・前年度の取組について(実践報告)
- ・今年度の取組について(授業計画、授業づくりについての情報交換)

■第2回教科部会 [令和6年8月27日、30日/オンライン]

- ・全教科合同で実施した。協調学習マイスターを中心に、教科横断的な視点を取り入れながら、実践報告や教材検討などを行った。

■公開授業 [令和6年11月6日]

県立宮代高等学校 鈴木孝典 教諭

論理国語、文学国語

『AIを超えて「お笑い」の論理を探れ！

ー生成AIを活用した漫才台本づくりー』

■第3回教科部会 [令和7年1月29日/オンライン]

- ・令和6年11月6日の公開授業実践者報告
- ・今年度実施した授業実践報告
- ・授業デザイン原則の作成

(3) 今年度のまとめ

公開授業は研究開発員含め11名の参加があった。各教科部会・公開授業後の研究協議については、活発に意見交換がなされ、それぞれの立場を越えた深い議論ができた。課題としては、公開授業への参加者が少ないことがあげられるため、改善を図りたい。

具体的な学びのエピソード

国語部会

エピソード①

「竹」…反復表現を読み取る
「檸檬」…クラス：病的 文学徒：残念
ネット上の分析によりかかった？
感覚のひろがりに言及できた生徒も
「舞姫」…色恋のみならず、語りに注目→深い多様な読み
「枕草子」…清少納言のキャラ
総合にバラつき？でもそれも読みの一つ？
二面性がほしかった。難易度の差の問題か。

- ・瞬間的に評価する。・二面性を価値高く。・1個「しかし」を絶対させる→教材の外側にある教員の声掛け
- ・支援によって読みの深まりが生じる。(生徒がゴールの高さを察する)
- ①のねらい…生徒の読みの到達点を高くすること
- ①の手立て…声かけ等

エピソード②

翻訳(言語×英語)…問のオープン化
英文は簡単に→多様なポスト
「問の感覚」…言語化(問とは？)
資料は視聴覚のみ(文字無し)
書道は割愛→がんばった！
赤ちゃんポスト(道徳)…意見の対立をつくる
※エキスパート間の対立/個人の中での対立

- ・目的を明確化し、余分をけずった資料
- ・授業の流れを作成：目的に即した質の高い活動。
∴シグソーはそもそも煩雑
- ②のねらい…生徒の活動が潤滑にすすむこと
- ②の手立て…資料の工夫

これらのエピソード から言えそうな 授業デザイン原則



目的を明確化し、余分をけずった資料を作成することで、目的に即したスムーズな活動が生まれ、生徒の実際の学びの様子を見ながら適切な声かけを行うことで、より深い読み・学びが生じる。

未来を拓く「学び」プロジェクト 地理歴史部会 活動報告

(1) 研究開発員数 45名

(2) 今年度の主な取組

■第1回教科部会〔令和6年7月2日／オンライン〕

- ・本年度の教科部会における取組について
- ・研究開発員の授業実践報告、情報交換

■第2回教科部会〔令和6年8月27日、30日／オンライン〕

- ・全教科合同で実施した。協調学習マイスターを中心に、教科横断的な視点を取り入れながら、実践報告や教材検討などを行った。

■公開授業〔令和6年11月25日〕

県立坂戸西高等学校 清水美紀 教諭
歴史総合『国民国家と明治維新』

■第3回教科部会〔令和7年1月20日／オンライン〕

- ・公開授業実施報告、授業デザイン原則の作成に向けた協議

(3) 今年度のまとめ

本年度の公開授業には8名の研究開発員が参加し、授業後の研究協議も活発に展開することができた。しかし、登録されている研究開発員の人数を鑑みると、教科部会・公開授業への参加者は依然として少数であり、今後も継続して改善を図る必要がある。

具体的な学びのエピソード

学習を進める中で教員に支援や答えを求めてくる生徒が一定数存在し、インターネットで回答を探す様子も見られた。

学習の目的を意識できている生徒には、学習の質を自ら高めようとしたり、様々な疑問点を表現したりしようとする様子が多くの生徒に見られた。

地理歴史部会

学校によって生徒の実態が異なるため、シグソー法の学習形態が合わずに、学習に取り組む際の意欲が著しく低いケースが見られた。

これらのエピソード
から言えそうな
授業デザイン原則



生徒の学びに対する意識や学習の質を高めるためには、授業の冒頭において、今回の学習の目的は何か、どのような資質・能力を育成するために取り組むのかを明確に提示することが必要である。

未来を拓く「学び」プロジェクト 公民部会 活動報告

(1) 研究開発員数 10名

(2) 今年度の主な取組

■第1回教科部会 [令和6年7月2日／オンライン]

- ・昨年度の取組
- ・今年度の取組（方向性の検討）

■第2回教科部会 [令和6年8月27日、30日／オンライン]

- ・全教科合同で実施した。協調学習マイスターを中心に教科横断的な視点を取り入れながら、実践報告や教材検討、評価方法の共有等を行った。

■公開授業 [令和6年11月11日／対面]

県立春日部高等学校 新井 直明 教諭

公共『生徒会選挙をどう行えばよいか～‘決’の取り方あれこれ～』

■第3回教科部会 [令和7年1月24日／オンライン]

- ・各研究開発員の実践報告
- ・授業デザイン原則の作成

(3) 今年度のまとめ

「主体的・対話的で深い学びの質を支える授業改善」をテーマに、研究開発員による情報共有や意見交換を行うことができた。しかし、部会に参加した研究開発員は固定化しており、次年度は、一人でも多くの研究開発員の参加を促したい。

具体的な学びのエピソード

公民部会

エキスパート活動の前と後とで、テーマとなる問いへの答えが変化していない生徒が少なかった。

答えの変化していない生徒は、考えないでそう答えている可能性がある。

3つのエキスパートの中で最良の選択肢を選ぶのか、4つ目5つ目のより良いものを探求するのか、目標が明確でなかったため議論が広がりすぎた。

これらのエピソード
から言えそうな
授業デザイン原則



・ 答えが変化しない生徒には「なぜ（活動を経ても）答えが同じなのか」を問う。

・ 3つのエキスパートの中で最良の選択肢を選ばせるなら、その評価の基準自体を3エキスパートの中のひとつに加える。

未来を拓く「学び」プロジェクト 数学部会 活動報告

(1) 研究開発員数 41名

(2) 今年度の主な取組

- 第1回教科部会〔令和6年6月26日／オンライン〕
 - ・今年度の授業計画、授業づくりの工夫等についての情報交換。
- 第2回教科部会〔令和6年8月27日、30日／オンライン〕
 - ・全教科合同で実施した。協調学習マイスターを中心に、教科横断的な視点を取り入れながら、実践報告や教材検討などを行った。
- 公開授業〔令和6年10月1日〕

県立鴻巣女子高等学校 東條 滋 教諭

数学Ⅰ 数と式 『分母の有理化』
- 第3回教科部会〔令和7年1月29日／オンライン〕
 - ・今年度行った授業実践報告や公開授業の報告
 - ・授業デザイン原則の作成

(3) 今年度のまとめ

公開授業は、研究開発員を含む9名の参加があった。内容は、数学Ⅰの数と式における「分母の有理化」であった。ジグソー法を通して、生徒が自分の言葉で説明しようとしたり、表現しようとする様子が見られ、生徒同士が学び合う雰囲気が醸成されていた。授業デザイン原則のまとめについても、数学の授業における【言語化】に焦点化され、大変有意義な協議となった。

一方で、研究開発員数に対する部会への参加者が非常に少ないため、実施方法や事業の内容について、見直しをしていく必要がある。

具体的な学びのエピソード

数学部会

エキスパートをまとめられず、ジグソーが上手くいかなかった

平方完成のエキスパートにおいて、言葉で友人に説明しようとしていた

問題の求め方を言葉で表現しようとしていた

これらのエピソード
から言えそうな
授業デザイン原則



数学の授業における【言語化活動】の充実

ジグソー法における学び合い → 他者に説明する活動が自然と起こる
学びにおける「モヤモヤ感」を、自分の言葉で説明や表現（伝える）ことで、自らの数学における理解を把握することにつながっていた

→ジグソー班で、本時の学びをまとめ発表するための「原稿づくり活動」を行う。グループ全体の学びだけでなく、1人1人の学びにつながる

未来を拓く「学び」プロジェクト 理科部会 活動報告

(1) 研究開発員数 40名

(2) 今年度の主な取組

- 第1回教科部会〔令和6年7月2日／オンライン〕
 - ・前年度に行った実践や今年度の構想について報告
 - ・授業づくりの情報交換
 - 第2回教科部会〔令和6年8月27日、30日／オンライン〕
 - ・全教科合同で実施した。協調学習マイスターを中心に、教科横断的な視点を取り入れながら、実践報告や教材検討などを行った。
 - 公開授業〔令和6年10月11日（事前協議10月4日）〕

さいたま市立浦和高等学校 柚木 翔一朗 教諭

化学『気体の性質』
 - 第3回教科部会〔令和7年1月22日／オンライン〕
 - ・今年度行った各自の実践や公開授業の報告
 - ・授業デザイン原則の作成
- ### (3) 今年度のまとめ
- ・各教科部会で活発な意見交換が行われた。
 - ・先進的な内容を取り入れたものや、教科横断的な視点を活かしたものなどさまざまなアプローチがみられた。
 - ・生徒1台端末によりICTを活用した内容のジグソー法も実施しやすく、特に計算が含まれる分野で効果的との内容が共有された。
 - ・オンラインでの教科部会は参加者が少人数であり、今後も継続して改善が必要である。

具体的な学びのエピソード

理科部会

- ・ 概念の抽象度、踏み込み方が観点となる
- ・ エキスパートの難易度差はほぼ無いが、生徒によっては見た目から難易度差を感じる事がある。
- ・ 本質ではない部分の、表現の機微にとらわれてしまう。
- ・ ICTの研修と実践

- ・ 数字、計算を周りと相談できる。自信が無い生徒に効果が大きい。
- ・ 計算を含む、ジグソーはしやすい。
- ・ コミュニケーションができればその後は非常に早い。

- ・ 可視化して見えやすくなった。
- ・ ICTの導入でみんなの答えが見えやすくなった。
- ・ 先生方のコミュニケーション、研修

これらのエピソード から言えそうな 授業デザイン原則



- ・ エキスパートで詰まってもジグソーで解決することもある。とらわれなくて先に進む意識を持たせる（口頭での声かけで、生徒の取り組み意識も変わる。）
- ・ 機運を高めると相互作用が起きる。日常化、学年で広げる。
- ・ 内容に一番触れたいので、ジグソー学習の日常化が必要
- ・ ICT（生徒のまとめ作業がスムーズ。共有でみんなでまとめることができる。）
- ・ 量的な分析、統計、データ、ポートフォリオ作成に使用できる。

未来を拓く「学び」プロジェクト 保健体育部会 活動報告

(1) 研究開発員数 20名

(2) 今年度の主な取組

- 第1回教科部会〔令和6年6月25日／オンライン〕
 - ・前年度に行った実践や今年度の構想について報告
 - ・協調学習の実践についての協議
- 第2回教科部会〔令和6年8月27日、30日／オンライン〕
 - ・全教科合同で実施した。協調学習マイスターを中心に教科横断的な視点を取り入れながら、実践報告や教材検討、評価方法の共有等を行った。
- 公開授業〔令和6年11月18日〕
 - 県立滑川総合高等学校 鈴木 俊洋 教諭
 - 体育『スポーツⅠ（陸上競技）』
- 第3回教科部会〔令和7年1月21日／オンライン〕
 - ・今年度行った各自の実践や公開授業の報告
 - ・授業デザイン原則の作成

(3) 今年度のまとめ

教科部会においては少人数ではあったが、協調学習の進め方について深く協議を行うことができた。公開授業も新たな視点で協調学習を進め、良い事例が出されたことは大きな成果である。評価の仕方など新たな課題が出てきたので次年度協議していきたい。

具体的な学びのエピソード

保健体育部会

情報収集能力が高いものの、ネット上の意見をコピー＆ペーストになってしまい、どのグループも同じような回答になる
⇒クローズドエンドにすると各班同じような回答になる
⇒グループごとに違いが出るような課題設定が必要

グループ活動のメンバー（班編成）
声の大きな生徒がいるとその生徒の声に引っ張られてしまう
なるべくオープンな課題設定を心掛ける

学びは教え合い
相手の視点に立って教えることが学びにつながった

これらのエピソード
から言えそうな
授業デザイン原則



情報収集ばかりに頼り、紋切型の回答にならないよう、オープンエンドな課題設定を心掛けていく。生徒は教え合うことで学んでいく。

未来を拓く「学び」プロジェクト 芸術部会 活動報告

(1) 研究開発員数 13名

(2) 今年度の主な取組

- 第1回教科部会〔令和6年7月12日／オンライン〕
 - ・前年度に行った実践や今年度の構想について報告
 - ・協調学習の実践についての協議
- 第2回教科部会〔令和6年8月27日、30日／オンライン〕
 - ・全教科合同で実施した。協調学習マイスターを中心に、教科横断的な視点を取り入れながら、実践報告や教材検討などを行った。
- 公開授業〔令和6年11月18日／対面〕
県立熊谷高等学校 蓮 大二郎 教諭
音楽Ⅰ『オペラを深く味わおう』
- 第3回教科部会〔令和7年1月27日／オンライン〕
 - ・今年度行った各自の実践や公開授業の報告
 - ・授業デザイン原則の作成

(3) 今年度のまとめ

- ・公開授業は、研究開発員を含む13名の参加があった。ジグソー法を通して、鑑賞（オペラ）の歌や演出だけではなく、スコアリーディングからオーケストラの視点をもととする様子が見られ、生徒同士が学び合う雰囲気が醸成されていた。授業デザイン原則のまとめについても、鑑賞する範囲を限定するなどして、気付きやすくする工夫が必要であり、個々の【印象】の感じ方について大変有意義な協議を行った。

具体的な学びのエピソード

芸術部会

課題の設定「なぜ印象に残るのか？」曖昧な設定ではなく、踏み込んだ課題設定にするべきだった

印象は曖昧なものでもいいのでは？
切り口（方法）をもう少し固定する

印象、鑑賞する際によく使う
曖昧だからこそ
「言葉を生まなくては」と生徒は頭を働かせる。「語群」を付けるなど工夫

これらのエピソード
から言えそうな
授業デザイン原則



気付きにくい部分を「語群」で与えると生徒の対話が引き出す、「音楽の単語をいくつか使って」など条件を与える
作品を初めに鑑賞させることで生徒に作品の印象をもってもらってから、知覚に収束させようとする課題に取り組ませる

未来を拓く「学び」プロジェクト 外国語部会 活動報告

(1) 研究開発員数 53名

(2) 今年度の主な取組

■第1回教科部会〔令和6年7月2日／オンライン〕

・昨年度を振り返り、今後の方向性の検討や公開授業者の決定を行った。

■第2回教科部会〔令和6年8月27日、30日／オンライン〕

・全教科合同で実施した。協調学習マイスターを中心に、教科横断的な視点を取り入れながら、実践報告や教材検討などを行った。

■公開授業〔令和6年11月25日〕

県立寄居城北高等学校 清水大貴 教諭

英語コミュニケーションⅡ『Lesson 4 Little Hero』

■第3回教科部会〔令和7年1月22日／オンライン〕

・公開授業内容と授業実践を共有し、授業デザイン原則の作成を行った。

(3) 今年度のまとめ

公開授業には、4名の参加があった。生徒の調べ学習の結果が、そのままエキスパート資料となる新しいスタイルで行われた。生徒たちは活発的であり、学びに向かう意欲が感じられた。教科部会では、公開授業での様子に関連して、学習内容の定着につながる手法であったのかについて議論された。研究開発員の人数に対し、出席者が少ないことは、大きな課題である。

具体的な学びのエピソード

生徒のレベルに合わせた、分かりやすい英語で授業を進行できた。

生徒はOREOのフォーマット（意見、理由、例、意見）を活用し、1つの型にあてはめて、テーマに沿った英作文を作成することができた。

エキスパート活動で資料は用意せず、タブレットを活用した調べ学習を実施した。その結果、生徒たちで調べるだけでは、内容が薄くなってしまい、良い英作文に繋がりにくかった。

これらのエピソード
から言えそうな
授業デザイン原則



エキスパート活動では、資料を活用する。身近な話題や、生徒が既に日本語で知っている資料を活用することで、英語でも理解がしやすくなる。各エキスパート資料の文量や難易度のバランスなどに偏りがないように、一度生徒の立場でシュミレーションを行うことが大切である。英語でのインプットが不足している為、指導者自ら英語を話し、例を示す。

外国語部会

未来を拓く「学び」プロジェクト 家庭部会 活動報告

(1) 研究開発員数 4名

(2) 今年度の主な取組

- 第1回教科部会 [令和6年7月3日／オンライン]
 - ・前年度に行った実践報告
 - ・今年度の授業計画、授業づくりの工夫等についての情報交換
- 第2回教科部会 [令和6年8月27日、30日／オンライン]
 - ・全教科合同で実施した。協調学習マイスターを中心に、教科横断的な視点を取り入れながら、実践報告や教材検討などを行った。
- 公開授業 [令和6年10月30日]
県立新座柳瀬高等学校 伊藤 彩 教諭
家庭総合×理科（化学基礎）『衣生活（エシカルファッション）』
- 第3回教科部会 [令和7年1月22日／オンライン]
 - ・今年度行った授業実践報告や公開授業の報告
 - ・授業デザイン原則の作成
 - ・次年度にむけたまとめ

(3) 今年度のまとめ

公開授業は、研究開発員を含む6名の参加があった。内容は、理科とコラボレーションした教科横断的な視点での授業実践で、生徒が積極的に対話を通じて学ぶ姿が印象的であった。後日行われた教科部会では、公開授業での様子に関連して、対話を通じた学びを引き出す工夫について協議を行った。研究開発員数の減少については、昨年に引き続く課題である。

具体的な学びのエピソード

家庭部会

積極的に対話を通じて学びあい、自分の言葉で発信し、課題解決に向けて努力する姿が見受けられた。

声には出さないが、メンバーの対話の様子をよく聞いて（見て）、意見をまとめようとする姿が見受けられた。

ジグソー活動において、より印象的だったエキスパート資料に引っ張られて結論を出すグループもあった。

これらのエピソード から言えそうな 授業デザイン原則



生徒の主体的な対話を引き出す工夫

▷資料づくり ～チャレンジ～

適切な課題設定・学習指導要領（教科書）・小中高の学びの系統性

デザイン案「期待する回答の要素」を意識して・教科横断的な学びの楽しさ

※関連事項を調べているうちに内容が膨らみすぎてしまわないように…

▷日頃の授業での人間関係づくり

発言しやすい雰囲気・発表した内容の見える化・安心して学べる環境

未来を拓く「学び」プロジェクト 情報部会 活動報告

(1) 研究開発員数 13名

(2) 今年度の主な取組

■第1回教科部会〔令和6年7月1日／オンライン〕

・自己紹介、前年度に行った実践や今年度の構想について報告

■第2回教科部会〔令和6年8月27日、30日／オンライン〕

・全教科合同で実施した。協調学習マイスターを中心に、教科横断的な視点を取り入れながら、実践報告や教材検討などを行った。

■公開授業〔令和6年11月29日〕

県立秩父高等学校 永井 信広 教諭

情報Ⅰ『問題解決』

■第3回教科部会〔令和7年1月28日／オンライン〕

・公開授業と今年度行った各自の実践について報告

・授業デザイン原則の作成

(3) 今年度のまとめ

各教科部会並びに公開授業後の研究協議において活発な意見交換を行うことができた。情報科の教員は各校に1名であることが多く、今年度も各員の取組を中心とした情報交換を行う貴重な場となった。

具体的な学びのエピソード

情報部会

ジグソー活動を分割
(絵・コメント・タイトル)することによって、活動する生徒に役割を持たせることができた。

日常生活に近づけることで生徒は自分事として考えやすく、別角度からの意見が出てきた。

デザインはよく考えられていたが、身近な情報社会に対する解決策を出すのは難しい。
⇒「デザインを考える」と「解決策を考える」の2つの課題だと難しい。課題はできる限りシンプルに。

これらのエピソード
から言えそうな
授業デザイン原則



生徒のやるべき課題や活動を明確・シンプルにすることで、ねらいに向けた1つの目的(ゴール)に対して生徒が主体的・積極的に取り組むことができる。

未来を拓く「学び」プロジェクト 農業部会 活動報告

(1) 研究開発員数 6名

(2) 今年度の主な取組

■第1回教科部会〔令和6年7月4日／オンライン〕

- ・前年度の実践報告および今年度の活動計画について
- ・授業づくりにむけた情報交換

■第2回教科部会〔令和6年8月27日、30日／オンライン〕

- ・全教科合同で実施した。協調学習マイスターを中心に、教科横断的な視点を取り入れながら、実践報告や教材検討などを行った。

■公開授業

- ・実施なし

■第3回教科部会〔令和7年1月29日／オンライン〕

- ・今年度行った各自の実践報告
- ・授業デザイン原則の作成

(3) 今年度のまとめ

研究員全員が研究授業を実施したため、教科部会では、多様な視点やエピソードが共有され、活発な意見交換をすることができた。一方、公開授業がないことにより、共通する授業実践に対してのフィードバックや議論を深めることができなかったのが課題として挙げられる。

具体的な学びのエピソード

農業部会

・資料の文字を少なめにしたが、生徒にとっては初めての用語などもあり、読み込むのが大変そうだった。
→文章の資料から読み取ることもできるが、読み込むのに時間がかかる

・既有知識を踏まえた資料づくりをしたら、話し合いが活発に行われていた。
・生徒は既有知識をもとに話し合っていた。
→生徒は学んだことを活かしながら考えることができる、考えようとする。

・実物を準備して資料の内容を具体化したところ、実物を触る、力を加えて強度を確認するなど実物を活用しながら考えていた。
→実物や実践したことがあることの方が知識として記憶に残っており、自信を持って対話に参加することができる

これらのエピソード
から言えそうな
授業デザイン原則



- ・生徒の実体に基づいた課題やエキスパート資料の作成をすることが大切
- ・生徒の既有知識の見積もりやテーマの難易度、期待する答えの要素などをシミュレーションして授業を検討することで、想定と実際のギャップが生じにくくなる。
 - 既有知識ベースで資料を作成すると・・・
 - 生徒が自信を持って対話できるようになる
 - 既有知識をベースに発展的なテーマを設定すると・・・
 - 生徒の学びを深めることができる

未来を拓く「学び」プロジェクト 工業部会 活動報告

(1) 研究開発員数 16名

(2) 今年度の主な取組

- 第1回教科部会〔令和6年7月2日／オンライン〕
 - ・昨年度の実践紹介
 - ・情報交換及び協議
 - ・今年度の計画
- 第2回教科部会〔令和6年8月27日、30日／オンライン〕
 - ・全教科合同で実施した。協調学習マイスターを中心に、教科横断的な視点を取り入れながら、実践報告や教材検討などを行った。
- 第3回教科部会〔令和7年1月17日／オンライン〕
 - ・今年度実践した協調学習の報告
 - ・「授業デザイン原則」の検討

(3) 今年度のまとめ

今年度は公開授業を実施せず、各委員が授業実践を行った。
 第3回の教科部会では、「主体的・対話的で深い学び」を実現する授業改善に向け、各委員による授業実践の報告を行い、この内容を踏まえて「授業デザイン原則」の検討を行った。

具体的な学びのエピソード

工業部会

材料調達に関する原価管理の条件選定・比較検討・決断する難しさ・決断する重みを学んだ。組織で置かれる立場を痛感していた。(近未来の自分を想像)

住宅設計をする際のキーワードをグループで考察し、結果を踏まえて、新たに自己の思考・判断・表現が広がっていった。(他者との連携と自己能力の発展)

これらのエピソード
 から言えそうな
 授業デザイン原則



授業の題材やエキスパート資料の構成について
 実社会においては仕事をする上での課題を、他社と連携して取り組む。
 協調学習を通じて、自分の仕事(エキスパート活動)に責任感を持つこと
 や、課題解決に向けて他者の意見を取り入れること、協働することの重要性を実感できるようにデザインすることが重要である。

未来を拓く「学び」プロジェクト 商業部会 活動報告

(1) 研究開発員数 7名

(2) 今年度の主な取組

■第1回教科部会〔令和6年6月18日／オンライン〕

- ・前年度実施した授業実践等の報告
- ・今年度の授業計画等の情報交換

■第2回教科部会〔令和6年8月27日、30日／オンライン〕

- ・全教科合同で実施した。協調学習マイスターを中心に、教科横断的な視点を取り入れながら、実践報告や教材検討などを行った。

■公開授業〔令和6年11月5日／対面〕

県立大宮商業高等学校 松本泰雅 教諭
ビジネス・マネジメント『PPM分析』

■第3回教科部会〔令和7年1月21日／オンライン〕

- ・今年度の授業実践報告
- ・授業デザイン原則の検討

(3) 今年度のまとめ

全3回の教科部会は限られた時間ではあったが、意見交換や情報共有が活発に行われた。11月に大宮商業高校で行われた公開授業では、マイスターが授業者として発表した。初任者の数名も参観し、経験豊かなマイスターの授業から多くのことを熱心に学ぶ姿勢が見えた。今年度は研究開発員が少人数だったため、来年度は多くの方に参加していただけるようにしたい。

具体的な学びのエピソード

商業部会

【資料】

・メインやエキスパートの課題、選択形式や記述形式などの発問の仕方によっては、作業が中心になってしまい、話し合いの時間が足らず進まないこともあった。

【表現手段】

・話し合いに参加していないように表面上は見えていても、ホワイトボードや資料に自分の意見を書いている生徒もいる。

【事後】

・授業以外で生徒同士の学びあいや、教えあいの雰囲気生まれた。
・学んだ内容を同じ科目や教科で深化に繋がる課題の設定が困難であった。

これらのエピソード
から言えそうな
授業デザイン原則



- | | |
|--------|--|
| ○資料作成 | 生徒の実状を十分理解し相互理解を深める課題設定を行う |
| ○授業時 | 対話を深めるための手段や雰囲気づくりを心掛ける |
| ○対話の工夫 | 話し合いだけでなくホワイトボード、付箋、Googleスライドなどを活用し視覚でもわかるようにする |

未来を拓く「学び」プロジェクト 看護・福祉部会 活動報告

(1) 研究開発員数 7名

(2) 今年度の主な取組

- 第1回教科部会〔令和6年7月2日／オンライン〕
 - ・昨年度の実践の報告と、今年度、取り組んでみたい単元、授業実践のポイント等情報交換
- 第2回教科部会〔令和6年8月27日、30日／オンライン〕
 - ・全教科合同での実施。協調学習マイスターを中心に実践報告や教材検討等を行った。
- 公開授業〔令和6年11月19日〕
 - 県立常盤高等学校 沼上 晋作 教諭
 - 基礎看護『注射』
- 第3回教科部会〔令和7年1月29日／オンライン〕
 - ・今年度行った公開授業の報告及び授業実践の報告
 - ・授業デザイン原則の作成

(3) 今年度のまとめ

公開授業は「看護科」で実施し、校内の教諭も含めて多くの参加者があった。生徒が積極的に対話を通じて学ぶ姿が印象的であった。
教科部会では、各自の実践について共有し、改善に向けて協議を行った。指導講評も含めて、大変充実した内容となった。

具体的な学びのエピソード

看護・福祉部会

資料の難易度や話し合うための生徒の既習知識の量に違いがある姿が見受けられた。

生徒や普段から使用している手順書の書式の内容に合わせて資料を作成した。

課題解決に向けて、自分事して考えることが苦手な生徒の姿が見受けられた。

これらのエピソードから言えそうな
授業デザイン原則



- 生徒が気づくことができる資料作成の工夫
 - ・キーワードやエピソードを盛り込んでおく
- 生徒の思考を揺さぶる工夫
 - ・根拠の基で考える「クセ」をつけられるよう、根拠に基づいた資料の作成
 - ・抽象的が具体的に理解できるようにする工夫
- 実体験に基づいた事例を取り入れると、より自分事として考えられる
- 本時の目標に留まらず、そこから生まれる副産物がたくさんある授業をめざす（学びの連鎖、学びの継続）

（４）今後に向けて

今年度の活動報告書のテーマは「学びをつなげる・学びでつながる」だが、このテーマに即して今年度の「未来を拓く『学び』プロジェクト」で印象的だったのは、合同教科部会での教科を超えた先生方の対話である。地歴、工業、看護の協調学習マイスターと理科、工業の若手教員が参加した学習評価についてのグループでは、主体的・対話的で深い学びの評価をどう行うかについての議論が行われた。議論の中では、授業改善や生徒へのフィードバックにつながる形成的評価が大事であることを軸に、これまでの実践経験から多様な特性を持つ生徒の学び方についての気づきを基にした授業改善のエピソードや主体的・対話的で深い学びの成果を見とるための総括的評価の工夫、初任者研修で「知識構成型ジグソー法」を使った授業研究に取り組む意義などについて意見交換がされた。参加したあるマイスターが「評価の班に参加する方は、どうやって成績をつけるのかを考えているのではないかと思っていたが、先生方からどうやって評価を授業改善につなげるかというすごく根本の話が出てきたのがよかった」と述べていたように、参加する先生方が教科を超えて、本プロジェクトで追究してきた学びでつながる姿が見られたこと、またその議論が現在学校現場が抱える課題の本質に迫るものであったことが印象深い。

「未来を拓く『学び』プロジェクト」は、一昨年度から年限を限った特別な事業ではなく、県立学校の恒常的な授業改善のための取組として位置づけられるようになった。特別な予算措置のない中、また働き方改革の進展の中で、取組に積極的に参加できる先生方の数は減少傾向にある（p. 35、図 13）。今後に向けて、こうした先生方の学びのつながりをどのように生かしていけるかが継続的な課題である。

令和6年12月25日に出された中央教育審議会への諮問「初等中等教育における教育課程の基準等の在り方について」では、「生成AIが飛躍的に発展する状況の下、個別の知識の集積に止まらない概念としての習得や深い意味理解を促す」ための授業改善につながる指導要領の在り方が諮問事項の筆頭に来るとともに、標準時間数や学習内容、単位授業時間や最低授業週数の柔軟・弾力化について「これらが教師に『余白』を生み、教育の質の向上に資する可能性をどのように考えるか」、「教科書の内容が充実し分量が増加した一方、網羅的に指導すべきとの考えが根強く存在し、負担や負担感を生んでいるとの指摘がある中で、新たな学びにふさわしい教科書の内容や分量、デジタル教科書等の在り方をどのように考えるか」といった諮問事項が並ぶ。換言すれば、今後ますます教科書をカバーする授業から深い意味理解を目指す授業に変わっていく、そのために教師が授業研究し、自分なりにカリキュラムをデザインできる「余白」の必要性も国の施策レベルで検討されているということだろう。「概念としての習得や深い意味理解を促す」授業をデザインするには、一つの教材をめぐる多様な教員が対話しながら理解を深める授業研究の場が必要となる。本事業の財産は、まさにそうした場を先取りして作ってきたところにある。今後の「余白」を生む施策に期待しつつ、まず現状工夫しうる形で、一人でも多くの教員が授業研究に参加できる体制、運営方法の検討もあわせて行っていきたい。

4. 連携の核を育てる～本郷学習科学セミナー～

(1) 「本郷学習科学セミナー」のねらい

「本郷学習科学セミナー」は平成26年度より開始したCoREF主催の月例研究会である。CoREFと連携する教育委員会等において「知識構成型ジグソー法」を用いた協調学習の授業づくりプロジェクトの中核を担う先生方を主な参加者とし、学習科学に基づく継続的な授業改善を支えるための自治体や学校の枠を超えた学びの場として運営されている。カリキュラムと各回プログラムは、その年度の参加者と協調学習の授業づくりプロジェクトの課題に応じて、CoREFがデザインし、運営もCoREFが行っている。

セミナーの実施目的は、「人はどのように学ぶか」やそれに基づいた授業デザインに関する実践的見識をもとに協調学習の授業づくりを推進するミドルリーダーの育成を支援すること、また、授業研究の質向上を支えるネットワークの構築および発展を支援することである。CoREFでは、2つの目的の達成をとおして、授業改善のための取組を、学びのデザインと実践及び振り返りのサイクルをとおして人の賢さを探究する「学習科学」の研究として日常化させ、参加者の主体的な取組として継続的に発展させていきたいと考えている。

連携する教育委員会のうち、埼玉県、鳥取県、島根県では、授業改善を推進するミドルリーダーの資格認定制度を設け、本セミナーへの参加を認定要件の1つとしている。こうしたシステムレベルの工夫とも連動させながら、授業改善ネットワークの核を育てる学びの場としてデザイン、運営されているのがこのセミナーである¹。

(2) スケジュールおよび参加者

令和6年度の「本郷学習科学セミナー」の日程と参加者数を表20に示す。参加形態は昨年度と同様で、土曜午後のオンライン形態による開催（資料電子データの事前配布とZoomでのWeb会議）を基本とし、長期休業中の2回については、対面とオンラインの併用での実施とした。表中ではオンラインを「OL」、併用を「併」として区別している。各回開講案内は、3週間前を目安に「新しい学びプロジェクト」のメーリングリストや、連携教育委員会のご担当者、過去のセミナー参加者で案内の希望をいただいた方々に送付し、回ごとに申し込みを受け付けている。

各回の参加者は基本的には20名前後であり、半数以上が、昨年度以前からセミナーに継続して参加している。継続参加者の多くは、埼玉県または島根県の資格取得者である。また、参加者の内訳については、実践者とその他に分けて示した。「実践者」は教諭、指導教諭や非常勤講師等、小中高等学校で実践を行っている立場の参加者である。「その他」は、指導主事などの教育行政関係者、学校管理職、研究者などである。今年度は、昨年度までと比べて新規参加者数が大きく減少し、それに伴って合計参加者数（その年度に1回

¹ 昨年度までの本セミナーの展開については、平成26年以降の報告書第1部第1章（本書巻末DVDにも収録）に詳しい。あわせてご参照いただきたい。

回 日付 形態	1 5/18 OL	2 6/22 OL	3 7/20 OL	4 8/17 併	5 10/5 OL	6 11/30 OL	7 12/21 OL	8 1/18 OL	9 3/2 併	計
人数 (継続)	19 (10)	17 (10)	18 (11)	24 (18)	19 (12)	17 (12)	20 (14)	20 (14)	未 実 施	46 (34)
内 実践者	11	14	13	14	13	13	17	16		33
訳 その他	8	3	5	7	6	4	3	4		13

表 20：令和6年度本郷学習科学セミナーの日程と参加者数及びその内訳（令和7年1月20日時点）

以上セミナーに参加した人を合計した人数）が減少した。減少の原因と今後の展望については、参加者の経年変化を示しながら、(5)において述べる。

（3）令和6年度「本郷学習科学セミナー」年間カリキュラム

令和6年度のカリキュラムを表21、22に示す。今年度も、カリキュラムは昨年度以前から一貫した方針でデザインした。具体的には、参加者一人ひとりが学びの仮説検証による授業研究のサイクルをより質高く回せること、サイクルを回すことで見えてきた気づきを教科やプロジェクトの単位で生起している課題と結びつけて言語化し、取組の次の指針を得ることを目指し、下記に示す4つの要素を組み合わせている。

要素は表のカッコ内に示した。また、プログラムタイトルの後に【新】とあるものは、今年度新規に開発したプログラムである。回の欄には半日／全日の別を記載した。オンラインによる活動の負荷や旅費の効率性を考慮し、オンラインと対面併用の形態で実施した回を全日のプログラムとした。

- I. 「知識構成型ジグソー法」による協調学習の授業づくりの基本的な考え方に関する内容
- II. 学びの質を支える授業研究の考え方や進め方に関する内容
- III. 学びの質を支える授業研究の実践
- IV. 協調学習の授業づくりから見えてきたことを周辺の様々な課題に活用してみる試み

年間のカリキュラムは、「知識構成型ジグソー法」と「仮説検証型授業研究」による協調学習の授業づくりのねらい、基本的な考え方と手順等を再確認するプログラムから始まる。第1・2回では、ミドルリーダーとして学びを深める前提として、協調学習の授業づくりに係る参加者の取組の概要や特性を自身で言語化する内容となっている。続いて、第3回では、近年の新しい教育課題に触れ、今後の取組を少し視野から展望するプログラムを位置づけている。第4回では、「学瞰システム」を用いた「仮説検証型授業研究」を学校や自治体を基盤に行う授業研究の充実に結びつけることを目指し、授業研究で見えてきた子どもの学びの実態に基づく授業デザインや支援の課題から若手教員の授業力向上支援のポイントを検討する演習を実施した。これらをふまえ第5-8回では、9月以降各学校等

で公開授業等の機会が増える時期に合わせ、「学びのシミュレーションによる授業案検討」「実践報告ラウンドテーブル」のプログラムを連続で実施し、学びの質を支える授業研究の実践をじっくり行う。最終の第9回は、「協調学習の授業づくり」を主題とした説明のためのスライド資料を作成する活動を、今年度の授業研究の成果をふまえて行うことで、参加者一人ひとりが今年度の研究の深まりを実感すると共に、授業づくりにおける次の課題を共有する。併せて、次年度の取組へのモチベーションを高めるための演習を設定する。以上のような流れにより、各参加者が、質の高い授業研究のサイクルを自分でも回しながら

回	プログラム	内容
1 (全日)	〈午前の部〉 講義・演習「一人ひとりの学ぶ力を引き出す授業のデザイン」(Ⅰ) 〈午後の部〉 講義・演習「主体的・対話的で深い学びの質を支える授業研究の進め方」(Ⅱ)	〈目標：授業づくりのビジョンと前提の共有〉 午前の部では、「知識構成型ジグソー法」を使った協調学習の授業づくりの基本的な考え方と目指す学びのイメージ、手法の特徴等を確認した。 午後の部では中学校社会の授業の事前研・授業観察・事後研を、説明を聞きながら実際にやってみることで、児童生徒の学びの想定と検証を軸とした授業研究（仮説検証型授業研究）の進め方とポイントを学んだ。
2 (半日)	講義「このセミナーで目指すこと」(Ⅰ) 教科部会「これまでの実践例共有」(Ⅱ) 教科部会「『知識構成型ジグソー法』による協調学習の授業づくりにおけるデザイン原則の交流」(Ⅲ)	〈目標：これまでのまとめと新たなスタート地点の共有〉 継続参加者による実践報告と、実践や観察から見てきた学びの仮説（授業デザイン原則）づくりの活動をとおして、各教科で「知識構成型ジグソー法」を使った協調学習の授業づくりに関して、今年度の研究の指針を共有した。
3 (半日)	講義・協議・演習「主体的・対話的で深い学びを見とるテストの在り方」(Ⅳ)【新】	〈目標：学びの質を支える授業研究の蓄積をふまえ、学校で日常的に行うテストのあり方を見直す〉 子どもたちは、テスト問題はどのような力を測っていると思っているのか、また、実際それら問題をどのように問いているかについての事例研究をもとに、見とりたい力を評価するためのテストのあり方について検討した。
4 (全日)	〈午前の部〉 教科部会「授業デザイン検討」(Ⅲ) 〈午後の部〉 講義・演習「学級システムを活用した授業研究」(Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ)【新】	〈目標：学級システムを活用した「仮説検証型授業研究」から、組織的な授業研究支援のポイントを考える〉 午前の部では、第5回で行うシミュレーションを見越し、教科部会で授業のアイデア検討や意見交換を行った。 午後の部では、1学期の授業で記録した若手の先生の授業データを詳細に研究し、見えてきたことに基づいて、授業研究をととした若手の力量向上支援のポイントについて協議した。
5 (半日)	協議「学びのシミュレーションによる授業案検討」4事例(Ⅲ) 教科部会「シミュレーションに基づく改善案検討」(Ⅲ)	〈目標：「仮説検証型授業研究」による授業デザイン検討〉 参加者が持ち寄った授業デザイン案を題材に、教科 MIX グループによる教材案体験と子どもの学びの想定と、想定に基づく教科部会での教材改善策の検討という2つの活動をとおして、学習者目線でどんな学び／つまづきが起こりそうかを予想し、それに基づいて授業の改善点を考えた。

表 21：令和6年度「本郷学習科学セミナー」年間カリキュラム（令和7年1月20日時点）(1/2)

6 (半 日)	「実践報告ラウンドテーブル」4 事例 (Ⅲ) 教科部会「授業案検討と実践紹介」(Ⅲ)	〈目標：「仮説検証型授業研究」による事前検討と事後協議〉 ラウンドテーブルでは、教科を超えたグループで「仮説 検証型の授業研究会」の進め方による実践報告と協議を 行った。教科部会では、その他検討中の授業案の検討や簡 単な事例紹介を行った。
7 (半 日 長 め)	「実践報告ラウンドテーブル」4 事例 (Ⅲ) 教科部会「授業案検討と実践紹介」(Ⅲ)	〈目標：「仮説検証型授業研究」による事前検討と事後協議〉 ラウンドテーブルでは、教科を超えたグループで「仮説 検証型の授業研究会」の進め方による実践報告と協議を 行った。教科部会では、その他検討中の授業案の検討や簡 単な事例紹介を行った。
8 (半 日)	「実践報告ラウンドテーブル」5 事例 (Ⅲ) 教科部会「授業案検討と実践紹介」(Ⅲ)	〈目標：「仮説検証型授業研究」による事前検討と事後協議〉 ラウンドテーブルでは、教科を超えたグループで「仮説 検証型の授業研究会」の進め方による実践報告と協議を 行った。教科部会では、その他検討中の授業案の検討や簡 単な事例紹介を行った。
9 (全 日 ・ 未 実 施)	演習「協調学習説明づくり」(Ⅰ) 演習 (次年度の取組を展望する内容を 予定)	〈目標：次年度の見通しを得る〉 1 年間の授業研究をととして見えてきた「協調学習の授 業づくり」の目的・進め方のポイント・意義などについて 新規参加者への説明スライドの形で整理してみる活動をと として、学びを振り返ると共に、次年度の取組の展望をひ らく演習を行う計画。

表 22：令和 6 年度「本郷学習科学セミナー」年間カリキュラム (令和 7 年 1 月 20 日時点) (2/2)

ら、研究から見えてきたことや、研究の目的、進め方そのものを言葉にし、学校や自治体、教科部会等のコミュニティに還元することをサポートしようとしている。

(4) 活動の実際

① 「主体的・対話的で深い学びを見とるテストの在り方」のプログラムとねらい

以下では、第 3 回に実施した「主体的・対話的で深い学びを見とるテストの在り方」のプログラムを取り上げ、活動の実際について紹介する。なお、このプログラムは、CoREF の研究者が参画する科学研究費基盤 (A)「学習評価を支援する CBT プラットフォーム実装による教師自らの学習モデル変容支援」(益川弘如代表)との連携で企画した。協調学習の授業づくりプロジェクトでは、主体的・対話的で深い学びの実現をととして資質・能力を統合的に育成することを目指してきた。実践例は既に十分蓄積されているが、子どもたちが資質・能力を継続的に伸ばしていくには、この実践が日々の教育活動に溶け込んでいく必要がある。その際、子どもたちの学習に良くも悪くも大きな影響を与える「テスト」の見直しは重要な課題の 1 つである。指導と評価の一体化と言われるものの、実際には、授業では対話を通じた深まりを大事にするのに対し、テストでは個別具体的な知識の定着を問うなどと切り分けられていることも少なくない。しかし、子どもたちの資質・能力の統合的な育ちを学校の教育実践全体で支援するという観点に立てば、授業とテストの有機的な結びつきが重要であることは言うまでもない。協調学習の授業づくりで見

えてきた子どもたちの資質・能力の実態やその発揮の条件などをふまえ、目指す授業とうまく接合する新しいテストのあり方について具体的な見通しを持つと共に、授業づくりを更に先に進めるモチベーションを喚起することがこのプログラムのねらいである。活動の流れを表23に示す。

20分	○事前アンケート記入（Google Form）
55分	〈ステップ1：協議〉 「知識構成型ジグソー法」授業案を素材に、その授業を含む単元で評価したい資質・能力を洗い出し、その力を評価するテスト問題（大問1問）の作問上のポイントを検討する ・テストで評価したい資質・能力とその具体像の洗い出し→「見とりの観点シート」 ・作問上のポイント→スライドにまとめる
50分	〈ステップ2：演習〉 「子どもたちは、テスト問題を実際どのように解いているか、そして、テスト問題はどのような力を測っていると思っているのか」について、テスト問題を対話しながら解いてもらう調査（思考発話調査）をもとにした3つの事例研究から考察する 事例1 全国学力・学習状況調査 小6 算数 事例2 全国学力・学習状況調査 中3 英語 事例3 大学入学センター試験 国語 現代文
	（休憩）
55分	〈ステップ3：協議〉 演習で見えてきたことをふまえ、ステップ1で協議の題材とした問題をブラッシュアップすると共に、見とりたい資質・能力を適切に評価するためのテストづくりにおいて大事にしたいことを整理する
15分	○事後アンケート記入（Google Form）

表23：講義・協議・演習「主体的・対話的で深い学びを見とるテストの在り方」

② 実施の概要

プログラムは3つのステップで構成した。以下、ステップごとに内容を紹介する。最初のステップでは、「知識構成型ジグソー法」授業案を素材に、その授業を含む単元で評価したい資質・能力を洗い出し、その力を評価するテスト問題（大問1問）の作問上のポイントを検討した。参加者には、協議の素材としてこれまで実践した「知識構成型ジグソー法」の授業案や教材を持ち寄ってもらった。授業デザインは1コマか2コマのスパンで行われるのに対し、日常の教室において、テストはもう少し長い単位で1つの単元ごとに行われることが多い。そこで、「知識構成型ジグソー法」の一実践例を含む単元の単元末にテストを行うことを想定して、日常の授業づくりより少し長いスパンで育て、評

価したい資質・能力をピックアップし、評価規準となる具体像を検討するところから活動を始めた。これにより、「知識構成型ジグソー法」の授業づくりとテストの作問や評価規準作成という一見異なる課題を、参加者に自覚的に結び付けてもらうことをねらった。活動では、授業研究の道具として提供している「見とりの観点シート」を、評価したい資質・能力のピックアップや具体像の段階的な検討に活用した。これもまた、これまでの授業づくりの取組と次の課題をうまく結びつける工夫である。

表24は、数学の実践者を中心としたチームで「式 $|x| + |x-2|$ の場合分け」を題材に作成された「見とりの観点シート」である。「資質・能力が発揮された姿の具体例」の欄には、授業づくりの段階で検討済みのプリントの正答例や、授業案や振り返りシートをふまえて見えてきた活動中に期待する発話の具体像が記載されている。授業における学びの姿を出発点とし、「この姿は、テストの評価項目となるような資質・能力で言えば何と呼べる力の発揮だろうか？」などと検討することで、授業づくりと「テスト」の作問や評価規準設定を結びつけている様子がうかがわれる。

ステップ2では、「子どもたちは、テスト問題を実際どのように解いているか、そして、テスト問題はどのような力を測っていると思っているのか」について、テスト問題を対話しながら解いてもらう調査（思考発話調査）をもとにした3つの事例研究から考察する演習を実施した。授業のデザインと同様に、テストの検討においても、問題でどのような資質・能力を評価したいかの具体像（ねらいの視点）、子どもたちは実際にどんな資質・能力を使って問題を解いていくかの具体像（子どもの実態の視点）を行き来することが重要となる。事例研究の題材となった全国学力・学習状況調査と大学入学センター試験については、評価したい資質・能力すなわち問題のねらいが解説等で明確に示されている。一方思考発話調査では、子どもたちが実際にどんな方針で、問題のどこに目をつけ、どんなことを考えながら問題を解こうとしているか、具体的なプロセスにアプローチすることができる。そこで、こうした事例研究について検討することで、一旦自分たちのこれまでの

本時で育成したい 資質・能力	この授業の中で期待する資質・ 能力の発揮のされ方	資質・能力が発揮された姿の具体例 (発言など)
必要な情報を読み 取る力	与えられた表や図を数式化する	$x \leq 0$ 、 $0 < x < 2$ 、 $2 \leq x$ の条件がどこから 出てきたか（特に $x=0$ と2）を式を見 ながら説明できる
情報を整理する力	絶対値の条件を場合分けする	x と $x-2$ はどちらが大きいのか
協調的に問題を解 決する力	お互いの資料を持ち寄って考え を深める	expBの生徒「 $x=0$ を代入したら絶対値 の中が0になって、プラスでもマイナ スでも無い数字だから表に…が書いてあ るんじゃないの？」

表24：ステップ1で作成された「見とりの観点シート」の例

実践から離れ、少し客観的に2つの視点を行き来しながらテストについて検討を深めることをねらったのがステップ2である。

ここでは、「苦手な子は問題を解く以前に、問題の把握でつまずきやすい」、「算数のテストでは、得意な子にも苦手な子にも『公式を当てはめて計算しないといけない』という意識があるようだ」、「教科を問わず、題材文や問題を思ったほどしっかり読解していない。国語では下線部の周辺だけ読んで答えようとしたり、算数で数字だけを見て解こうとしたりしている」、「国語や英語で解答を作る際に、内容よりも字数制限を気にしているようだ」といった気づきが共有された。

最後のステップ3は、演習で見えてきたことをふまえ、ステップ1で協議の題材とした問題をブラッシュアップすると共に、見とりたい資質・能力を適切に評価するためのテストづくりにおいて大事にしたいことを整理した。表25は前掲の数学チームによるステップ3のメモの抜粋である。「表をつくらせる」は、「公式をあてはめて計算する」という意識にさせにくくする工夫、「グラフの選択とその理由」は、何を答えればいいかがパッと見てすぐわかる発問によって問題把握の支援をする工夫である。ステップ1で明確にした、評価したい資質・能力とステップ2で見えてきたようなテストにおけるねらいと子どもの実態のズレをふまえ、問題が見直されたことがうかがわれる。ステップ3の最後に行った全体交流では「思考の過程を見とれるようなテストを作る」「加点法で採点する」「ジグソー後に発展する『問い』を用意して、定期テストの大問にする」「評価規準で示している要素が本当に深まっているのかを、聞ける設問になっているかを検討する」などのポイントが共有された。共有された内容は、本日の演習とこれまでの授業づくりを活かしたものだと言えるだろう。

最後に、参加者の事前／事後アンケートを紹介する（表26）。参加者名の下には、カッコで属性／専門教科／セミナーにいつから参加しているかを示した。

3名の事前／事後の回答を比較してみると、多様な立場や経験を持った参加者が、テストづくりについて事前の見解に応じて、協調学習の授業づくりの取組とうまく接合しうる新しいテストのあり方について具体的な見通しを得たことがわかる。新規参加者のX教諭では、セミナーを経て「思考力や判断力を問う問題」の作問について具体的な工夫が見えてきている。継続参加者のY教諭は、事前の段階で既に問題形式の工夫のレベルでテストの改善に取り組んでいる様子も見受けられたが、プログラムをとおして、新しい問題

- 場合分けを表を作って考える
- グラフを選択させて、なぜそのグラフを選択したのか その理由を説明させる
- 「絶対値を学んで大切だと思ったこと」「今後の授業に生かせそうなこと」を記述させる
- 既習の知識で絶対値を表現させる（平方根など）

表25：ステップ3における協議メモの抜粋

	【事前】テスト作りや定期考査作りにおいて、普段から工夫されている点がありましたら教えてください。	【事後】テスト作りや定期考査作りにおいて、今後、こういう工夫をしたい、と考えた点がありましたら教えてください。
参加者 X (高教員／理科／新)	思考力や判断力などを問う問題になるように…。現実的にはなかなかできていないですが。	解答方法の精選（語群の語句の提示や文字数、図示など）
参加者 Y (高教員／数学／継)	会話文問題を取り入れ、共通テストに近い形の問題を作成する	・「なぜその記号を選んだのか説明してください」のように、生徒の思考を見ることができるようになりたい ・「この問題はこういう意図で出題した」ということをわかるようにしてみたい
参加者 Z (他／社会／継)	三つの観点のどの観点を測る問題なのかを明確にする	生徒の思考を深められるように、より概念的な理解につながるような問題を出したいと思いました

表 26：事前／事後アンケート回答例

形式を用いる目的や、活用のポイントを明らかにしている様子である。また、教育行政関係者の Z 先生の事後の回答は、テストもまた生徒が学習を深める機会であるという新しい視点が生まれたことがうかがわれるものとなっている。「目指す授業とうまく接合する新しいテストのあり方について具体的な見通しを持つと共に、授業づくりを更に先に進めるモチベーションを喚起する」というプログラムのねらいは、おおむね達成されたとみることができるだろう。

（５）今後に向けて

連携各機関のご協力も得て、本年度も本セミナーを協調学習の授業づくりを推進する様々な立場のミドルリーダーの間での充実した学び合いの場として運営することができた。他方、(1) で言及した合計参加者数の減少は、プログラムの工夫など、各回の学習機会を充実させるだけでは対応の難しい課題である。図 18 は、本セミナーの参加者数の経年変化を示すグラフである。これを見ると、参加者の減少は、ここ数年の経年的な傾向ではなく、今年度特に目立っていることがわかる。本章で述べてきたように協調学習の授業づくりプロジェクト自体が順調に継続していることも考えあわせると、参加者数の減少には本セミナーの目的やプログラムと参加者のニーズのズレというような内在的な要因というよりは、外的な要因が相対的に大きく影響している可能性もあるかもしれない。

例えば、本セミナーには自治体の教員等研修の一環として参加されている方が多いとい

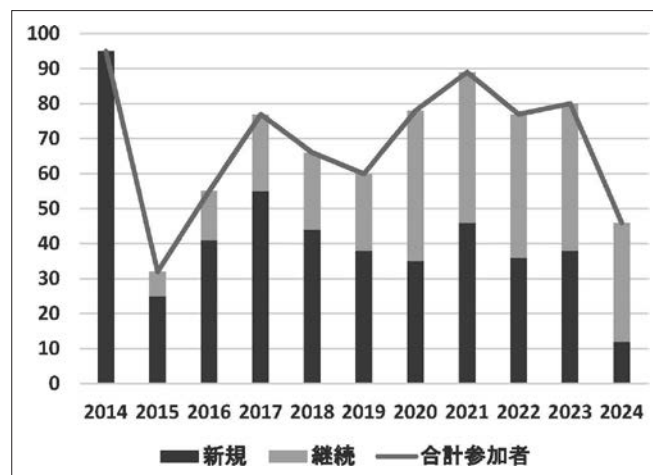


図18:「本郷学習科学セミナー」の参加者数の経年変化

う事実を勘案すると、学校における働き方改革の影響も小さくないのではないかと考えられる。学校における働き方改革は、平成31年1月の文部科学大臣メッセージをきっかけに始まったが、令和4年5月の教育公務員特例法の一部改正を受け、令和5年度から教員研修の運営の留意事項などの具体的な指針が示されたことで、各自治体等では研修体系の整理や研修参加の服務上の位置づけの見直しなど、実質的な取組が本格化したのではないかと推察される。

その一方、協調学習の授業づくりプロジェクトに参加する先生方からは、「短時間でよいので、自治体を超えて集まり、授業案を検討できるような場がほしい」、「教科や学年を超えた学びの重要性が見えてきているので、実践を報告して他教科や他校種の人から意見をもらいたい」といったお声もしばしばいただく。

こうした現状をふまえ、CoREFでは、令和7年度の実施にあたり、「原則毎月1回、土曜午後のオンライン形態による開催を定例とする」という形の見直しも含め、セミナーの持ち方を再検討していきたいと考えている。例えば、(3)に示したプログラムの4つの要素のうちでも、「Ⅲ. 学びの質を支える授業研究の実践」に属する、教科部会や実践報告は、前述のように多くのニーズがあるため、平日でも短時間で開催回数を増やした方が多くの方のニーズに応えられる可能性もある。

本セミナーが、様々な時代の変化に応じつつ、「授業改善ネットワークの核を育て、学習科学に基づく継続的な授業改善を支えるための自治体や学校の枠を超えた学びの場」として生かされていくために、今後も工夫を重ねていきたい。

5. UTokyoGSC-Next

(1) 事業の概要

UTokyoGSC-Nextは、科学技術振興機構（JST）による「次世代科学技術チャレンジプログラム（小中高校型）」事業の一環として東京大学が企画する理数情報分野における次世代人材育成のプログラムである。CoREFは平成29年度から本事業の前進となる小中学生対象の人材育成プログラム「ジュニアドクター育成塾」の実施担当を担ってきた。UTokyoGSC-Nextでは、東京大学で人材育成のための社会連携を担う「生産技術研究所次世代育成オフィス（ONG）」と協力してプログラム「第一段階萌芽コース」の企画運営等を担っている。プログラムの実施拠点は「日立教室」と「川口教室」の2箇所である。旧事業から継続し、「日立教室」ではNPO法人「日立理科クラブ」、「川口教室」では川口市教育委員会と「日本技術士会埼玉支部」と連携させていただき、シニア技術士人材ネットワークも活用しながらプログラムを実施している。

図19に示したのが、プログラムの全体像である。「萌芽コース」の目標は、受講生にSTEAM的な見方・考え方や自ら問いを立て協調して理解を深める資質・能力の基盤を身に付けてもらうことである。主体的・対話的で深い学びを促す「知識構成型ジグソー法」や、協調学習の授業づくりプロジェクトをとおして研究・開発してきた質の高い学習評価の手法やテクノロジーを活用・改善することで、目標達成と学校教育への還元も射程となっている。

(2) 事業と協調学習の授業づくりプロジェクトのつながり

コースの受講対象は理数情報分野に高い関心を持つ児童生徒に絞っているが、育成したい人材の具体像は協調学習の授業づくりプロジェクトで育てたい児童生徒像と重なっている。

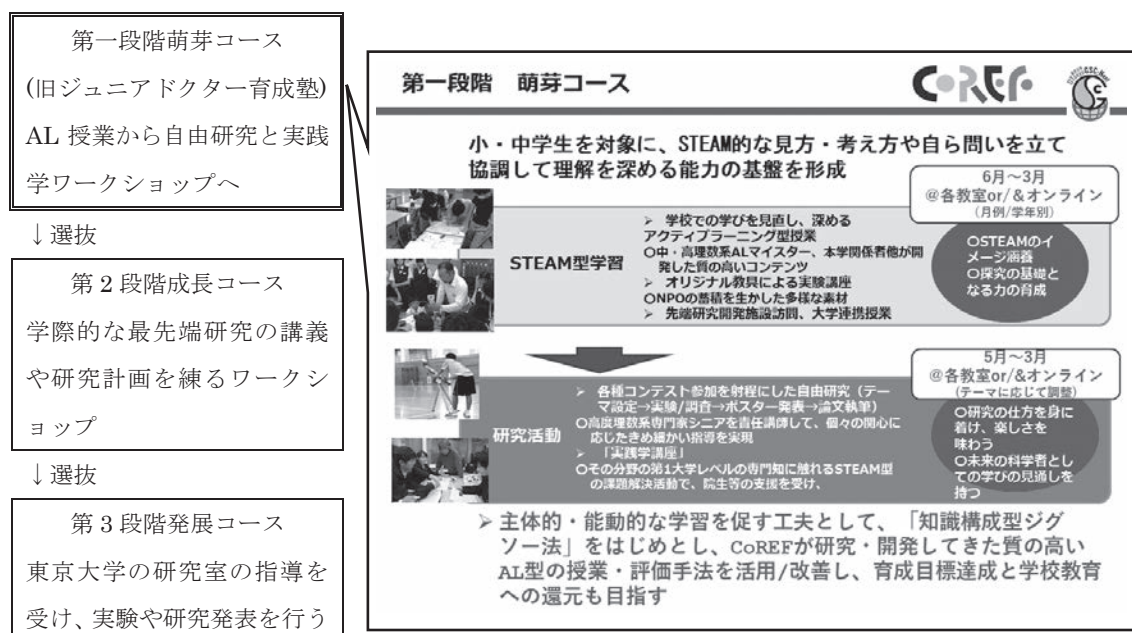


図19：令和6年度 UTokyoGSC-Next 企画概要

る。また、様々な地域で科学教室の実施などによる草の根教育支援に携わるシニア技術士人材ネットワークを活用する体制づくりの方針は、協調学習の授業づくりプロジェクトにおけるネットワーク・オブ・ネットワークスの考え方を応用したものである。

実践の蓄積も大いに活用させていただいている。例えば「選抜授業」である。プログラムの特性上、受講者の選抜を行うことがプロジェクトの要件になっているが、資質・能力の伸長可能性を見とることは簡単ではなく、できるだけ確かな見とりのためには、評価の目的いかににかかわらず、資質・能力を発揮しやすい、例えば「知識構成型ジグソー法」の授業のような状況で評価を行うことが望ましい。そこで誕生したのが「選抜授業」である。「選抜授業」では、受講希望者を対象に、STEAMを主題とする「知識構成型ジグソー法」の授業を実施し、前後理解比較と、「もっと知りたくなったこと」（発展的な問の発見）の内容、授業中の思考・対話の様子を参考に、受講受入を判断している。表27は「見とりの観点シート」を応用して作成した「大気圧」¹の評価規準である。1つの問題でも、評価の目的と文脈に応じた具体的な指標を設定することで、様々な資質・能力の見とりの機会となる。

「選抜授業」で開発した評価規準自体は必ずしも学校教育に即座に活用できるわけではないが、これまでの実践例の蓄積を「どんな資質・能力の発揮の機会、見とりの場になりうるか」という観点から検討することは、「指導と評価の一体化」の具体像について、私たちの視野を広げる機会となる。UTokyoGSC-Nextは次年度も同規模で継続の予定であるため、協調学習の授業づくりプロジェクトの成果や課題を少し違う角度から吟味し、次の展望を得るための実践の場として今後も取組を活用していきたい。

育てたい能力・資質	本時で期待する能力・資質の発揮のされ方	発揮の指標となる具体的な学びの姿（発話や記述）
知識理解面	科学や数学についての原理的な理解	① 水を沸騰させると水蒸気になる ② 空気には重さがあり、地表の物体を押している
	技術や工学と科学や数学の原理の関連についての理解	③ 以下の①～④をすべて踏まえた内容 ① 水を沸騰させると水蒸気になる ② 水蒸気になると体積が大きくなる ③ ふたをしたことで水蒸気が閉じ込められる ④ 急激に冷やされ水蒸気が水にもどり、容器内が真空になる ⑤ 周りの空気に押されて容器がつぶれる
	先端科学技術と人類・自然・社会の関連についての理解	「もっと知りたくなったこと」として、水の状態変化や大気圧の利用に関する事柄を記述している。 例) 生活のなかで、体積の変化で起こる現象には、ほかにどんなものがあるのか気になった
能力スキル面	協調問題解決力	グループワーク中の発話として、 「こういふこと？」「～って言ったよね」「…いふか」 活動として 話を聞きながらホワイトボードに図を描く
	科学的探究力	問題解決をとおして、新たな気づきや次に解くべき問いを見出し、表現することができる。
	プレゼンテーション力	問題解決過程において、情報や考えを他者にわかりやすく表現するとともに、他者の工夫した表現を見聞きして解釈できる
意識情意面	科学的なものの方、考え方（研究に対する倫理意識）	グループワーク中の発話として、 「やっぱりこうかも…」「でもこれだと…」「こういう場合は…」 ホワイトボードやワークシートを何度も消して書き直す グループワーク中に実験道具を見直す
	STEAMの学習や研究に対する高い意欲と関心	「もっと知りたくなったこと」として、水状態変化や大気圧を利用した製品の仕組みや開発に関する事柄を記述している。 例) 状態変化や大気圧を利用した道具を知りたい。

表 27：UTokyoGSC-Next 選抜授業の評価規準例（大気圧）

¹ 授業案等は、「理科 A202 大気圧」として付属 DVD に収録されている。

6. 今年度の研修実施状況

今年度 CoREF で実施した研修、講演等の一覧（全 170 回）を次ページの表 28～30 に示す（1 月以降のスケジュールについては 12 月末日時点での予定）。

研修のカテゴリ別内訳を見ると、最も多かったのが授業研究会の 73 回である。授業研究の開催形態の内訳を見ると、対面のみが 66 回（90.4%）と昨年度同様大部分を占めるが、それ以外に対面＋遠隔同期（校内の先生方が対面で授業研究を行うところに他校の先生方や研究者が遠隔同期で参加するような形態）5 回（6.8%）、オンデマンド＋遠隔同期（授業ビデオを事前視聴したうえで遠隔同期で研究協議を行うような形態）2 回（2.7%）と、それ以外の参加形態の会も 1 割ほど存在する。

次いで多かったのは、専門研修の 71 回である。専門研修には、第 2、3 節で紹介したプロジェクトの研究会や第 4 節で紹介した本郷学習科学セミナーのようなプロジェクト参加者を対象にしたものから、教育センター等が主催する希望者向けの研修まで含む。前者については、ビデオや対話記録を活用した授業研究の演習や子どもの学びのシミュレーションによる授業検討会、実践交流など、授業研究に関わる実践的な内容が中心である。後者ではそれに加え、授業体験を中心とした入門研修も含まれている。専門研修の開催形態については遠隔同期が 35 回（49.3%）と最も多く、次いで対面 28 回（39.4%）、対面と遠隔同期のハイブリッド 8 回（11.3%）と、対面がやや多くなった以外は、過去 3 年間ほぼ同じ割合である。

次いで多かったのは、10 回の校内研修、7 回の年次研修（初任者研修、中堅教員研修等）、2 回の管理職、1 回の指導主事研修である。これらの研修以外にシンポジウム等の一向けイベントでの情報発信を 6 回行った。

コロナ禍以降、研修の開催形態に着目した整理を行ってきたが、新しいスタンダードとして、専門研修は遠隔同期の形態が主流になってきたと言えそうである。特に教科部会ミーティングのような比較的短時間の会を、移動のコストを考慮せずに設定できるようになった点は、遠隔同期の恩恵であると言える。こうした開催形態の恩恵を最大限に生かすためには、今後例えば参加希望者同士がカジュアルに日程の調整を行うようなフレキシブルな開催方法もあわせて検討する必要があるだろう。第 4 節で扱った CoREF 主催の本郷学習科学セミナーについても、一部こうした開催方法も検討したい。授業研究会については、CoREF が講師として呼んでいただくような会に限って言えば、コロナ以前の対面形式が完全に復活した。他方、ネットワークを活用して複数自治体の先生方が遠隔で参加するような形式も引き続き活用されている。また、学瞰システム（詳細は、第 2 部第 4 章第 3 節）を活用することで、各学校でインフォーマルに行う授業研究の中には、リアルタイム対面以外の形態も増加してきているようである。授業研究の記録を活用した専門研修も含めると、先端技術を活用した授業研究の多様化も着実に進んでいると言える。

働き方改革の進展にあわせて、先生方が無理なく実をとれる研修を継続していけるよう、研修の在り方についても検討を進めていきたい。

第1章 協調学習の授業づくりプロジェクト 今年度の展開

番号	日時	主催	名称	主な対象	カテゴリ	形態
1	4月17日	埼玉県教育委員会	令和6年度 高等学校初任者研修 授業力向上研修Ⅰ	県内高等学校初任者	年次研修	対面
2	4月23日	広島県安芸太田町	安芸太田町らしい教育の在り方懇話会	町民	一般向け	対面
3	4月30日	埼玉県教育委員会	令和6年度 未来を拓く『学び』プロジェクト 指導主事研修会	指導主事	指導主事研修	対面
4	5月8日	九重町教育委員会	協調学習ミニ研修	町内教職員	専門研修	対面＋遠隔同期
5	5月14日	京都市立西院小学校	第1回校内授業事前研修会 第1部	校内教職員	校内研修	対面
6	5月15日	京都市立西院小学校	第1回校内授業事前研修会 第2部	校内教職員	授業研究会	対面
7	5月18日	CoREF	令和6年度 第1回本郷学習科学セミナー	関係小・中・高校教員／指導主事	専門研修	遠隔同期
8	5月22日	埼玉県教育委員会	令和6年度 高等学校初任者研修 授業力向上研修Ⅱ A	県内高等学校初任者	年次研修	遠隔同期＋オンデマンド
9	5月29日	江府町立奥大山江府学園	校内研究会	校内教職員	校内研修	遠隔同期
10	5月30日	品川区立八潮学園	第1回校内研究会	校内教職員	校内研修	対面
11	5月30日	京都市立西院小学校	第1回校内授業事後研修会	校内教職員	授業研究会	対面
12	5月31日	山形県立東桜学園高等学校	校内研修会	校内教職員	校内研修	対面
13	6月22日	埼玉県教育委員会	令和6年度 高等学校初任者研修 授業力向上研修Ⅱ B	県内高等学校初任者	年次研修	遠隔同期＋オンデマンド
14	6月7日	島根県教育委員会	令和6年度「授業力向上プロジェクト」協調学習に係るキックオフ会	県内で協調学習を推進する立場の教員	専門研修	遠隔同期
15	6月8日	New Education Expo 実行委員会	NewEducation Expo 2024 (東京)	主に教育委員会、小学校・中学校・高等学校の教員	一般向け	対面
16	6月11日	豊後高田市教育委員会	第2回 まなびの扉	町内教職員	専門研修	対面＋遠隔同期
17	6月15日	New Education Expo 実行委員会	NewEducation Expo 2024 (大阪)	主に教育委員会、小学校・中学校・高等学校の教員	一般向け	対面
18	6月18日	埼玉県教育委員会	令和6年度 埼玉中堅教諭資質向上研修	県内高等学校中期研修対象者	年次研修	遠隔同期
19	6月18日	安芸太田町教育委員会	令和6年度安芸太田町「学びの変革」推進協議会（加計中学校）	町内教職員	授業研究会	対面
20	6月19日	安芸太田町教育委員会	安芸太田町 T 授業研修会（戸河内小学校）	校内教職員	授業研究会	対面
21	6月22日	CoREF	令和6年度 第2回本郷学習科学セミナー	関係小・中・高校教員／指導主事	専門研修	遠隔同期
22	6月24日	清川村教育委員会	令和6年度「きよかわ学びづくり推進事業」における校内研究会（緑中学校）	校内教職員	授業研究会	対面
23	6月26日	埼玉県教育委員会	令和6年度「未来を拓く『学び』プロジェクト」示範授業（浦和一女高校・国語／地歴／外国語）	県内教職員	授業研究会	対面
24	6月26日	埼玉県教育委員会	令和6年度「未来を拓く『学び』プロジェクト」示範授業（大宮高校・国語／公民）	県内教職員	授業研究会	対面
25	6月26日	埼玉県教育委員会	令和6年度「未来を拓く『学び』プロジェクト」示範授業（蕨高校・理科）	県内教職員	授業研究会	対面
26	6月27日	静岡県総合教育センター	令和6年度静岡県総合教育センター主催研修「主体的・対話的で深い学び」を支える授業実践研修会（高田小学校）	県内公立小・中・高特支援学校教員	専門研修	対面
27	6月28日	豊後高田市教育委員会	「主体的・対話的で深い学び」を実現する学習・指導方法改善実践研修会（高田小学校）	校内教職員	授業研究会	対面
28	6月30日	独立行政法人国際協力機構 東京センター	2023年度教師海外研修（JICA 東京主催）	研修参加教員	専門研修	対面
29	7月1日	飯塚市教育委員会	令和6年度 飯塚市協調学習推進に係る研修会第1回	県内で協調学習を推進する立場の教員	専門研修	対面
30	7月4日	豊後高田市教育委員会	「主体的・対話的で深い学び」を実現する学習・指導方法改善実践研修会（戴星学園）	校内教職員	授業研究会	対面
31	7月12日	島根県教育委員会	令和6年度「授業力向上プロジェクト」第2回研修会（出雲高校）	県内で協調学習を推進する立場の教員	授業研究会	対面
32	7月17日	CoREF／品川区立八潮学園	学職システム導入研修	校内教職員	校内研修	対面
33	7月18日	クラーク記念国際高等学校	「知識構成型ジグソー法」研修Ⅰ	校内教職員	専門研修	遠隔同期
34	7月20日	CoREF	令和6年度 第3回本郷学習科学セミナー	関係小・中・高校教員／指導主事	専門研修	遠隔同期
35	7月22日	越前市教育委員会	越前市教育講演会	関係小・中・高校教員／指導主事	一般向け	対面
36	7月22日	豊後高田市教育委員会・九重町教育委員会・延岡市教育委員会	協調学習が結ぶ自治体を超えた繋がり！ 令和6年度第1回授業実践 研究協議	市町内教職員	授業研究会	オンデマンド＋遠隔同期
37	7月24日	新しい学びプロジェクト研究協議会 CoREF	令和6年度 新しい学びプロジェクト拡大研究推進員会（全体会・教科部会）	プロジェクト参加教員	専門研修	遠隔同期
38	7月29日	新しい学びプロジェクト研究協議会 CoREF	令和6年度 新しい学びプロジェクト拡大研究推進員会（教育長・担当者会議）	プロジェクト参加団体代表・研究推進担当者	専門研修	遠隔同期
39	7月30日	新潟県立教育センター	新潟中堅教諭等資質向上	県内小・中・高特別支援学校中堅教員	年次研修	オンデマンド
40	7月17日	静岡県立浜松湖東高等学校	校内研究会	校内教職員	授業研究会	対面
41	8月6日	浜田市教育委員会	令和6年度浜田市協調学習（知識構成型ジグソー法）研修会	浜田市内各小・中学校管理職及び教員	専門研修	対面
42	8月6日	豊後高田市立高田小学校	校内研修（学識システムを活用した授業作りについて）	校内教職員	授業研究会	対面
43	8月8日	埼玉県立総合教育センター	令和6年度県立学校等新任校長研修会（第2日）	県立県立高等学校等新任校長	管理職研修	遠隔同期
44	8月17日	CoREF	令和6年度 第4回本郷学習科学セミナー	関係小・中・高校教員／指導主事	専門研修	対面＋遠隔同期
45	8月19日	京都市立西院小学校	第3回・第4回分授業研究事前検討会	校内教職員	授業研究会	対面
46	8月20日	埼玉県立総合教育センター	令和6年度県立県立高等学校等新任教頭研修会（第2日）	県立県立高等学校等新任教頭	管理職研修	遠隔同期
47	8月21日	越谷市立北越谷小学校	校内研修	校内教職員	専門研修	対面
48	8月23日	東松山市立白山中学校	小・中合同研修会	校内及び近隣小学校教職員	専門研修	対面
49	8月23日	品川区立八潮学園	校内研修会（公開授業に向けた教材検討）	校内教職員	校内研修	対面
50	8月23日	島根県教育委員会	令和6年度「授業力向上プロジェクト」第3回研修会	県内で協調学習を推進する立場の教員	専門研修	遠隔同期
51	8月26日	豊後高田市教育委員会	第3回 まなびの扉	町内教職員	専門研修	対面＋遠隔同期
52	8月27日	豊後高田市立戴星学園	学識システムを使った校内研修	校内教職員	授業研究会	対面
53	8月27日	埼玉県教育委員会	令和6年度「未来を拓く『学び』プロジェクト」第2回教科部会Ⅰ	プロジェクト参加教員	専門研修	遠隔同期
54	8月30日	埼玉県教育委員会	令和6年度「未来を拓く『学び』プロジェクト」第2回教科部会Ⅱ	プロジェクト参加教員	専門研修	遠隔同期
55	8月30日	春日部市立江戸川小中学校	校内研修会（事前検討）	校内教職員	授業研究会	対面＋遠隔同期
56	9月9日	春日部市立江戸川小中学校	校内研修会（研究授業）	校内教職員	授業研究会	対面
57	9月9日	浜田市教育委員会	浜田市協調学習研究指定校公開授業（旭中学校）	市内教職員	授業研究会	対面
58	9月9日	島根県教育委員会	令和6年度「授業力向上プロジェクト」授業研究会（飯南高校・数学）	県内で協調学習を推進する立場の教員及び校内教員	授業研究会	対面
59	9月10日	島根県教育委員会	令和6年度「授業力向上プロジェクト」授業研究会（矢上高校・数学）	県内で協調学習を推進する立場の教員及び校内教員	授業研究会	対面
60	9月10日	安芸太田町教育委員会	協調学習研修（Basic）	町内教職員	専門研修	対面
61	9月11日	安芸太田町教育委員会	安芸太田町 T 授業研修会	校内教職員	授業研究会	対面
62	9月11日	品川区立八潮学園	第3回校内研究会（模擬授業）	校内教職員	校内研修	対面
63	9月12日	島根県教育委員会	令和6年度「授業力向上プロジェクト」授業研究会（矢上高校・地歴）	県内で協調学習を推進する立場の教員及び校内教員	授業研究会	対面
64	9月17日	島根県教育委員会	令和6年度「授業力向上プロジェクト」授業研究会（隠岐島前高校・地歴）	県内で協調学習を推進する立場の教員及び校内教員	授業研究会	対面＋遠隔同期
65	9月17日	島根県立隠岐島前高校	校内研修	校内教職員	専門研修	対面＋遠隔同期
66	9月18日	島根県教育委員会	令和6年度「授業力向上プロジェクト」授業研究会（隠岐島前高校・英語）	県内で協調学習を推進する立場の教員及び校内教員	授業研究会	対面＋遠隔同期
67	9月24日	豊後高田市教育委員会	豊後高田市打合せ及びマネジメント・リーダー研修会	県内で協調学習を推進する立場の教員／指導主事	専門研修	対面
68	9月24日	島根県教育委員会	令和6年度「授業力向上プロジェクト」授業研究会（津和野高校・国語）	県内で協調学習を推進する立場の教員及び校内教員	授業研究会	対面
69	9月24日	埼玉県教育委員会	令和6年度「未来を拓く『学び』プロジェクト」数学科部会における教科部会ミーティング	プロジェクト参加教員	専門研修	遠隔同期
70	9月25日	品川区立八潮学園	第4回校内研究会（公開授業）	校内教職員	校内研修	対面

表 28：令和6年度の研修実施状況一覧（1/3）

令和6年度活動報告書 第15集

番号	日時	主催	名称	主な対象	カテゴリ	形態
71	9月25日	京都市立西院小学校	第3回校内授業事後研修会	校内教職員	授業研究会	対面
72	9月30日	清川村教育委員会	令和6年度「きよかわ学びづくり推進事業」における校内研究会（緑中学校）	校内教職員	授業研究会	対面
73	9月30日	江府町立奥大山江府学園	校内研究会	校内教職員	授業研究会	対面
74	10月1日	埼玉県教育委員会	令和6年度「未来を拓く『学び』プロジェクト」数学会における授業研究会	プロジェクト参加教員	専門研修	対面
75	10月2日	埼玉県教育委員会	令和6年度 高等学校初任者研修 授業力向上研修 中間報告	県内高等学校初任者	年次研修	遠隔同期
76	10月3日	飯塚市立立岩小学校	校内研修	校内教職員	授業研究会	対面
77	10月4日	栃木県立高根沢高校	校内研修会	校内及び近隣小中高等の教職員	専門研修	対面
78	10月4日	延岡市立南方小学校	令和6年度延岡市立南方小学校「知識構成型ジグソー法」研究公開	市内教職員	授業研究会	対面
79	10月4日	埼玉県教育委員会	令和6年度「未来を拓く『学び』プロジェクト」理科部会における教科部会ミーティング	プロジェクト参加教員	専門研修	遠隔同期
80	10月5日	CoREF	令和6年度 第5回本郷学習科学セミナー	関係小中高教職員／指導主事	専門研修	遠隔同期
81	10月7日	鳥根県教育委員会	令和6年度「授業力向上プロジェクト」授業研究会（津和野高校・芸術）	県内で協調学習を推進する立場の教員及び校内教員	授業研究会	対面
82	10月8日	栃木県総合教育センター	令和6（2024）年度第2回学力調査結果活用説明会	関係小中高教職員／指導主事	専門研修	対面
83	10月9日	浜田市教育委員会	浜田市協調学習研究指定校公開授業（雲城小学校）	市内教職員	授業研究会	対面
84	10月10日	京都市立西院小学校	第4回校内授業事後研修会	校内教職員	授業研究会	対面
85	10月11日	鳥根県教育委員会	令和6年度「授業力向上プロジェクト」授業研究会（横田高校・地歴）	県内で協調学習を推進する立場の教員及び校内教員	授業研究会	対面
86	10月11日	埼玉県教育委員会	令和6年度「未来を拓く『学び』プロジェクト」理科部会における授業研究会	プロジェクト参加教員	専門研修	対面
87	10月15日	鳥根県教育委員会	令和6年度「授業力向上プロジェクト」授業研究会（益田高校・国語）	県内で協調学習を推進する立場の教員及び校内教員	授業研究会	対面
88	10月17日	久喜市立江面小学校	校内研修	校内教職員	授業研究会	対面
89	10月17日	鳥根県教育委員会	令和6年度「授業力向上プロジェクト」授業研究会（出雲高校・理科）	県内で協調学習を推進する立場の教員及び校内教員	授業研究会	対面
90	10月17日	鳥根県教育委員会	令和6年度「授業力向上プロジェクト」授業研究会（矢上高校・数学）	県内で協調学習を推進する立場の教員及び校内教員	授業研究会	対面
91	10月18日	鳥根県教育委員会	令和6年度「授業力向上プロジェクト」授業研究会（鳥根中央高校・数学）	県内で協調学習を推進する立場の教員及び校内教員	授業研究会	対面
92	10月21日	東松山市立白山中学校	校内研修	校内教職員	授業研究会	対面
93	10月22日	静岡県立浜松湖東高等学校	校内研究会	校内教職員	授業研究会	対面
94	10月22日	埼玉県教育委員会	令和6年度「未来を拓く『学び』プロジェクト」家庭部会における教科部会ミーティング	プロジェクト参加教員	専門研修	遠隔同期
95	10月23日	安芸太田町教育委員会	加計小学校親子合同学習・教育講演会（PTA 参観）	校内教職員／保護者	一般向け	対面
96	10月23日	埼玉県教育委員会	令和6年度「未来を拓く『学び』プロジェクト」国語部会における教科部会ミーティング	プロジェクト参加教員	専門研修	遠隔同期
97	10月24日	品川区立八潮学園	校内研修会（研究発表会ミーティング）	校内教職員	校内研修	対面
98	10月24日	飯塚市立飯塚小学校	校内研修	校内教職員	授業研究会	対面
99	10月25日	埼玉県教育委員会	令和6年度「未来を拓く『学び』プロジェクト」商業部会における教科部会ミーティング	プロジェクト参加教員	専門研修	遠隔同期
100	10月29日	埼玉県教育委員会	令和6年度「未来を拓く『学び』プロジェクト」公民部会における教科部会ミーティング	プロジェクト参加教員	専門研修	遠隔同期
101	10月30日	鳥根県教育委員会	令和6年度「授業力向上プロジェクト」授業研究会（浜田水産高校・英語）	県内で協調学習を推進する立場の教員及び校内教員	授業研究会	対面
102	10月30日	埼玉県教育委員会	令和6年度「未来を拓く『学び』プロジェクト」家庭部会における授業研究会	プロジェクト参加教員	専門研修	対面
103	11月5、6日	延岡市教育委員会	令和6年度 第2回幼保小中合同研修会（西階中学校）	市内教職員	授業研究会	対面
104	11月5日	久喜市教育委員会	Autumn OPEN DAY2024（江面小学校）	市内教職員	授業研究会	対面
105	11月5日	埼玉県教育委員会	令和6年度「未来を拓く『学び』プロジェクト」商業部会における授業研究会	プロジェクト参加教員	専門研修	対面
106	11月6日	埼玉県教育委員会	令和6年度「未来を拓く『学び』プロジェクト」国語部会における授業研究会	プロジェクト参加教員	専門研修	対面
107	11月8日	鳥根県教育委員会	令和6年度「新しい学びプロジェクト全国大会」鳥根県協調学習研究発表会（大田高校）	一般及びプロジェクト参加教員	専門研修	対面
108	11月9日	CoREF	新しい学びプロジェクト教科別研修会	プロジェクト参加教員	専門研修	対面
109	11月11日	埼玉県教育委員会	令和6年度「未来を拓く『学び』プロジェクト」公民部会における授業研究会	プロジェクト参加教員	専門研修	対面
110	11月11日	埼玉県教育委員会	令和6年度「未来を拓く『学び』プロジェクト」芸術部会における教科部会ミーティング	プロジェクト参加教員	専門研修	遠隔同期
111	11月13日	豊後高田市教育委員会	「主体的・対話的で深い学び」を実現する学習・指導方法改善実践研修会（高田小学校）	校内教職員	授業研究会	対面
112	11月13日	埼玉県教育委員会	令和6年度「未来を拓く『学び』プロジェクト」看護・福祉部会における教科部会ミーティング	プロジェクト参加教員	専門研修	遠隔同期
113	11月14日	鳥根県教育委員会	令和6年度「授業力向上プロジェクト」授業研究会（飯南高校・理科）	県内で協調学習を推進する立場の教員及び校内教員	授業研究会	対面
114	11月14日	鳥根県立飯南高校	校内研修	校内教職員	専門研修	対面＋遠隔同期
115	11月14日	飯塚市立立岩小学校	校内研修	校内教職員	授業研究会	対面
116	11月15日	飯塚市教育委員会	令和6年度 飯塚市協調学習推進に係る研修会第2回（椋本小学校）	校内で協調学習を推進する立場の教員	授業研究会	対面
117	11月18日	クラーク記念国際高等学校	「知識構成型ジグソー法」研修Ⅱ	校内教職員	授業研究会	遠隔同期
118	11月18日	埼玉県教育委員会	令和6年度「未来を拓く『学び』プロジェクト」保健体育部会における授業研究会	プロジェクト参加教員	専門研修	対面
119	11月18日	埼玉県教育委員会	令和6年度「未来を拓く『学び』プロジェクト」芸術部会における授業研究会	プロジェクト参加教員	専門研修	対面
120	11月19日	埼玉県教育委員会	令和6年度「未来を拓く『学び』プロジェクト」看護・福祉部会における授業研究会	プロジェクト参加教員	専門研修	対面
121	11月20日	鳥根県教育委員会	令和6年度「授業力向上プロジェクト」授業研究会（出雲高校・数学）	県内で協調学習を推進する立場の教員及び校内教員	授業研究会	対面
122	11月21日	安芸太田町教育委員会	令和6年度安芸太田町「学びの変革」推進協議会（戸河内小学校）	町内教職員	授業研究会	対面
123	11月22日	安芸太田町教育委員会	加計中学校 校内研修	校内教職員	授業研究会	対面
124	11月22日	鳥根県教育委員会	令和6年度「授業力向上プロジェクト」授業研究会（津和野高校・音楽）	県内で協調学習を推進する立場の教員及び校内教員	授業研究会	対面
125	11月22日	埼玉県教育委員会	令和6年度「未来を拓く『学び』プロジェクト」情報部会における教科部会ミーティング	プロジェクト参加教員	専門研修	遠隔同期
126	11月25日	埼玉県教育委員会	令和6年度「未来を拓く『学び』プロジェクト」外国語部会における授業研究会	プロジェクト参加教員	専門研修	対面
127	11月26日	安芸太田町教育委員会	簡賀小学校 校内研修	校内教職員	授業研究会	対面
128	11月27日	安芸太田町教育委員会	加計高校 校内研修	校内教職員	授業研究会	対面
129	11月27日	品川区立八潮学園	第5回校内研究会（研究発表会ミーティング）	校内教職員	校内研修	対面＋遠隔同期
130	11月28日	安芸太田町教育委員会	戸河内小学校 校内研修	校内教職員	授業研究会	対面＋遠隔同期
131	11月29日	埼玉県教育委員会	令和6年度「未来を拓く『学び』プロジェクト」情報部会における授業研究会	プロジェクト参加教員	専門研修	対面

表 29：令和6年度の研修実施状況一覧（2/3）

第1章 協調学習の授業づくりプロジェクト 今年度の展開

番号	日時	主催	名称	主な対象	カテゴリ	形態
132	11月30日	CoREF	令和6年度 第6回本郷学習科学セミナー	関係小・中・高校教員／指導主事	専門研修	遠隔同期
133	12月3日	飯塚市立飯塚小学校	校内研修	校内教職員	授業研究会	対面
134	12月6日	埼玉県立上尾特別支援学校	「知識構成型ジグソー法」を用いた公開研究授業	校内及び県内特別支援学校教員	授業研究会	対面
135	12月16日	栃木県立高根沢高校	「知識構成型ジグソー法」公開・研究授業及び研究協議会	校内及び近隣小・中・高等学校の教職員	授業研究会	対面
136	12月19日	島根県教育委員会	令和6年度「授業力向上プロジェクト」授業研究会（出雲高校・数学）	県内で協調学習を推進する立場の教員及び校内教員	授業研究会	対面
137	12月20日	豊後高田市立戴星学園	校内研修	校内教職員	授業研究会	対面＋遠隔同期
138	12月21日	CoREF	令和6年度 第7回本郷学習科学セミナー	関係小・中・高校教員／指導主事	専門研修	遠隔同期
139	1月6日	豊後高田市教育委員会・九重町教育委員会・延岡市教育委員会	協調学習が結ぶ自治体を超えた繋がり！ 令和6年度第2回授業実践 研究協議	市内教職員	授業研究会	オンデマンド＋遠隔同期
140	1月8日	越谷市立北越谷小学校	校内研修	校内教職員	専門研修	対面
141	1月9日	川口市教育委員会	令和6年度川口市高等学校教職員研修	校内教職員	専門研修	対面
142	1月14日	安芸太田町教育委員会	令和6年度安芸太田町「学びの革新」推進協議会（安芸太田中学校）	町内教職員	授業研究会	対面
143	1月15日	安芸太田町教育委員会	安芸太田町 A 授業研修会（加計小学校）	校内教職員	授業研究会	対面
144	1月16日	島根県教育委員会	令和6年度「授業力向上プロジェクト」授業研究会（益田翔陽高校・英語）	県内で協調学習を推進する立場の教員及び校内教員	授業研究会	対面
145	1月17日	品川区立八潮学園	研究発表会	区内教職員及び校内教職員	授業研究会	対面
146	1月17日	豊後高田市教育委員会	令和6年度「新しい学びプロジェクト全国大会」豊後高田市協調学習研究発表会（高田小学校、戴星学園）	一般及びプロジェクト参加教員	専門研修	対面
147	1月18日	CoREF	新しい学びプロジェクト教科別研修会	プロジェクト参加教員	専門研修	対面
148	1月18日	CoREF	令和6年度 第8回本郷学習科学セミナー	関係小・中・高校教員／指導主事	専門研修	遠隔同期
149	1月20日	埼玉県教育委員会	令和6年度「未来を拓く『学び』プロジェクト」地歴部会における教科部会ミーティング	プロジェクト参加教員	専門研修	遠隔同期
150	1月21日	埼玉県教育委員会	令和6年度「未来を拓く『学び』プロジェクト」保健体育部会における教科部会ミーティング	プロジェクト参加教員	専門研修	遠隔同期
151	1月21日	埼玉県教育委員会	令和6年度「未来を拓く『学び』プロジェクト」商業部会における教科部会ミーティング	プロジェクト参加教員	専門研修	遠隔同期
152	1月22日	埼玉県教育委員会	令和6年度「未来を拓く『学び』プロジェクト」外国語部会における教科部会ミーティング	プロジェクト参加教員	専門研修	遠隔同期
153	1月22日	埼玉県教育委員会	令和6年度「未来を拓く『学び』プロジェクト」家庭部会における教科部会ミーティング	プロジェクト参加教員	専門研修	遠隔同期
154	1月22日	埼玉県教育委員会	令和6年度「未来を拓く『学び』プロジェクト」理科部会における教科部会ミーティング	プロジェクト参加教員	専門研修	遠隔同期
155	1月24日	延岡市立南方小学校	令和6年度延岡市立南方小学校「知識構成型ジグソー法」研究公開	市内教職員	授業研究会	対面
156	1月25日	新しい学びプロジェクト研究協議会 CoREF	令和6年度 新しい学びプロジェクト第2回教科部会	プロジェクト参加教員	専門研修	対面＋遠隔同期
157	1月27日	島根県教育委員会	令和6年度「授業力向上プロジェクト」授業研究会（松江東高校・理科）	県内で協調学習を推進する立場の教員及び校内教員	授業研究会	対面
158	1月27日	埼玉県教育委員会	令和6年度「未来を拓く『学び』プロジェクト」芸術部会における教科部会ミーティング	プロジェクト参加教員	専門研修	遠隔同期
159	1月28日	埼玉県教育委員会	令和6年度「未来を拓く『学び』プロジェクト」情報部会における教科部会ミーティング	プロジェクト参加教員	専門研修	遠隔同期
160	1月29日	九重町教育委員会	校内研修（東飯田小学校）	校内教職員	授業研究会	対面
161	1月29日	埼玉県教育委員会	令和6年度「未来を拓く『学び』プロジェクト」看護・福祉部会における教科部会ミーティング	プロジェクト参加教員	専門研修	遠隔同期
162	1月29日	埼玉県教育委員会	令和6年度「未来を拓く『学び』プロジェクト」国語部会における教科部会ミーティング	プロジェクト参加教員	専門研修	遠隔同期
163	1月29日	埼玉県教育委員会	令和6年度「未来を拓く『学び』プロジェクト」数学部会における教科部会ミーティング	プロジェクト参加教員	専門研修	遠隔同期
164	1月29日	埼玉県教育委員会	令和6年度「未来を拓く『学び』プロジェクト」農業部会における教科部会ミーティング	プロジェクト参加教員	専門研修	遠隔同期
165	1月30日	京都市立西院小学校	第6回校内授業事後研修会	校内教職員	授業研究会	対面
166	1月31日	延岡市教育委員会	令和6年度 延岡市学校教育研究所 常任研究授業研究会（旭小学校）	市内教職員	授業研究会	対面
167	2月5日	埼玉県教育委員会	令和6年度 高等学校初任者研修 授業力向上研修	県内高等学校初任者	年次研修	対面
168	2月8日	大阪教育大学附属平野小学校	令和6年度研究発表会	関係小・中・高校教員／指導主事	一般向け	対面
169	2月16日	独立行政法人国際協力機構 東京センター	JICA 総括研修	研修参加教員	専門研修	対面
170	3月8日	CoREF	令和6年度 第9回本郷学習科学セミナー	関係小・中・高校教員／指導主事	専門研修	対面＋遠隔同期

表 30：令和6年度の研修実施状況一覧（3/3）